

私本太平記

新田帖

吉川英治

青空文庫

おおえやま
大江山

不破から西は、一瀉千里の行軍だった。この日すでに、足利軍五千は、湖畔の野洲の大原をえんえんと急いでいた。

「都へ着いても、おそらくは食糧難か」

と、三河仕立ての輜重隊をひきつれていたのである。たくさんな牛車や馬列はいつもおくれがちで、ムチを振る足軽たちは、顔まで泥のハネにしていた。

伊吹では、道叢が、加盟の証にと、自己の兵二百を加勢にさし出していたし、その難関をこえてからの高氏は、まったく、何の屈託もなさそうに見えた。いま行く道こそこの人の本来の面目であったように、しきりと前後の将へ、馬いきれの中で、はなしかけたりしていた。

「暑いなあ。このぶんでは、いくさは夏戦になるだろうよ。なあ直義」

「は」

「あすからは、夏支度にかえようわい。伊吹とはまるで季節がちがうようだ。都の内は、

なお暑かろう」

「ことしは^{うるう}閏のうえ、はや四月も半ばですから」

「^{こよみ}曆のうえも忘れて来た。おおあれは^{みかみやま}三上山、そのてまえは鏡山だな。するとここらは

天智天皇が^{みかり}御獵のあとか」

「さればで」

と、いったのは、直義と駒をならべていた^{いまがわのりくに}今川範国で、言下に、万葉のひとつを、
駒ひびきのあいだで、高吟していた。

あかねさす

むらさき野ゆき

しめ野行き

野守りは見ずや

君が袖振る

すると高氏もすぐ言った。

「君が袖振る！ ……。^{かがみしゆく}鏡の宿には、上杉と細川がわれらを待ちかねているだろうぞ」

そこの古駅は、まもなくみえた。先づれが一騎、早くにつたえたとみえ、^{しゆく}宿の入口

までくると、上杉憲房のりふさと細川和氏かずうじのふたりが迎えに立っていた。

こう二人は、先に高氏の秘命をおびて、矢作やはぎから鏡へ先発していたものである。そして、
 この歌野寺のうちで、宮方の密使と出会い、

後醍醐ごたいごの綸旨りんじ

をうけていたのであった。

こんな手順は、彼の鎌倉出奔いぜんに取られていたのはいうまでもないが、その仲介者はたれなのか。「梅松論」以下の書にも、それはたれとも明記はしてない。しかし前後の事情からみて、おそらくは、かの岩松経家の弟吉致よしむねあたりの才覚ではなかったかとおもわれる。

いずれにせよ、高氏のむほんは初めから独走して起ったものではない。やはり後醍醐の綸旨をうけ、それによつて、こころざしを遂げようとしたものだ。

が、宮方にすれば、彼の幕府離反は、まぎれない彼の勤王精神とみたであろう。そこで、あらゆる困難の中を、鏡の宿まで、勅の密使をくだして来たものにちがいない。——ただ、後醍醐に後醍醐の理想があつたように、高氏にもまた高氏のいづく未来図があつたのだ。それは元々、似ても似つかぬ理想であつたし、初めから妥協の余地もないものだった。

四月十六日。

はやくも、高氏以下の軍は、洛中へ入っていた。

廢墟。都の今はそれにつきる。

大内の森や里内裏さとたいりにも、住まうお人はいなかった。

平家都落ちのむかしとて、こんなではなかったらう。焼けのこった公卿館や死の町の一角はみえるが、昼も人影は稀れで、ふと生き物の声がすると思えば、犬が子を産んでいる。

そのくせ、夜になると、夜の闇は不気味な脈を生き生きと打ち出して人間のうごきを感じさせてくるのであった。あらゆる悪と兇暴がその中でおこなわれているらしい。また敵とよび合う者同士が嗅覚きゆうかくを研ぎあつて諜報の取りやりもしているらしい。しかし草ばかり野の禽獸きんじゆうの生態みたいに、眼に見えるものではなかった。

「これが都か」

足利軍五千は、当座、二条の河原へかけて、野陣した。

予期に反して、入京早々にもと覚悟していた合戦もなく、張りあいのないくらいな無人の曠野に、ふた晩ほどは、大かがりを焚き、その焰の下で兵は言った。

「この都には、薪だけは、有りあまるわ！」

六波羅ろくはらからは、さつそく両探題の名で、着陣のよろこびを言つて来た。

高氏は会わず、直義と師直が会つた。使者の口こうふん吻からも、六波羅側ろくはらがわでは、ここまでの高氏の行動については、まだなにも知つてないふうだし、疑つてもいらないらしい。

もつとも、六波羅の苦境は、いまや想像外なものようだ。——そのご叡山の山門勢力を手におさめていた大塔ノ宮は、虚きよをついては、六波羅をなやましぬき、淀、山崎方面の赤松勢も、いぜん執拗しつごうにくいさがつて、六波羅ノ守備を、ほとんど手薄にさせている。

また。千早、金剛の楠木も、関東の数万騎を引きよせたまま、いよいよゆるぎもせぬという。

そのうえ、はるか伯耆船上山ほうきせんじょうせんの行宮あんぐうからも、千種ちくさノ中将忠顕ただあきが、山陰中国の大兵を組織して、丹波ざかいから洛中をうかがつていた。いや或るときは、赤松勢と共に市街地まで突入して、五条大橋をも焼き落したほどだった。——からくも、それは撃退しえたものの、いくたび、六波羅側は、同様な危機に瀕していたことやらしれない。

だから六波羅とすれば、高氏の到着は、唯々、
「援軍来たる！」

の、よろこびだった。

つづいて、なか二日おいての四日めには、名越尾張守高家の七千余騎の入京を見、また同時の鎌倉令をうけた地方武族も、五百、七百、あるいは千と、ぞくぞく諸道から会合し、たちまちこの新手は、精銳二万余騎とかぞえられた。

ところで、総大将の名越尾張守はまだ若かった。北条一族中での名門であり、曠はれの総そ帥うすいの名に氣負つてもいた。高氏は、その着陣早々に、じぶんのほうから彼の陣を訪ねて行つた。そして、ことばも低く、

「諸事、おさしずを」

と、指令を仰いだ。

「む、両探題も加えて、作戦には、遺漏いろうなきを期したい。足利どのも、明日は同道されよ」と、尾張守は高氏を誘い、その日は共に六波羅に向いた。

そのあとで、直義は氣をもんだ。もし尾張守高家が上洛途上で、矢作やはぎの事件からすべてを看破かんぱしているとしたら？——兄高氏は六波羅の内で手もなく逮捕されてしまうにちがいない。そう案じられたのだった。

「いや」と、師直もろなおは見通していた。

「尾張殿はまだお若い総大将。かりに道中で異いな風聞をお耳にしても、そこは、伊吹の道

誉が、ていよく申しくるめたことにちがいありません」

「む、そうは思うが？」

直義はなお、不安でならず、万一のときには、どうするか。上杉憲房や三河党の面々とも計って、夜すがら、対岸の六波羅を、注視していた。

だが、杞憂きゆうにすぎなかった。翌日のひる、高氏は、つつがなく川向うから帰ってきた。

——六波羅での軍議は、夜どおしであったと語り、万端の打合せもすんだと言った。そして、

「協議のすえ、尾張どのの本軍を大手と呼び、われらの軍勢は、からめ手を行くものとす
る」

と、沙汰ぶれさせた。

直義は愁眉しゆうびをひらいた。どうやら、これまでのことは、名越軍も六波羅でも、まったく感知していないらしい。天のたすげぞと思われた。なお、偶然でもあったのは、この数日のあいだに、高氏ならぬべつな離反者が出て、六波羅側を、てんどうさせていたことだった。

それは、東軍の一将、奥州白河の結城光広ゆうきみつひろの子、親光の一軍で、さきごろから狐きつねが

河^わの辺で敵の赤松勢と対峙していたが、俄に旗を巻いて、宮方^{とう}へ投じてしまったものである。

その余勢で、前線の一角では、毎日のように逃亡兵が出ていたので、六波羅から関東勢のうけた衝撃は、一にも二にも、

「裏切り者の結城めが！」

であった。しぜんその一方へのみ注意も憎しみも向けられていたのである。そしてまさか、前^{ぜん}執^{しつ}権^{けん}の妹^{いも} 聶^{とむこ}の高^{たか}氏のふところにも、後^ご醍^{たい}醐^ごの綸^{りん}旨^じがかくされていたなどは、疑^うつてみる者すらもなかつたのだ。

着京の日から九日め。

名越尾張守は、その本軍七千余騎のうえに、^{ほんぐさ}「三本傘」の旗のぼりをみせて、

「さきをとるぞ」

とばかり、はや前線へ出ていった。いわゆる「大手の軍」とは、敵の主力へあたることである。若い総大将の彼みずからが、のぞんで行った戦場だった。

本軍を見送って、やや小半日の後、高氏もまた、

「したくがよくば」

と、馬を陣前にやって、貝を吹かせた。

彼が前線へひきつれた兵力は、当初の五千だけだった。あとの数千は、後備として、いや意識的に、洛内へのこして行つたものだろう。

とまれ、からめ手軍の足利勢は、大手の軍勢とはやや方角を異ことにして、北野から洛外ぎかいの山添いを、丹波口のほうへゆるぎ出していた。

が、その日は合戦なし。

そしてあくる日、桂川の一端へ、兵馬をならべ立てたが、なお高氏はうごかなかつた。

——すでに下流の久我こがなわて暇いとやら淀方面では、終日、敵へ挑いどむ本軍の雄おたけびがしていたが、彼は、やがて赤々と沈む陽をただ見ていた。

夜半。全戦場。

一ときしいんとなつた。

そのさいの高氏を、古典「太平記」では、

からめ手の大将 足利殿は桂川の西の端に下り居て 酒もりしてぞ おはしける
といっているが、どんなものであろうか。

彼の一刻一刻は今、あらわに態度を示そうか、もすこし待とうか。生涯の運を賭けた機微なわかれめといつてよい。

床しょうぎ凡しやうぎのまま、一碗わんの酒を仰飲あおるぐらいはしたかもしれない。が、おそらく酒もりと呼べるような酒など酌しやくみあう余裕あゆはなかつたとみられよう。

下流の大手軍、名越尾張守からは、いくたびとない伝令で、
「総たうがかりは、明朝辰こくノ刻こく（午前八時）。おぬかりあるな」

と、念に念をおすように、つたえて来ている。

下流にある主力と上流側面軍との両方から、淀、山崎にわたる敵を同時に打つ申しあわせであったのだ。で、いつでも桂川を渡と渉しやうする陣容は成っていた。

ところが、宮方の赤松勢は、はやくもこれを知っていたようである。ことによつたら高氏の手の者がそつと密報していたかもしれない。いずれにしろ赤松勢は逆に、夜もまだ明けぬうち、下流の名越尾張守の陣地へ、奇襲をかけてきたのだった。

附近は、久こがなわて我こがなわて躰こがなわてにちかい野で泥田が多く、地理にくらい東軍は、大混乱におちいった。このごろの合戦によく使われる新手な乱波らんぱの聲こゑがここでもさかんに用いられて――

「大塔ノ宮が叡山を下りた」、
「洛中にも敵が入った」、
「いやいや、味方の裏切りだ」

などとたれがともない流言るげんが、寝ぼけまなこの兵のなだれを、いやが上にも吹き惑わせた。こうなると、ひとかどな武士までも、かえつて、味方が足手まといとなつて、軍の機能は、まったく寸断といつたかたちである。馬ぐるみ、深田へ落ちこんで、日頃の名だたる将も、あえなく、雑兵たちの槍さきにたたき伏せられたり、まるごと、一軍団のなだれが、追いつめられて、藪やぶ川かわの底を埋めるなど、ありえないほど無造作にあまたな人命が夜明けのつかのまに失われていた。

ここに、赤松一族の者で佐用さよノ三郎範家のりいえというのがあつた。

日ごろ、この界隈かいわいの野伏をかたらつて、乱波組らっぱぐみ（第五列）をつくり、放火とともに、敵の中へ混み入るのを妙としていた男だが、この朝も、狐きつね河がわから鳥羽とばへのあいだで、ふと目ざましい大将姿が六、七騎で落ちてくるのを見つけ、ただ一矢のもとに、木蔭からその将を射落した。

元来彼は郷里の佐用さよでも鷹たかの範家のりいえといわれる弓の上手であつたが、射落したこの日の鷹は、敵味方をわきかえらせた。ころげおちた將の放れ駒には「三本傘からかさ」の金貝かながいを摺すつた鞍くらがおかれてあり、この鞍といい、また花曇子はなどんすのよろい直垂衣ひたたれや、おびていた鬼丸の太刀も、名越尾張守高家のものにちがひなかつた。

主力の、しかも総大将が討たれた。——とわかつたので、朝霧の引くように、全軍の関東勢が乱離らんりとなつて逃げ薄れたのはぜひもない。しかし副将足利高氏の上流軍は、まだ健在のはずである。そのため、上流へ落ちて行く兵も少なからずあつた。——時に、高氏はもう桂川を西へ、渡渉にかかり出していた。

五千の人馬は、橋みたいに、桂川を二つに見せた。

そこから下流は水の色も変り、対岸は白いしぶきでけむり立つた。——直義、師直たちも、水を切つて、

「殿、殿」と、さきに駆け上つたひとを追っかけていた。

高氏が振返つた。その姿も、雫しずくだった。何か、二人から不安そうな注意をうけていたが、「すてておけ」

と、聞き流し、

「大事な、大事な」

とばかり、彼は、もつと先の諸將のあいだへ、駒をすすみ入れて行つた。

「よいかしら?」

直義は、不安らしく、まだ後方をふりむいていた。

大事な

よくいう兄の口ぐせである。だが、うしろからは、下流で敗れた本軍の名越勢の残兵が、かなりな数、この軍を味方と信じて、たよるように、くつついて来るのであった。

「とんと、お胸はわからぬ」と、師直もつぶやいた。「が、あの大腹中は、あとになってみると、いつも無策ではおざらなんだ。われらが取り越し苦労にはおよびますまい」

直義も近ごろそれは信じている。兄の馬群をすぐ追った。やがて、ばくばくたる土ぼこりで、かぶとの耀かがやきも、よろいの色も、黒い怒濤となつてゆく。

不審な？

と、このとき早や誰かは感づいていいはずだった。——なぜならば、夜来やらい、足利軍のまえにも、重厚な敵陣はしかれていたので、これだけの兵馬が川を渡つて来るあいだ、敵から一ト矢のひびきもないのはなぜか。

あるいは、敵の計はかりだろうか。引きよせてつつむ法もなくはない。しかし、それなら高氏に、それらしい予見があるろう。こう緩々かんかんと、無人の境きょうでも行くようなのは、何とも怪しむべきかぎりであった。

やつと、一部の将士が、この点に気づき出したときは、高氏以下、人馬の流れは、桂川

の西、松尾寺の山ぎわから、北へ転じて、大江越えの山坂を前に仰いでいた。

「さてよ。これやこのまま従ついては行けぬぞ」

摂津の人、奴可ぬかの四郎は、戦友の中吉なかぎり十郎を押しとめて、俄に、おもての色を変えた。

「足利殿その人も、この軍勢の様子も、心得ぬことばかりだ。おぬしどう思う？」

「もしやと、おれもさつきから疑っていた。問わずもがな、ふた心にちがいないわ。さりとて、ただ引つ返すのも業腹ごうはらしごく至極。あれゆく高氏の姿に、狙い矢一つ射て立帰ろう」

「よせよせ。しよせん、敵かたわん。こつちは小勢だ、命あつての物だねよ。引つ返して、このよしを六波羅へ告げ知らせるこそ、おれどもの急務であろう。おういつ、もどれ、もどれ」

この二将は、わざとおかれて、手の者三、四百をまとめ、大江山の麓からどつと元の道へ駈け去つたのだ。そのため、これを動機に、全軍も大いに揺れ、諸所で逃げ出す者も少なくなかつた。が、高氏は「大事な、大事な」としてしているように、振向きもせず、駒おは、老ノ坂おいさかへかかつていた。

老ノ坂は、昔の大江の関せきの址あとである。酒吞童子しゅてんどうじの首塚がある。またよくよくこの地は天下反覆はんぷくの人物に縁がある。

後の天正年間に、桔梗きぎようの旗を、西にあらざ、本能寺へ行けと、京のあかつきへ指さした光秀も、ここ老ノ坂を踏み、いま、道順は逆だが、高氏が越えるところも、老ノ坂だ。そこから一里で、丹波篠村しのむらへ着くのである。すなわち足利家の飛び領で、大江山そのものも、篠村領に入っている。

篠村の領家りょうけには、長々、今日の時節を待つていた引田妙源やそのほかがいた。また一色右馬介について、これまで、さまざま働いてきた者どももいた。どれも熱いうるみを眼にもつて、高氏を迎えあつた。

とまれ、その日はすぐさま、大江山一帯の陣地構成がいそがれた。例の、源氏相伝そうでんの白旗も高々とひるがえされ、ここに初めて、時の世上へむかつての、足利家の「旗幟きし」はあきらかにされたのだった。

高氏は、国じゅうの武士へ、即日、触れふさせた。

すぐ馳せ参じろ。

篠村へ集まれ。

この期ごに姿を見せぬやつは、未しじゅう用いまいぞ。

こう申すは勅命でもある。

繪旨りんじをいただいでのことだ。かしこくもわが足利家へ、かくべつな、おたのみたるによつて、ここに義戦の旗を上げる。ゆく末、よい世に巡り会いたいなら、父子、叔父甥おじおい、かたらいあつてみなやつて来い。

こう、つたえ聞いて、大江山の陣場は、日ごとに人数を加えていた。

いまもつて、ふんべつもつかず迷つていた者、日和見ひよりみでいた輩やから、野伏、半農、そうした者は多かつたらしい。みなサビ刀やボロ具足に、身なりの恰好をつけて、

「ご陣の端に」と、小者は小者なりに、一個の運を、これへ賭けてくるのであつた。

そんな中に、郎党二百人もつれた、久下くげ弥三郎やさぶろう時重ときしげなるものがいた。笠じるしに、ただ太く、「一」と書いてあるのがめずらしかつたので、高氏が、

「元からの家の紋か」

と、たずねたところ、時重の答えには、

「さようです。家の先祖、武蔵の久下二郎重光が、頼朝公のお旗上げのさい、土肥とひの杉山へ一番にはせ参じたところから、御感ぎよかんによつて、一と賜わつた重代じゅうだいの紋にございまする」

とあつたので、高氏は、

「それは、めでたい。当家にとつても吉瑞だ」

と言つて、ひどくこれをよろこんだという。これをみても、彼の自負が、ひそかに自己を頼朝の再来に擬していた理想のほどもうかがわれようか。

けれど、続々集まつてきた武士どもには、綸旨のしめす王政復古も、高氏のいだく未来図も、問うところではなかつたのだ。彼らはただ天下大乱のなかに泳ぎ迷っていた濁流の群魚にすぎない。また多くは世に不遇だつた不平武士でもある。そしてそれらの下積み武士の不平をたれよりも身に知つていたのは高氏だつた。

五月。雨期に入る。

が、ことしは梅雨も少ない。

ただ、ここの兵力だけは、梅雨の大河のように刻々とその勢いを増していた。

十人の筆役（書記）を使つて、毎日、新参の武士どもの氏素姓を名簿に書きあげていた兵事奉行の吉良貞義は、

「いや、驚き入りまする」

と、高氏の床几所へ、その簿を持つて報告にくるたびに、こういうのが常だつた。

「わずか十日にもみたぬまに、御軍勢は今日にて、一万をすこしこえました。はや倍加し

たわけにござりまする」

「ちと、ふえすぎたな」

「なんで多すぎるといふことがございましょうや」

「したが、兵庫氷上の高山寺ひょうごひかみ こうせんじに拠よつていた一派の宮方武士などは、ついにこれへは参

加せず、山越えにて、鞍馬方面へ移り去つたと聞くではないか」

「さようで——」と、吉良は恐縮していった。「二度も高山寺へ使いをやって、呼びかけましたが、その足立、荻野、小島、和田、位田いんでん、本庄などの輩やからは、大言のみ吐はきおりまして」

「なんと」

「たとえ足利殿たりと、人の下風につくは面白からず、と」

「そういつて、ほかへ移つてしまったのか」

「おろかな奴どもでございまする」

「いや、そうでない。そういう輩やからこそ、我には欲しいさむらいどもだ。いたずらに、このあたまかすだけで、有頂天うちようてんにならぬがいい。……とところで」

と、高氏の胸は、さまざま、忙しそうであった。

「うちあわせのため、山崎に在る赤松円心の許もとへつかわした今川、仁木の両名は、すでに帰っておるのに、直義はまだもどらぬ。どうしたものか」

「その御舎弟ごしやていには、千種ちくさの頭とうノ中将 忠顕ただあき卿きょうへ御会見のためまいられたこと。千種ちくさの御陣地は、淀の川向う男山附近とあれば、おもどりも一兩日はおくれましょう。お案じにはおよびますまい」

「これからは、いくさにつけ、諸事につけ、いちいち事の運びは公卿相手だ。上杉は付けてやったが、武辺のほかは、公卿振りも知らぬ直義、つつがなく、使いをすましてくれればよいが」

高氏は、吉良へも洩はならさなかつたが、ここ刻々な憂慮は、ほかにもある。——たとえば、六波羅が高氏の叛旗はんきに大恐慌をおこし、急遽、その守りに、思いきつた非常手段をとりつつあることなど、目に見えるようなのだ。

とくに彼がおそれていたのは、鎌倉の再援軍でもなく、六波羅固めの逆茂木さかもぎでもなかつた。——千早をかこんでいる関東の二万余騎が、千早をすてて、河内野からうしろへ廻つてくることだ。そうなれば、男山附近の千種忠顕を大将とする官軍などは、まっさきに蹴ちらされるものでしかない。それも読めずに日を送っている公卿大将が心もとなくなつてなら

ないらしい。

が、翌日。彼は直義の姿を見た。

その直義と、叔父の憲房のりふさは、あらまし復命をすまずと、千種の陣から同道してきた一人の武将を高氏のまえにひきあわせた。

「これは」

と、背のずんぐり低いその武将は、与えられた床しょうぎ几いへかけて、

「足利殿でおわするか。それがしは備後の住人、児島三郎高德たかのりと申し、副将として、千種どのをたすけ、目下、男山の陣に在る者にござりまする」

と、中国訛なまりそのまま、朴ぼくとつなあいさつをしてみせた。

名を聞くのも、高氏には初めてな人だった。

しかし、千種殿の副将にえらばれたほどなら相当な武者ではあろう。また、伯耆ほうぎのみかど後醍醐の信任もあさからぬ人物であるにちがいない。

さて、高氏が礼を返して、

「ご用命は」

と、いうのに対して、児島三郎高德はまず言った。——さつそくな貴所のお使いにむく

いて、自分はその御返礼使にこれへ遣つかされたにすぎぬものと、前提して、

「千種殿には、すぐさま船上山の行宮あんぐうへ、足利歸順きじゆんのよしを、奏上いたしおかん、と大そうな御満足。なお以後の軍いくさには、万事官軍とひとつになって、めざましきご忠勤あるようにと、すなわちここに」

と、当座の感状と共に、預かつて来た一旒りゆうの錦旗を高氏へ直接さずけた。

高氏には高氏の心のなかの旗がある。しかし彼は錦旗をかるんじるものでは決してない。うやうやしく拝受した。そして領家の奥に席をうつし、あとは高德をねぎらいながら雑談に入っていた。

高氏は彼とのはなしで多くのものを習まなびとつた。

伯耆の船上山の御座おましには、名和長年なるものが守備に当たっていること。そして後醍醐には隠岐脱出かくぎだつしゅつらしい、いよいよ意気おさかんで、大山だいせんの祈祷の壇に、みずから護摩ごまを焚たいて七日の「金輪こんりんノ法ほう」を修せられ、

北条討伐

のお祈りもすさまじく、都への還幸をかたく期して、しかもなお、そこを大本營ともなして、諸州の宮方へ、親しく軍議の令もおさしずしているおすがたでもあるという事。

いやみかど以上に、いまや氣負うているのは、千種の頭ノ中将殿（それ以前は少將）でと、高德はなお言つた。

「——中将どのは、つまり帝のご還幸の露払いとして、山陰山陽の兵二万余騎を擁し、この四月頃から六波羅攻めを開始されておりますなれど、いかんせん、お公卿さまです。われら武人の意見は、なかなか用いてはくれず、さんざんな敗北をくりかえし、ために兵力も半減し去つて、意気もおとろえ果てていたところへ、ご当家足利勢のお味方と聞え、俄に、士氣をもり返したようなわけでござりまするわい」

「が一方には、赤松勢という精銳がお味方のはずだが」

「さ、それも」と、高德はふと眉をひそめた。「一こう千種殿との折合いが悪く、功をきそつてばかりいて、これまでは、互いに勝手戦略のありさまでしたが、いやもう以後の行動は一致しましょう。ご当家も加わり、日を期して、三道の三軍一せいに六波羅攻めと、かたい戦略の立つたことでもおざれば」

高德は、まもなく、淀南岸の自分の陣地へ歸つて行つた。

なるほど、公卿には信頼されそうな武將であつた。その心にみえる朴とつな武人氣質や朝廷を思う一途な意気もわかつて、高氏は、それにはそれへの尊敬をもつた。また副將の

彼の苦しい立場にも同情した。

こうして翌々日。五月七日の寅ノ刻（午前四時）といわれる。

篠村八幡に勢揃いの貝が鳴った。大江山諸所の兵は、ここ一つところに集められた。勢揃いと共に、

「戦勝の祈願もかねて」

と、高氏はそこを、旗上げの地とえらんだのだ。

神だのみを事とする彼でもないが、篠村は、むかし源義経の所領地であった。またこの八幡宮は、源頼義が参籠して、四方の兇徒を討ち平げ、諸民を安からしめたという縁起がある。その縁起もよい。

寅の一天（午前四時）といえば初夏でもまだ暗かった。社は小さい。祈願が行われるあいだ、万余の兵は村道から森にあふれ、肅と、黒い霧の下に濡れ沈んでいた。

禰宜（神職）の振る鈴の音、かすかな燎火、そして拍手のひびきなど、遠くの兵たちにも淡くわかった。

やがてのこと、

「妙源、願文を」

という高氏の声がきこえる。

願文四百余字の漢文体のそれは、かねて命をうけた引田妙源がしたためておいた物。

高氏は、神前へすすんで、

「ウヤマ敬ツテマウ白ス。祈願ノ事」

と、奉書の冒頭から、次第に、音吐おんとをたかめて行つた。

ソレ八幡大菩薩ハ

聖代前ゼンレツ烈ノ宗廟ソウベウ

源家中興ノ靈神也レイジンナリ

黒い霧のなかの者は、わからぬまでも、耳をすまし、気を澄すましあつた。

漢文四百字はかなり長い。

だが高氏の声はつかれなかつた。何かへ、迫らずにいないものがあつた。そして、いよいよ朗々と、声に汗をすら思わせてゆくうち、

……将二マサ、コノ義戦二

神モ靈威カガヤヲ耀カシ給ハバ

神光、劍二代ツテ

一戦ニ勝ツコトヲ得ン

シカモ丹精ハ誠ニアリ

誤ル莫ラン

元弘三年五月七日

源朝臣高氏

敬白

と、特にわが名へ初めて、朝臣と名のりかぶせて、読み終るとすぐ、

「筆を」

と、弟の直義から筆をうけとつていた。そして花押をそれに加え、背のえびらから上差の鐮矢一トすじ抜きとつて願文に添え、神殿のまへの壇に納めた。

それに、ならつて。

舎弟の直義も、一トすじの矢を壇にささげて拝をおこない、以下一族の吉良、石堂、一色、仁木、細川、今川、荒川、高、上杉などみな順次に奉納矢を上げたので、祭壇は、矢の塚になった。

さいごに、ここで高氏は、

「一色右馬介に、一番の矢を命じる。右馬介、旗上げの祝い矢いたせ」

と、その名誉を、彼に、名ざした。

右馬介は十年の苦もむくわれて、じんと全身熱くなつた。引きしぼつたかぶら矢はうなりを曳いて雲間に破軍の笛をふいた。と共に、一万余の諸声もろごえが、三度、山こだましてあかつきを揺りうごかした。――すでに高氏の駒をつつんだ旗本たちの影は流れをなして、社前から大江の山道を発している。

王子、老ノ坂は、またたく越えた。ひがしには大きな日輪が霧の海を敷き、桂川も洛中も、白い霧の下でしかない。ただ目をさえぎるものは、この人馬こんじきに驚いて、金色の中をしきりに翔かけちがう飛天の山千禽やまちどりだけだつた。

ろくはらぜ 六波羅攻め

六波羅もすでに強力な備えに入り、これまでにない決意の相そうを偵知のうえで呑みなくされていた。全兵力を洛外の防禦線に配して、庁内の皇居の守りに、わずか千余騎を、内に残してただけだつた。

こうして何と索さく莫ばくな……。

逆にこの六波羅の府は、颯風の目をおもわせるようなひそまりをたたえ、夜来、人もかがり火も疲れきった色で七日をむかえかけていた。わけても、

北の探題、越後守北条仲時

南の左近将監北条時益

の二人は、困憊そのものの姿にみえる。

いずれも、庁の大庭に床几をおき、ほんの夜明け前の一ときを、眠るがごとく眠りえぬがごとく、腕ぐみのままでいたにすぎず、それもたちまち、

「大物見か」

と、仲時がつぶやいた一ト言に、一方の時益も、ぴくりと顔をあげていた。

乾門の外に、一隊の馬たけびをのこして、前夜、大物見に出た先から、本庄鬼六がこれへ帰って来たものだった。

「鬼六か、待ちかねていた。敵のけはいは？」

そういう両探題の前に、鬼六は、部下の偵察網から次のような判断を打出して報告した。敵は、三方にみられる。

本軍はもちろん男山八幡の方面にあつた千種の中将与、児島高德の約一万で、たれや

ら後醍醐の皇子のうちの御一名を上にいただき、小幡^{こばた}、竹田方面から、六波羅の背後を突くかたちと見て間違いない。

第二軍の赤松円心には、先ごろ寝返った結城勢も加わっておよそ四、五千だが、たびたび洛中突入の経験もある猛気の兵だ。少ないとて、あなどれない。そしておそらくこれは東寺^{とうじ}から九条口へかかるだろう。

ところで。その出かたに、全然、予見がつかないのは、第三軍とも呼びうる——そしてもつとも憎い怖るべき——足利高氏の叛軍で——老ノ坂をこえて、山崎道へ出るか、桂川へ旋回するか、これはどうも……と、鬼六は口をにごして、

「いまのところ、まだ、なんとも申しあげられませぬ」

と、復命をむすんだ。

「よしつ、また出てもらおう。休息しておれ」

そのあとは、両探題ともまた、だまりあつて、今日の作戦図の中に苦慮していた。といつても、これ以上加えるなんの策も今はない。ただかえすがえすも「足利」という名^{のろ}が呪われてくるばかりだが、それとて一時の驚愕などはとうに通りすぎて、

「高氏の首を梟^かけずにおくまいぞ」とは今や六波羅中の合い言葉であり憤怒^{ふんぬ}であつた。

「北殿つ。ちよつと、おいで下さいませぬか」

すると。いちど立ち去つた鬼六が、何事かまた、戻つてきた。

北の越後守仲時は、振向きざま、

「なんだ？ 鬼六」と、彼のことばをいぶかった。

鬼六は、告げた。

「例の、おうちもん 門の内にいる毛利時親とやらしい怪態けたいな老兵学者が、どうしても、お目にかかりたいと、獄ごくを叩いて、わめきおります。……あの吐雲齋とうんさいとも申す老いぼれでございませうが」

それは両探題とも、あたまから忘れていた人間だが、

吐雲齋とうんさい、毛利時親

と聞けば思い出される。

あれは四月の初めごろか。検断所の兵が、

「洛中うかがを窺いに出て来た正成の師にして千早の軍師吐雲齋なる者を、引つ捕えてまいりました」

と近くの羅刹谷らせつだにから、しよつ引いて来たものだった。

調べてみると、その怪異な老人はすこぶる能弁で、探題の前でもたかく持じしてくだらず、正成の幼時に兵学を教授したことはあるが、千早の籠城などには一切関知してないといひ、その理由として、自分は元々、北条一族の者である、鎌倉へ問い合せみよ、と大言を払ひつて怯ひるまなかつた。

すでに洛中は「赤松焼き」に会つて、諸所に焦土をただらし、六波羅中も戦争以外何をかえりみているいとまない中だったので、

「ひとまず、櫓おうちもん門の内へ入れておけ」

と、監禁を命じ、吐雲齋のことは、さつそく鎌倉表へ問い合せを発したものの、そんな一風ふうらいしん来人の身元調査に、今どき、手間暇かけて返へんちよう牒だしてくるはずもない。つまりは相互で忘れ放しになつていたのである。

「鬼六。その老いぼれが、会いたいと吠えるのか」

仲時は、床しやうぎ几ぎを立つた。次いで、

「将監どの。ちよつと見てまいる、時も時だ、何を訴えたいと申しおるのか」

と、一方の床几を振向いたが、時益はなんの興味もないらしい。ただうなずいてだけ見せた。

だが仲時には今、ワラをもつかみたい気もちがある。偽者にせよ本物にせよ、とにかく、聞くだけはその言を聞いてみよう。と、鬼六を先に樗門の内へ大股に入って行った。

その大きな一棟は、獄屋作りになっている。

かつての日には、後醍醐と三人の妃が、押しこめられていた獄舎の一部だ。——そこにいまは、かの忍ノ大蔵にあざむかれた吐雲齋の毛利時親が、茶いろの眸を、らんと研いで、太い獄格子に、つかまつっていた。

「おうつ、やつと来たか。……若い方だな。すると、北の探題か」
なるほど、白髪もばさと、声には鬼気があつて、寄りつき難い。

仲時はすぐ悔いた。

が、狂人へするような、あのあいまいな温顔に似た顔を作つて。

「されば、身は北の北条仲時だが、なんぞ、このほうに？」

「おうさ」と、吐雲齋は相手のことばも奪いとつて「なぜ、もそつと早く、これへ見えなかつたか。ばかな大将だ、おなじやつて来るものなら」

「ついいま聞いたものを、これ以上早く来ようはない」

「なんのなんの。そこらの武者ばらへ、わしからは、何十ぺん、探題へ告げよと言つてあ

るかわからん。とき早や遅しじや。六波羅の守りもいまは危なかるうがの、苦しかるうがの」

「老人」

「わしには名がある」

「吐雲齋」
とうんさい

「なんじや」

「さまでとは、いつたい、何を本心申しのべたいのか」

すると、吐雲齋は、

「何をいう。身のためではない」

と、むツつり顔して、だまりかけたが、また。

「探題には、まだ疑っているのか。ここにおける兵学者へ、なぜ早くに教えを乞わぬか」

「策を問えとな」

「そうじや」

「いくさの妙策があるというのか」

「あらいでか！ 大言と聞いたかしれぬが、孫呉そんごから大江流の兵学も究めた者とお告げし

であるはずだ。しかるに下手な戦のみくり返して、これへ物問ものどいにも来ぬ両探題は、ばかか、うつげか、気が知れん」

「……ふうム？」

仲時は、獄中に光つてみえる茶いろの眸を見て唸うなった。——やはりこれは狂人だ。耳をかす値打もない、と。

が、獄中の眸は仲時の惑いなど意にしているふうでもなかつた。吐雲斎の言は、彼自身の悶もたえらしいのだ。だから狂語でもなし、嘘でもない。

つまりは骨の髄ずいまでの古兵学の権化ごんげなのだ。獄にいても、彼は日夜、退屈は知らないのである。朝夕、身近に来る雑武者から全戦場のいろんなことを聞きほじっていた。足利の叛旗もすでに知っている。そして夜来やらい異常な六波羅中の空気から、今日の危機までよくその膚はだで感知していた。

また、たびたび彼が探題へ面会を求めていたのも事実である。抑えようもなく胸中に湧いてくる必勝の策を、たんなる兵理でなしに実戦に行わせてみたいからだ。官軍賊軍、いづれが、どうだというのでもない。ただそれだけのことなのである。しかしそれは彼の千載一遇せんざいぐうであり彼のたましいを燃やすに足るものではあつた。

「探題、探題……。聞いておるのか」

「む、聞いておる」

「ちと、手おくれだが、ここを三日ささえ得れば、六波羅はかならず保つ。おそくはない、手配をいそげ」

「どう、いそぐ」

「わずか千早の城一つに、去年こぞいらい、関東二万余騎を金剛山の下に釘づけにされているなどは、愚の骨頂だ。六波羅の一令にて、なぜこれへ呼び返さぬか」

「……………」

「いや、楠木が暴れ出よう、追討ちかけよう。また寄手よせての十二大将、阿曾あそ、金沢、大仏、淡河おちう、二階堂道蘊じょううんなどは、みな北条歴々の大将ゆえ、指令に従わぬとでもいう惧おそれか」

「……………」

「阿呆あほうやな、もし六波羅が落ちたら、どうなるのじゃ。六波羅はいま、新帝こうごんてい（光厳帝）の皇居でもあろうによ！ ……なぜ勅命を仰がぬか。勅とこなを唱えて、金剛山の囲みを解かせ、その二万余騎を一せいに、河内野から洛中へ振向け、一手は敵の千種軍へ、一手は赤松勢へ。すべて横、後ろから突きくずせ。また足利勢のごときも一兵たりと内へ入れるな。」

……たとえ楠木が追討ちかけて来たところで、千早の兵は、たかだか一千。平野へ出したら、一トつかみの木の葉を撒いたほどでしかない……。それが恐くて、うごきがつかぬとは。あはははは、ばかな軍だ。ワハハハハ、ようも暢気な大将が揃うたものだ」

いかに半狂人の言としても、吐雲齋の悪罵は聞きづらい。無礼きわまる。

だが仲時は正直おどろいた。いうことはよく当っている。六波羅の弱点について、兵法の理にも外れていない。

ただしかし、自分たち六波羅の主脳が、彼の指摘したような点に、全然無知でいたとするなどは、まちがいである。それだけをのぞけば、一つの大きな抜かりを彼もはっと気づかせられたことは否みえなかつた。それは、

なぜ勅をもつて、六波羅の令に代えぬか！

の点だつた。

なにぶんにも、金剛山の寄手にある諸大將は、みな北条幕府の歴々たちであるために、六波羅の令などは、とかく軽んじられていた。まして、軍に關しては、

探題などに何がわかる？

の風でしかない。

元々、探題職は平和時の半文官だし、越後守仲時も若年の人なので、現地の老將軍や頑將をうごかすには、どうしても、いちいち鎌倉の府を通し、鎌倉の指令としなければ行われぬような状態にあつたのだ。しかもいまはそんなまどろい機能など用もなさない。——仲時は天来てんらいの声を享うけたように、すぐ飛んで帰ろうとした。一刻もはやく、時益ときえきと諮はかつて、その事を行おうと、とつさに、思い立ったからだつた。

すると、獄の裡うちから、

「やあ、仲時殿待て」

と、吐雲齋がふたたびどなつた。

「わしの言を容いれるのか、容れないのか。だまつて立去る法はあるまい」

「むむ、そちの忠言をむだにはすまい。よいことを聞かせてくれた。さつそく皇居へ伺つて、勅をいただくことにする」

「ならばこの吐雲齋を、獄から出せ。胸にはなお、いくらでも秘策がある。両探題の蔭の軍師となつて進しんせようわ。獄を開ける、出してくれい」

「いやそのことは、一存でまいらぬ。南の左近將監にも諮はかつて、のちほど解かせる。かならず解かせよう。暫時ざんじ、待たれよ」

言いすてて、仲時は庁へ走り戻つて来た。ときに早や白々明けの下で、南の左近将監時益以下は、庁の大庭で朝の兵糧をとつていた。

仲時は、彼との立話で、吐雲齋の言つた一策について協議した。そして時益も同意のもとに、すぐその足で、六波羅北殿の方へ、わき目もふらず駈けて行つた。

その一郭かくには、三月十二日の合戦いらい、北条氏の奉ずる光厳こうこん天皇をはじめ、以下の公卿百官が、こぞつて避難してきたため、大内の皇居はいまや、そのままここに移された恰好だつた。

さはいえ、新帝のほかにも、父の後伏見法皇、叔父の花園上皇、東宮、皇后、梶井に二品親王ほんしんのう（光厳の弟）までも、みなお一つにここへ難をのがれ、むかし平家一門が栄えたあとの法領ほうりょうしん寺殿や池殿いけどの、北御所などに御簾ぎよれんを分けておられたのである。そのそれぞれには、侍かしずく上達部かんたちべがあり、お末の小女房だの六位ノ蔵くろうど人たちもいることなので、仮の宮苑とはいいいながら、その優雅みやびも麗わしさも、あわれ嵐に打たれたものでしかなく、あるまじき、ごつた返しの宮居みやいを描いていたのであつた。

後醍醐の軍勢が来る！

千種、赤松、足利が、三方から攻めて来る！

今朝はこの仮御所も、池殿の御簾ぎよれんから公卿溜りまできようきよう恟々とおののいていた折も折であつたのだ。

「おお、探題が」

と、公卿たちは、恃たのむ人の姿を見たので、たちまち仲時をとりかこみ、そして口々に、

「いくさは？」と、模様を問い、

「ここは大事あるまいか」

と、さまざま、性急な質問を浴びせかけた。

仲時も、当惑顔のほかなく、

「ま、おしずまりください」

と、左右をなだめ、

「仲時がこれにありますからには」

と、わざと落着いてみせ、しかる後、堀川ノ大納言へ、次のような奏請そうせいを仰いだ。

「火急、金剛山にある寄手にたいし、勅令をお発しねがいとうぞんじます。——即刻そ

この囲みを解いて、千種、赤松、足利の敵に当れ、と」

「えっ？ 軍令を」

坊城ノ宰相が、おどろきを面にみせた。

「天皇にそんな機能はない。前例としても、朝廷が直接、軍令を出すなどいうためしは」
「いや！」

仲時は、力をこめた。

「ぞんじております。……なれどこの危急を超えて勝つには、それ以外にみちはありませぬ。遠い鎌倉の令を仰いでいたのではまにあいませぬ」

「どうしたものか？」

公卿溜りでは、左大弁資明や鷲尾中納言まで加えて、協議に首を寄せあつめていたが、ほどなく三条の源大納言ひとり、法領寺殿の法皇と上皇の許へうかがって、やがて、みゆるしをえて来たらしい。詔をささげて退がって来た。

「かたじけのうぞんじます」

と、仲時は勅を拝して、押しいただき、

「これによつて、河内の二万余騎は、すぐ六波羅の援けに引返しましょう。そのあいだ、あるいは敵影の近々とせまることもございませうが、ここだけはあくまで静かに、ご籠城をねがわしゅうぞんじます。万一にも、ここの皇居に混乱が生じましては、はや収

拾もつかぬことに立ちいたりますれば」

くれぐれも、仲時は、公卿一同へ言いのこした。それほどに、この仮皇居を、六波羅の内に抱えていたことは、目前の大決戦を果たすうえに、大きな負担であつたには相違ない。それからすぐであつた。

勅をおびた六波羅の密使は、大和口から金剛山のふもとへ早馬を飛ばして行つた。——すでにもう陽は高まりかけ、六波羅諸門へは、前線からの物見知らせが、ひっきりなしに敵の行動をこれへつたえていた。

さきに本庄鬼六の報でも、

今暁、なお不明

と、いわれていた足利高氏のうごきも、ようやく、その出方がわかつてきた。

大江山をまだきに降りた高氏の一手は、山崎へ出ず、桂川を渡つていた。そして嵯峨から内野方面へ翼をひろげ、その本陣を神祇官（太政官の一庁）附近において、東南遠くの六波羅の府にたいし、すでに戦鬪態勢に入つたということであつた。

高氏に対する六波羅方の憎しみは想像以上なものがある。

その朝。——二条大宮から下七条へまで充満していた六波羅の陶山備中、斎藤玄

基、こうのつしまのかみ河野対馬守などの諸将は、

「憎さも憎し、高氏の首を見ずにはおくまいぞ。這奴一人さえ討ち取れば、赤松勢も怖れるに足らず、公卿大将の千種など、追わでも腰がくだけ去ろう」

と、異様なまでの鬨ときの声を、何べんとなく揚げていた。

なおまた、五条辺に後詰ごづめしていた糟谷三郎宗秋かすやきぶろうむねあきの軍や、上加茂方面からも、六角時信の兵がじりじり寄せて、

「足利を。ただ足利を突け」

「期して、高氏を討て」

と、するようなかたちを厚く作ってきた。

このさかんな意気に出会って、高氏は、いかに六波羅方が自分への反撃に燃えているかを知り、それへぶつかるのは得策でないと思つた。

彼は神祇官じんぎかんの附近を床几場とし、弟の直義をそばにおいた。直義が血気な突撃に出かぬないので、あんに抑えていたのである。

吉良、今川、細川の各部将は、まず分別もある者と、それらには安心して部署をまかしておいていいとしている。

だが、直義に劣らない逸り気の将校はほかにも多い。仁木義勝、石堂綱丸などは、とかく功名あせりをしそうである。斯波、畠山、高なども目が放せない。で、そういう荒武者の統御には、上杉憲房を副将の資格で上に据えてあるのだった。

「……始まったな」

と、高氏はその五体で全戦場の響きを聴く。

馬けむりが揚げる砂塵と音響を交せて、各所に始まった戦端は、そのまま五月の空に映写される。焼けあとのほこりは黒く舞い立ち、大路や野原の戦いは黄いろいつむじを吹き起す。

「兄者」

直義は、気が気でない。

「二条方面の敵、六角勢が、あなどり難い勢いのようです。援けを引つ提げ、一撃を加えてまいりましょうか」

うん、ともいわず、高氏は野面や焼けあとの空を見ていたが、独り言のように言っていた。

「大事な、大事な……」

喊かんせい声や矢さけびの急きゆうにも似ず、どの方面も半日の駈引きは、あらまし小合戦で日が暮れた。そして夜に入ると、不気味さはいや増して、地獄の火みたいな赤い光が、五月の闇の彼方おちこち此方に綴つづり出された。

夜半ごろから小雨こさめともいえない小雨がシトシト天地を濡らしていた。

高氏は、床几を退いて、神祇門じんぎもんの廂ひさしの下に、つかのまを、まどろんでいたが、

「おうつ、深草あたりだ」

「伏見、山崎、竹田の空までも、真つ赤に見ゆる」

と、口々に言い騒ぐ兵の声に、ふと目をさまして見ると、なるほど、洛外の西から南へかけて、燎原りょうげんの火ともいえる炎の波がえんえんと横に長く望まれた。疑いもなく、友軍の千種ちくさ、赤松の二タ手が、互いに、六波羅突入の一番の功を争いあっているものと思われた。

みじか夜だ。すぐ明けてくる。

八幡やわた、山崎、竹田、宇治、勢多せた、深草、法勝寺などにわたる夜来やらいからの赤い空は、ただまつ黒なものとなり、小雨はやんで、東山のみねには、かつてこの世へ現わしたこともな

いような色をした不吉な太陽が、のつと顔を出していた。

「暑くなる」

高氏は、神祇門の下で、悠長にも、大よろいを解いて、よろい下着を一枚脱いでいた。

「兄者。お綿入れは脱がずにおいたほうがいいでしょう」

「なぜ」

「矢防ぎになりまする」

「あたる矢なら——」と高氏は笑った。「のど首へでも、真額にでも中るだろう。大事

ない、大事な」

「いかさま」

直義は、だまつた。

しかし彼には自分のうなずきもじつはよく分つていない。いったい、兄は臆病なのか、その逆なのか、と。

これだけの精銳をもち、また天下に義戦の叛立をとえながら、さらに積極的な戦術には出たがらないのだ。

で、あげがた。直義は、帷幕の面々と共に、即時、総がかりの開始をと、高氏の床几へ

せまつたものである。

ところが、高氏は依然、

「待て待て」

と、ばかりであった。そして、

「まだちと早い」

と、うごく気色けしきもないのである。

理由を問えば、こうなのだ。

千種忠顕も赤松円心も、おそらくは六波羅おと陥しの一番乗りを心がけているのだろうが、そんな目先の手柄は彼らにくれてやってもよいではないか。

むしろ、欲しい者には、誇らせておけ。

とにかく、播磨はりまの円心入道などは、たれより早く洛内突入の旗をすすめ、身を挺して、多くの犠牲も払っている。

それをついきのう起つた足利勢に、横から功を奪われてしまつては、円心の顔が立つまい。武門の意地でも、彼はここを一期ごと、部下の屍かばねをいくら積んでも惜しまぬ腹にいるものだろう。

また友軍の一方の人は、公卿大将の千種殿だ。これまた、円心におかれては、自身のかんにかかわるような氣位きぐらいで、ありもせぬ兵略や猛氣をふるツているものと思われる。——そのため友軍二タ手が先を争い合つて、やたらに民家へ火をかけちらし、無二無三多くの兵を死なしているにちがいない。

おろかなことだ。犠牲はぜひがないとしても最小限にとどめねばならぬ。あまつさえ罪もない民家をあんなに焼き払うなどはちと氣狂い沙汰だ。——ゆくすえ世の上に立つて民治を考えるものが、あのような狂暴を民衆の前に演じてみせるなどは、みずからその無資格を衆へさらすにひとしい愚であらうに——高氏は言つて、

「一朝ちようの軍功などは、何の、彼らにまかせておけ。高氏には、より以上、兵が大事だ、後日が大切だ。六波羅もはや死相がみえている。われらの六波羅入りは、ゆるゆる、三番乗りでよからうわい」

と、一同をなだめたままでもいたわけだが、もちろん直義たち幕僚の将には、何ともジリジリするような我慢以外なものではなかつた。

こことはちがい、洛南洛西方面の様相は、きのうも今日も、激烈をきわめていた。

はじめ六波羅方では、対足利の陣に重点を布しいたらしいが、その足利勢はたいした戦意

でなく、かえつて千種ちくぎ、赤松の連合軍が、しばしば突破口を作つて、九条や月輪つきのわあたりまで兵火に煙らせて来はじめたので、

「今は」と急に、兵力の配備をかえ出していたのであつた。

そのうごきを今、高氏の本陣神祇官しんぎかんの大屋根の上から、物見の者が、いちいち、視野に拾つて、

「敵の陶山すやま、河野、斎藤の三陣のうち、陶山勢の一陣は、九条方面の加勢になだれ行きまする」

と下へ告げ、つづいて、

「六角勢の一部も、加茂川の向うを、大和口の方面へ、大きく移動しつつあります」
とも、どなつている。

これを高氏が耳にしたのは、初夏の烈日も、いつかすぐ曇つて、東山一帯に、雲の帯がまたどんよりと降りさはじめた午後のむし暑い草いきれを感じる頃だつた。

「直義つ」

大きく呼んで、

「鉦かねだつ、進撃する、総がかりの早鉦を打たせろ」

「かかりますか」

答えもせず、高氏は、

「馬を」

と、すぐ跨またがって、

「師直は、側にあれ。斯波しば、桃井は前に立て。大伍や綱丸もつづいて来い」

と、自分を中心に円えんを作つて駈かけ出していた。

陣じん鉦かねの乱打が地をつつむ。

高氏も直義の影も、はじめて、戦いくさぼこりの中に薄れ込んだ。

その乱軍の中で、

「あれは五郎左の子だな」

ふと、高氏の目に入った若者がある。

鎌倉の大蔵屋敷おおくらに留守としておいて来た設楽しだら五郎左衛門の子、権之助であった。

一瞬。彼のあたまを、「留守に残してきた幼い千寿王やら妻の登子とうこは？」と、遠くのもの、流星のようにかすめていた。

奇妙な幻覚だった。こんな中で思いもしなかったことである。思惟でも思慕でもありえ

ない。

ぶんと、敵の中から、まだら羽の矢が一本、彼の体のどこかに中あたつた。

高氏は覚えもしない。

草摺くさずりにも、折れ矢が立っている。いつかだいぶ深く入っていたのだ。横にもうしろに

も、敵方の武者声がする。

そのうちに、

「足利殿の旗もと、大高二郎重成つ、敵将河野対馬の子通こうのつしま治みちはるを討ちとつた」

と、どこかで聞えた。

濛々もうもうと剣の光も土ぼこりで煙つてみえる。その口の手勢のくずれは、あきらかだった

が、さらに驟雨のような一陣の敵の長柄隊を、焼け跡の一角に見たので、高氏は、

「あれは交かわせ」

と、急に駒をめぐらした。

その転陣の先へ、設楽五郎左の子権之助が、敵将斎藤玄基げんきの首をひっさげて来て彼の見

参んざんに入れた。

もちろん、足利方でも、このわずかなまに、数百の死傷は出していた。雲の低い夕方で

ある。暗くなるのが早かった。

峠とうげ

そのころ羅生門方面のたたかいても惨烈をきわめていた。まっかな光焰こうえんと黒けむりのうちに、昨日からでは千をこえる敵味方の屍かばねが方々にすてられたままで、焦こげたり踏みつけられたり、収容のひまもなく屍に屍をつみかさねていた。

寄手は東寺とうじを本陣とするわずか四、五千の赤松勢であったのだが、これがすばらしく強いのだった。友軍の千種ちくさ、足利にもおくれを取るなどの武者気質かたぎから、死傷のかずなど物ともしない猛攻をくり返し、敵に息つくひまも与えなかった。

しかし六波羅方でも、ここでは自信をもって、
「やわか洛内の大手を」

と、よくふせいでいた。

羅生門の礎いしずえをまんなかに、四塚よづかの流れを引き込み、巨大な逆茂木さかもぎや柵さくをめぐらし、また民家の屋上にまで、矢倉足場を作つて、数万射の矢かずをこの二日間についやしていたの

である。

だが、赤松勢には、円心入道の子、律師則祐りっしそくゆうなどの豪ごうの者が多く、九条から西八条一帶の民家へところきらわす火をかけたうえ、農家や牛飼町の車をあまた徴収して来て、陣しを布しきなれば、それを楯たてにジリジリつめよせたのち、やがては車に車を積みあげて、ついに防禦の一角を破っていた。

一角が破れると内は脆もろい。

河原方面でも、

「七条へ敵が入った」

と叫ばれ、そのころには、夜空の色でもわかる伏見、小幡方面こばたの千種軍ちくさへんまで、はや南の大和大路一ノ橋から六波羅のうしろへ迫っているらしく思われた。

そして宵すぎると。

六波羅数万の兵は、各戦線から急激に減っていた。

「だめだ」

と、そのころから逃亡兵の群れは跡を絶たず、公然、戦衣を脱いで空家のうちへもぐり込むのやら武装のまま山野の闇へあてなく落ちてゆく群れなど、ぞくぞく見られ出して

いた。死ぬためではなく生きるために彼らは扱よつていたのである。その彼らの直感に大勢はもうきまつたと見捨てられていたのだろう。

でもなお、洛中のいたるところでは、市街戦が交わされていた。かなしいもののふの最期をあくまでその武者だましいにかけて潔いさぎよくしようとする東国武者も決して少なくはなかつたのだ。とはいえ、すでに残骸の姿にひとしい五条のいっきょう一橋と六波羅総門のふせぎぐらいが、よくこの頽たいせい勢をもり返しうるものとは今は誰にも思えていなかった。

「おお……。あの炎」

「やがて、ここへも」

「どうしたものだぞ」

「ここを落ちよとて」

「落ち行く先はあるまいに」

六波羅北御所の仮皇居の内こそは今、どうしようもない騒ぎであった。小女房たちの悲泣をなだめてやる人すらなく、公卿すべても動顛のていだった。右往左往の影が、あらぬ口走りを放ち合い、ただ「素破すわや」とのみで、たれひとり生色はない。

そこへたつた今、探題の郎党小串兵衛おぐしひょうえノ尉じょうが来て、

「はや、ここもあぶない。主上、両院、皇后、みきさきすべての方々にも、お立退きのご用意を！一刻もはやくお立退きを！」

と、どなり捨てて行つたばかりなのだつた。

さすがこんなさいになつても、主上の御簾みすのあたりはなお、しずかだつた。

こうごんてい光厳帝はまだお若くて何もご存知でないとすらいつてよい。けれど北条幕府のこしらえで擁立された天皇である。こうなれば北条氏と運命を共にするしかないというご觀念だけはかたかつた。

「まろは、あとでよい」

泣き伏す皇后の背へお手をかけて、別離と、いとしみの耐えを、お唇もとに、

「ともあれ、皇后きさきやらあまたな女房たちを先に、ここから落すことにせい。……敵とて、よもや女子供に、むざんな所為しよゐもいたすまい」

と、うろたえている三条、鷲尾わしのお、坊城などの諸公卿へ、くれぐれ、皇后のおからだをお頼みであつた。

光厳すら二十歳である。皇后はもつとお年下でまだあどけない姫宮ともみえるほどだつた。お身をもだえて、なかなか帝のお袖を離れるふうもなかつたが、そのときほかの女院

からまた女房や女めの童わらわまで、みな泣き顔をつつんで帝へお別れをつけに来たのをしおに、皇后もやつと泣く泣くお手をとられて立った。——と、もう濁流にせかれる花と泡沫うたかたの明滅めいめつみたいに、白い素足やら夜風のなかの被衣かすき、また、みだれにまかす黒髪などが、むかし薔薇園しょうびえんとよばれた六波羅北苑ほくえんの木戸から東山のほうへ落ちて行き、それには一部の公卿と大勢の舍人とねりなども付いて行つた。

「……あわれ。女たちさえここを去らせば」

光厳帝は、いつそもう、おちつかれたようであつた。御父の法皇がおられる方へと、やかつたやかつた潤達うるたつに廊を渡つておいでだつた。

帝が近づいてゆかれると、そこではまぎれない御父の後伏見法皇のお声が、

「今となつて……」

と、簾下れんかにひれ伏している一武臣を、あららかに、満身のおいきどおりで叱ツていた。

「そちはなんと言つた！ かならずここは保もちささえますゆえ、ただ金剛山の寄手へたいし、勅をくだし賜われと、それを請こうてまいつたのも、つい昨朝のことではないか。——なぜそんな強がりの擬態をかまえて、俄に、鳥の立つような退去をみかどにせまるのじや。やくたいもない大将かな。仲時！ それでそちの奉公が相立つのか」

「……はっ。ただもう」

ことばもなく、ひしがれたような姿の人は、探題の越後守北条仲時だった。

「おわびのほかはございませぬ。……腹切っておわびのほかには」

「腹切りなど見とうない。わびられたとて、どうなるう」

「なにとぞ、いまは早や一刻もおはやく」

「落ちろとか」

「仲時、また時益も、斬り死にいたさんと申し合いましたなれど、いや、主上をはじめ両院その他の方々を、ここで敵手にまかせては、御運のほどもいかがあらん……。それよりは生き恥たえて、いずこまでもおん供すべきであるまいかと」

「それ、すすめるなら、なぜ昨日のうちにすすめぬ。せめて今日の早くにすすめざりしか。ええもう、追いつかぬわ。仲時、供の人数はどれほどある？」

「まだ千余騎はおりまする」

「たつた千騎か」

刻々、敵軍のせまるらしい物音は夜の潮鳴りにしおなことならない。後伏見ごふしみ（法皇）は、仲時を烈しくお叱りになりながらも、ついにはお茵しとねを立て、

「ぜひもない。……花園」

と、弟ぎみの花園上皇へ、

「落ちよう！」

とお声をかけた。

そして、みかどへも、といわれたが、その光厳帝は、もうこれへ来ていて、

「おん衣ぞを。……お袴はかまのすそを」

と、後伏見の身まわりに、かいがいしいお手をかしておられたのだ。

それすらお目に映うつらなかつたほど、とつきに近侍の公卿から宮人みやびとのすべてがまわりを

お囲みしていた。なおまだ落ちずにいた女院や女房たちもオロオロ見え、その介添かいぞえし

て行く老いたる尼の臍ろうたけた気なげさには、死も一つに、とじている容よう子がたれの姿より

は濃くみえた。かくておよそ宮廷人ばかりの百二、三十名が、どつと北御所から薔薇園しょうびえん

の大庭へまろび出て、あとは暗い夜風のなかをヒタ走りに喘あえぎあつた。

たれも身に持った物など何一つない。すでに、賢所かしこどころの神鏡みかがみ（三種の神器の一つ）

も、こうなるまえに、北山の西園寺公宗さいおんじきんむねの邸へひそかに遷うつしてあつた。

「や、あの兵は」

「お驚きなされますな。お味方です」

「探題たちか」

「六波羅松原に残余の兵を呼びあつめて、共々落ちゆく者どもでござりまする」

そこではみな、つかのまながらほつとした。

千余騎の将士など、たのむに足らない少数だが、それさえ心づよく見えたのである。

光厳の弟ぎみ、梶井ノ二品親王もここへ来合わされ、御門徒の勝行房、上林房以下二、

三十人の法師武者らとともに落人おちゆうどの列に入った。——火の粉をもった黒けむりが団

々と西から南から三十六峰の上をたえまなくかすめてゆく恐い夜空の下なのである。

「いくさには敗れましたが」

と、探題の仲時、時益のふたりは、みかどの前にひざまずいて、こもごも、なぐさめを言上していた。

「六波羅一つが、北条のとりでとはかぎりません。金剛方面には、なおつつがなき数万騎をひかえ、鎌倉までの途中とて、諸国には、頼みあるお味方も少なしいたしませぬ」

「わけて近江伊吹には、執権しっけんのご信頼あつき佐々木道誉もおりますこと。……また佐々

木の同族、六角時信も、粟田口あわたぐちあたりで加わるはずでござりますゆえ」

「なにとぞ、お心づよくおぼしめし賜わりますように」

「こう、われらがお付添いまいらすうえは……」

みかどは、ただ茫ぼうとして、

「鎌倉へ行くのか」

と、心細げに、うなずかれる。鬢びんを吹くかぜが白いお顔を研とぐ。

両探題は、すぐ、

「御馬上へ」

と、みかどへも、法皇上皇へも、駒をすすめた。輿こしもおびただしく用意され、女院や尼あ

前ませの足弱は、兵に昇かかれた。

蹴上けあげには、六角時信の兵二、三百がお待ちしていた。しばらくは坂である。ふりかえる

と洛外洛中の暗々黒々な一地界は、ただ炎、炎……の糜爛びらんだった。

あけがたの星はまだ白かった。瀬田ノ大橋が淡あわく見え出す。

「やれ……」

と、みな眉をひらいた。

足弱な公卿くげみやびと宮人を連れての兵馬としては早かった。それにまず途中の難にもあわなかつた。じつは内心、叡山えいざんにある大塔ノ宮一味からの襲撃をなにより怖れていたのである。けれどその千余騎の落人おちゆうじ——主上の駒から女院たちの輿こしまでが、とどろに、瀬田の大橋の上へかかるやいな、

「敵がいる」

と、意外な方から、あとの足なみを押しもどしてきた。

とつぜん、橋詰の口をはさんで射浴びせて来た矢かぜであった。数騎は落馬し、あとの駒も、けたたましく、いなないた。

「油断すな。伏勢らしいぞ」

「もどせ、もどせ」

「足場がわるい」

声々、立ち騒ぐ中で、

「知れたもの！ 駈け抜ける」

左近将監ときます時益は言った。

「射て来るものは、どれもこれも古矢ばかりだ、磨みがきのない拾い矢ばかりぞ。察するに敵

らしい敵ではない。野伏だわ。野伏ばらに足もと見さすな」

なるほど橋づめの柳の原にチラチラ隠現している黒いものにはたて櫓も旗も陣容らしい秩序はなかつた。漁夫、半農のたぐいが、野太刀や弓を持ち、それに半端な具足をつけ、また中には、ゆうべ限り六波羅方に見切りをつけて、たちどころに、野盗と変じた逃亡兵なども交じっているかと思われるうご烏合だつた。

しかし、数には驚くべきものがあつた。追えば追うほどわんわんふえてくるのである。

——ひとたび権力の座をすべれば——こうも彼らおおかみ狼の群れにまで足もとを見くびられるかと、仲時も時益も、暗然と、思い知らされたことだつた。

「しよせん、いちいち相手にしては、果てしないぞ。ただ追ッ払え。討つては駈け、脅しては駈け、道ばかりをただ急げ」

こうさけんで、主上の先を払っていた時益だつたが、その南の探題時益も、ついに瀬田と守山のあいだの野路のじ附近で野伏の流れ矢にあたつて、あえなき最期をとげてしまった。

いや、光厳のみかどすらも、ひだりの肘ひじに一矢をうけて、鞍つぼを鮮血に染められていたし、まわりの女房にようぼう輿にも、仮借かしゃくなき矢がブスブス立って、みかど同様、駒の背にお姿をさらしている法皇、上皇など、もちろん、お人心地もないすがたであつた。

もともと伊賀山脈に沿う近江路の野洲、篠原あたりは野伏の巢といってよい。平常はうららかな湖畔の景をみせているが、時乱に敏感で、もう六波羅のやぶれもよく知っていたのである。そしてこういう時こそが彼らにとつては稼ぎの日で、その目標が高貴なお人であればあるほど日ごろ眠らせていた貪欲と兇悪をふるい立たせてくるのだった。

公卿の落伍はかずもしれない。彼らはみなくくり袴のすはだしであつたから、当然、騎馬にも兵にも見すてられ、たちまちその衣冠は野伏たちに剥ぎとられていた。いや裸にされるなどはまだいい方で人質に拉致されてゆく者もあつた。さらに途々、斬り死にした将士のからだも同様に、その武器からよろい下着まで、すべてみな「皮剥ぎ」の好餌とならぬものはなかつた。

古典「太平記」によれば、

主上、その日は

篠原ノ宿に着かせ給ふ

とあり、また

梶井ノ宮には、これよ

り引別れて、伊勢の方

へぞ赴かせ給ふ

と見える。すなわち梶井ノ宮だけは、鈴鹿越えをとって伊勢路へ別れて行かれたのだ。そして執しつこい野伏たちの襲撃も、人家の軒が接している宿駅のなかではさすが行われず、疲れはてた仲時以下の者も、篠原ノ宿では、ほっと一ト休みもなしえたかと思われる。しかしまたすぐ、あとの長途の難をのぞみ「いかにせばや？」の協議となっていたのではあるまいか。

そこで考えられるのは、六角時信の発言である。

道が犬上郡へ入れば、そこはもう六角領であり、すぐ隣郡には、同族の佐々木道誉が伊吹の城をかまえている。

「かならずや道誉も、忠誠を示して、お迎えに出で、われらの難を見ずてはおりませんまい」

時信は、そういつて、人々をはげましたにちがいはなく、仲時以下、悲腸にとらわれていた面々も、

「そうだ、この難行も、ともあれ伊吹へ着くまでのことだ」
と、考えたに相違ない。

つかのま、ご一睡すいもあつて、みかどは左の肱ひじの矢傷やがたを白布で巻き、ここからは怪しげなあじろ輿こしの内うちになつて行かれた。

おなじく後伏見も花園上皇も、馬には馴れぬお身を、ここまでは、夢中であつたが、
「もう鞍ズレに耐えぬ」

とのお訴えで、いずれもここで輿こしとなつた。

輿こしになうのも輿よちよう丁ていではない。どれもさんざんに戦い疲れた兵どもである。日ごろは小指の血にすら色青ざめる女院にょいんにしてさえ、いつか兵の血まみれ姿にもさまでなお感じもなくなつていた。なお幾人かはつき従つていた公卿どもの素足にも血泥が黒く乾いていた。

それら供奉ぐぶの人々も、今は、

按察使あぜちノ大納言すけな資名

綾あやの小路こうじ中将重資

宰相の有光

勸修寺中納言つねあき経顕きんけんなど、ほんの七、八人に過ぎず、かえりみ合つて、

「みなどうしたか？」

と、慚然ぶぜんであつた。

たれよりも力としていた南の探題時益の落命を途中にみてから、越後守仲時のすがたにも一そう孤愁の影と悲壯が濃かった。しかも従う兵は、半分以下にまで減っている。が、その夜は、六角領の観音寺城泊り。眠るだけはよくやすまれた。

問題はつぎの日だった。

——愛知川、小野、四十九院、摺針、番場、醒ヶ井、柏原。そして、伊吹のふもとまで、つつがなければもう近い。しかし、遠いここちでもあった。

仲時は大事をとって、

「六角勢は後陣となつて、尾きまとう野伏ばらに、防ぎ矢しつつおあとからまいられい。

——また糟谷三郎宗秋は、さきを駆けて、よりつく賊を打ち払い、おん輿の行く道を開け」と、命じて出た。

伊吹までは、あと一日半か二日路である。伊吹の城にさえたどりつけばと、とくに仲時は細心であつたが、やはりこの日も先々で野伏の襲撃は依然まぬがれえなかつた。

野伏が襲つてくる地点にはほぼ条件がある。「出そうだ」と思われる所に出てくる。おむね、埋伏、視野、遁走に都合のよい山岳をうしろにしている。

その夕。すでに犬上郡へ入つて、摺針峠から不破にわたる山々の重畳をまえに

していた主上、法皇、女院らの輿こしと輿廻りの人々は、

「はや山風も……」

と、その怯おびえに吹かれていた。

折も折にである。道の不安を打ち払うため、一隊で先駆していた糟谷宗秋が、

「お止まりください。この峠、うかとは進めませぬ」

と、引つ返して来て、仲時以下を寒からしめた。

「夜をかけても、番場までは」

と、むりを承知で将士をはげましていた仲時も、

「またもか」

と、途方に暮れた眉だった。

「それが、これまでの野伏らともちがいました」

と、糟谷は言った。

「錦の御旗を持ち、数も二、三千か。山の巒ひだ、峰の要所などに、むらがりおります」

「なに、野伏が錦の旗を？ ……。そんなものはとるにたらん。下種げすどもの擬勢だろう。

……でなくば、伊吹の佐々木道誉が、お迎えのための軍ではないのか」

「そうあれかしと、てまえも祈つて、いろいろ探らせましたところ、やはり、さにあらで、賊は野伏や土民兵らしく、また御旗は、這奴らのなかまの内に、先帝（後醍醐のこと）の五ノ宮（皇子）とかがおられるためと称えております由」

「はて、そんな宮が、野伏山賊のなかまに擁せられているなどはいぶかしいぞ。六波羅にいるうちにも、かつて五ノ宮とは聞いたこともない」

「あるいは、宮は偽者かもしれないませんが、おととい以来、伊賀、鈴鹿、美濃ざかいの野伏山賊のたぐいが呼びおうてここにむらがり、お道をはばまんとしていることだけはたしかでおざる。一戦のおかくごなくば、なんとしても通れますまい」

「そうか」

仲時は低くつぶやいた。

「越えるには、覚悟をといることなのだな」

しずかに彼は全軍の士へ露営を命じた。またせめて、主上、法皇、上皇、女院がたなどには、蚤虱のなやみや馬の尿に近いむしろはぜひないとしても、露をしのぐ茅屋根の下でもと、自身奔走していくつかの山家を御宿所にさがし求めた。

この仲時は、さきに六波羅を捨てると決して、天子の蒙塵をおすすめしたさい、天子

の御父後伏見からいたく責められたことを、心魂に徹していた。

また、勅を請うての一策も手おくれに終り、万策ここにつきるにいたった責任も、探題として、つよく感じているらしい。それがだんだん彼をしてまだ二十八の人ともみえぬ燻^{くす}みをその満面にただよわせていた。

「朝となれば、後陣の六角時信も追いついて来ようし、使いを派せば、伊吹の道誉も、加勢に討つて出てくれるにちがいない」

彼自身は、天子のお小屋のそとなる樹下に眠つて、なおそうした希望の東^{しのめ}雲を、胸にえがいていたのではあつた。

たえず油断がならない。賊の奇襲が恐ろしい。

それと山は五月の湿度だつた。山^{やま}蛭やヤブ蚊の責めや、また、一種の青葉蒸^むれが、よろい固めの五体をやりきれなくして、仲時はつい眠りもえなかつた。そして、

「……どう、ここの大難を」

と、ついあしたの峠を思い悩んだ。

持^たみとみられるものは、二つしかない。

あとから来る六角時信の加勢と、伊吹の城の合力とである。それだけは、持^たみに出来よ

う。間違ひあるまい。

だが、みかどを思うと、お気のどくだった。しんじつ、おいたわしいといつてもなお言いたりない。武家として、いや平ひらの人間と人間としても、相すまないことになったと、仲時はひそかに悔やむ。

なにもご存知でないお若い天皇——光こう嚴ごんのみかどの寝やすまれている炭すすやき小屋こやのほうへは——彼は横たわつても足を向けていなかった。心のうちでお詫わづらびばかり思つていた。

なにも、彼がこうしたわけではない。後醍醐を追つて、あとの帝位に、持明院統の皇族からおひとりを選び、

この君を

と、北条氏がその政略から新帝として、あがめ立てたことである。後伏見、花園も御贄同のことだった。だから何も仲時がひとり自責もせに悶もだえるいわれはないようなものなのだ。

しかし彼にはなお古風な、鎌倉武士の匂においがあつた。

たとえば職は一探題の若年でも、まぎれなく自分も北条一族の一人ではある。責任がないとはいえない。いわんや、いくさにも敗れ、天子以下、両院りやういんや女御にようごの方々かたがたまでを、こんな嶮けんにさすらわせたのは、ひとえに自分の落度であると、責せめを、身一つに帰きしていたよう

なのだ。

「……大納言どの」

仲時は、いつか木蔭から起き出て、炭焼き小屋の土間をそつと覗いていた。

灯はなく、天皇の御寝ぎよしの場とて、すぐその炉の床だった。そして按察使あぜちノ大納言資名すけなは、土間へじかにむしろを敷き、破れ壁にもたれて、眠るともない姿でいた。

「オ、仲時よな。……？」

「ご一筆、花押ごしはんをねがわしゆうぞんじますが」

「どこへやる書状か」

「思い立って、これを伊吹の佐々木が許へつかわそうとぞんじまして」

「途中、賊の手に、使いが捕まるわそ惧れはないかの」

「たぶんにはそれはあります。……が、むなしくいるよりは、一策でも手を打っておくべきかと思ひ直し、屈くつきよう強きような者をえらんですぐ持たせてやるつもりです。そこでこの召めしじ状ように、廷臣のおん名と花押がいただけますれば、書状を受ける道誉の方でも、いちばい合力に力をそそいでまいろうかと思われまします」

もちろん大納言にいなみはなかつた。仲時の使いはまもなく暗黒な峠をのぞんで立つて

行つたようである。もうなんとなく、明けまぢかな感がある。——法皇、上皇のお寝小屋でも、ききようきよう恟々とか何かおささやきが洩れ、ひとしくどこの寝小屋もよくお眠りではなかつたらしい。

「探題、探題」

そのあたりで、宰相の有光、勸修寺の中納言などが、仲時をよんでいた。なにかおいそぎな上意でもあるらしかつた。

山小屋の蚤虱のみらみやら、夜風の音も御不安のせいか、後伏見といえ花園のきみも、夜すがら、お寝やすみのていもないような——と、公卿たちは言つて。

「ただいま、その両院からの、仰せ出しじやが」

と、仲時へ諮はかつて言つた。

仲時はつつしんで。

「何事にございませうか？」

「仰せには、こうして晨あしたを待つよりは、いつそ夜明けぬまに峠を越えて、かしわぼら柏原へ急いでとはのおことばだが」

「それがかなえば、それにこしたことはございませぬ。したが、賊の出方によりますこと。」

われら武者どもは、どうにでも、血路を開いて通りませんが、みかどを初め、足弱な女房が
 たもおられましては」

「しかし、昨夜はどこも静か。賊とて、いうほどな大群ではないのである」

「いや、わざと鳴りをひそめているものと思われます。そのうち伊吹の佐々木道譽もお迎
 えに出て、後からは六角時信がお供に追ツついてまいりましょう。ま、いましばし、ここ
 にご辛抱を」

仲時はなだめた。

彼にすれば、落^{おちゆうと}人のままならぬ身でさえあるに、宮廷そのものを背負って行くにひ
 としいような重さであったことだろう。この人々さえ連れてなければ、賊の大群を突破し
 て通るぐらいな難に、かくまで、ためらいなどはしていない。何としても、鎌倉へ行きつ
 くまでは、主上両院のおからだに、いささかなお怪我もさせてはならぬとしているため、
 つい大事に大事をとるのであった。

ところが。

やがて白々と明けてきたが、どうしたわけか、殿^{しんがり}軍の六角時信の兵はまだやって来な
 かった。のみならず、後方の連絡の者からは、怪^けしからぬ風聞さえ、こう伝わってきた。

「六角どのは、昨夜、愛知川えちがわの辺から俄に方向を変えて、京へ引つ返してしまつたもようでございますぞ！」

人々は、仰天して、

「そんなはずはない」

「流説るせつであろう」

「何かの、まちがいか？」

と騒いだが、その実否をただすまもなかつた。——峠の上や諸所の間道からは、すでに賊徒の群れが、あらわな喊かんせい声をあげ出していたし、一方、仲時が恃たのみとする伊吹の城からは、まだ何の音沙汰も加勢もない。

ついに、仲時も意を決したもののか、

「宗秋、先を払ツて進め」

と、糟谷三郎の一隊をまず先頭にたてさせた。そして主上、両院のおん興こしは、自分らのおもなる者で護りかためる。また女院の輿すだへは隅田源七、高橋又四郎らをつき従わせ、後陣は吉岐孫四郎いぎのまごしろう、安藤太郎左衛門たちの手にゆだねた。こうして総勢四百余名——それがいま残っているすべてであつたが——お互いに扶けあい、励ましあつて、

「離れまいぞ」

「散つては弱まる」

「峠の上、番場の宿まで出れば、防ぎはなしやすい」

「伊吹の城とも、目と鼻のさき」

「そこまでの忪えだ。賊の難も、そこまでのこと」

と、必死な将士は、やがて摺針峠のおよそ一里を、えいえいと、氣勢を高めて登り出していた。

怪軍かいぐん

ときどき、山こだまが方々で聞える。不気味さは言いようもない。

けれど賊徒のほうでも、さすが決死の武者へ当るのは恐いのか、なかなか姿をみせて追つては来なかつた。

「もうわずかだ」

全将士が、そこではほつと大息をやすめた。峠の上、番場ノ宿は見えている。

「案じたよりは」

と、仲時もいくらか眉をひらいた。——これで六角時信の異心がたんなる誤伝とわかり、また伊吹の道誉が、柏原へお迎えに出ていてくれれば、申し分はないが、と思つたほどである。

けれど彼がそんな希望を持ち直したときこそ、じつは最後だったのだ。とつぜんな叫喚が、列の末尾からわき起つて、

「すわ」と、坂道を下へ、ふりかえつた刹那には、味方より多い賊のむらがり、高い所、低い所、いちめんから喚きかかつていたのであり、仲時の手が、

「しまつた」

と、弓をつがえる暇すらないまに、列は、賊徒のために両断されていた。

「下へ駈けるな」

仲時は、あえて味方の一端を見捨てた。どよめき立つまわりの駒や徒士を指揮して、峠の九合目をのぼりつめてしまった。そして番場ノ宿へ入るとすぐの叢の林のうちへ駈けこんだ。

「おん興を、みなそこへ」

彼のさしずは、急であった。ここらへまでバラバラと賊徒の矢が飛んで来る。どの輿よちよ丁の兵もみな喘あえぎ喘あえぎで、来るやいな、各の肩の輿を、身ぐるみ、抛ほうり出すように、どんと置いた。

「あ」

と、光厳帝は、輿からおからだを投げ出されていた。法皇上皇も、女院がたも次々に、輿の内からまろび出た。

人心地のあるお顔はなく、みずから起たとうとなさるおひとりもない。仲時は、その一堂をさしながらお急せぎ立てした。

「万が一のばあいにも、仲時がおりますからには、めつたなことはさせませぬが、もし流れ矢などに触れ給うてはなりません。しばしその御堂へお潜みねがわしゅうぞんじます。決してご心配なされません」

子をあやすようだった。喪そうしん心のお手を取つてあげたり、おからだを持ちささせたりして、やつと、主上以下の方々を、堂のうちへ隠し終ると、仲時は、はじめて多少のおちつきをえた。

ここは時宗寺じしゅうでらの蓮華寺れんげじの地域らしく、堂の廂には、

一向堂

の額がみえる。

たちまちここを中心をやや遠くまでの防衛線が仲時の指揮に布かれ、やがて峠の途中で切断された残余の兵も来て、まんまるな一陣となった。

いつか陽は高く、今日にかぎってまた、真夏のような照り方だった。——六波羅を落ちていらい、食も眠りも足りていない人々には、この日射に目がくらみそうだった。かぶとの鉢金に蒸された頭には、視野の物さえかすんで見え、死もさまでには恐くなく、生きんとすることさえ淡い妄念でしかなくなっていた。ただ入れ代り立ち代り襲ってくるものと、の鬨に疲れていた。

賊徒の群は、刻々ふえて来るばかりであった。

古典には、この賊徒なるものをたんに「——近江、伊賀、鈴鹿、この界限までの強盗山賊あぶれども」としかその質を言っていないが、はたしてそんな有象無象の手輩ばかりであったろうか。

疑わねばならぬと思う。

その説明はあとにするが、天皇、上皇、仲時らの四百余人を遠巻きにしつつだんだん迫

つてきた賊の数も「いつか五、六千人にも余るほどなもの」が一向堂を包围したとなっている。古典の誇張と割引きして、約半分とみても二、三千だ。

こんな数は容易でない。

乱世の下、たしかに野伏、追剥ぎ、あぶれ者は多かつたが、六波羅陥落の実相も、よほどな早耳でなければ、まだよく知りえないはずの直後であつた。それが山奥の伊勢ざかいまで聞えて、はやくも美濃近江の要路、すりぼりとうげ摺針峠から番場へかけ、こんな結集をみせたのは、どうもただの鳥合うごうしゆうの衆にしては出来すぎている。

たれか、この鳥合には、指揮者があつたに相違ない。

その指揮者もだ、よほどな策士がいたといえよう。——なぜなら、このあぶれ者の大衆のうえに、錦の御旗を持たせ、上には、後醍醐の御子「五ノ宮」がおられるのだと称となえていたのでもそれがわかる。おそらくこれは衆愚を駆かり立てる策士の策であつたろう。これまで「五ノ宮」などという皇子の存在は世間のたれも知っていない。按あずるに、錦は錦でも、それは無知な野性を駆るための衆愚の旗、つまり擬勢ぎせいだつたにちがいない。

その旗を、仲時も見つた。むらがり寄る野伏勢の、うしろの遠くに、ひるがえるそれを見て、

「偽錦旗？」

怪しむと同時に、

「しまった」

と、今はさとつた。

ここから伊吹の城はいくらの距離でもないはずだ。二里余の彼方にすぎない。

野の野伏すらみな知っている六波羅の変を、また、天皇上皇の御落去を、その佐々木道誉が耳にしてないはずはよもなからう。そしてもし道誉が、いぜん、鎌倉方に忠誠をもつものならば、援けを求められないでも、われから馬にムチ打って、みかどのおん輿を迎へて出て来るはずではないか。——この敗残の探題軍の難を、ただながめていられるはずのものではない。

第一、かかる万一日のために、その道誉は、かねて執権高時の厚い信任をうけて、この近江の要害に、たのみある者として、おかれたものではなかったか。

それが、どうだ？

伊吹からは一兵の援けも来ない。この期となつてもなお見えない。夜明け前にやった使いの反応もさらさない。伊吹の空は、つんぼのような太陽にかんと澄み、伊吹山は、白い

雲に、顔をかくしているだけである。

仲時が絶望を感じたのはそれひとつでなく。——たの恃みと待っていた六角時信が、姿をみせず、愛知川から逆に京へ引つ返してしまつたというのも、あるいは、道誉のさしがねではなかるうかと、気がついたことだつた。——元々、六角は佐々木の同族だし、その領地も隣し、道誉の下風につかねばならぬ家柄でもある。

賊の射る矢は、ほとんど集中されてくるので、小半日の合戦には、一向堂のかべ、とびら、ひさしなど、まるで傘の骨みたいに矢が刺さつた。

しかも、こなたからは、射る矢もすでに尽きていた。敵の矢を拾つてつが番える弓の悲しさは言いようもない。口惜しさ、苦しさに、たえられなくなり、

「くそうつ」

と、顔を阿修羅あしゆらにして、むらがるなかへ、吠えつつ駈けこんで行つた者は、すべてそれきり帰つて来なかつた。

はじめは、六波羅落おちゆうど人ひとのみなゆゆしい甲かちゆう冑ゆうに、多少おそれを示していたあぶれども、次第に相手の足もとを見、わんわんとその包围をいよいよ厚く、また近々と、圧

縮してきた。そして口々から揚げる口ぎたない呶罵どば、嘲弄ちようろう、笑い声まで、嵐あらしとばかりきこえてくる。

「三郎っ……。宗秋」

仲時の声だった。それも喉にひつつくような、かすれ声で、

「来てくれ」

と、一向堂の階に、朱まあけみれな姿を、よると、くずして呼んでいた。

糟谷三郎は、その声を、顔で搜している。目から半面へかけての血しおで、人相も変っていた。

「お。北殿」

「三郎か。もうだめだ」

「な、なんの……」

「いやだめだ、残念だが」

「ならば、一せいに、賊のうちへ駈け入り、斬ッて斬ッて斬りまくりましょう。まだこれほどな御人数はある」

「やめよう。烏合うごうの雑人輩ぞうにんばらなど、いくら斬っても、誉ほまれにはならん」

「では、降伏して出ようとでも仰せられますか」

「降伏」

「心外でも、みかどにまで万一を、およぼさぬためにはと」

「この仲時も、それはいちばん苦慮していることだ」

「はやお味方の者どもも、斬り死にか、降参か、それしかないぞと、しどろに防ぎ疲れております。今はもうただ苦しいだけです。はや精根せいこんもありません。あれ、あのよう
地を這っているだけの兵も多い有様で……」

「三郎。味方すべてを、この辻堂のぐるりにいちど呼び集めよう。そしてわしからいおう。降伏しても、生は望みえられない。無念だが、わしたちはまんまと裏切り者の奸計に陥ちていたのだ。六角を力とたのみ、伊吹の城を救いの城と見たなどは、あやまりだった。世路いろのけわしさを知ってないこの仲時の不覚だった。罪のすべてはわしにある。わしは部下にあやまりたい！ みなここに呼びあつめてくれ」

やがて。——一向堂の縁からしやがれ声をふりしぼって呼ばわる糟谷三郎の声に、どれもこれも幽鬼ゆうきのような血みどろ姿がよろめきよろめき集まって来た。地にあつてうごけぬ者も扶けられてみな一つに寄りかたまつた。

仲時は思うところを部下一同に告げて、責めはすべて自分にあると、六波羅いらいの事
ごとな手ちがいを詫びた。また皇室の方々へも申しわけないと深く首を垂れていった。

将士はみな泣いた。肅と泣いた。けれどたれも彼を恨みには思わなかった。みな肱をま
げて顔をおおった。そしてはつとその顔をまた何かに醒ました……。

「……お。北殿」

堂をめぐって坐っているすべての者が、こううつろになつて呼んだとき、越後守北条仲
時は、もう答えのない人となつていた。みずからの短刀でわき腹をえぐつて、がくと、肩
を落していたのである。

「……お示しなされた」

一とき、たれのおもても懐愴に変わったが、先に行く人をしずかにただ見まもり合う眸
であった。仲時からさいごの言を聞いたときに、ここの全部の者もまた仲時とおなじ覚悟
になつていた。

みなそれほどに困憊しきつて、死以外になにも考えられなくなつていた。顧慮もなく、
むしろ、やすらかなものへ抱かれないような焦躁で、一人が叫ぶと、イツせいに、死のう、
死のう、と死の餌を交わし合つていたのであった。

「お供つかまつる。北殿」

「野伏などの手に、かからんよりは」

「生き恥かくなどは、鎌倉武士の名おれ」

「いつそ、この一堂を一蓮れんうてなの台となして」

「いざ、いさぎよく」

声から声へ、次々に、自身の刃でうツ伏していたのであった。また互いに刺し交ちがえ、あるいは、なにか天へむかつて怒るようにどなったせつなに、立ち腹切つて、朽木のようにどうと仆れる者もあつた。また母や妻子の名を心に呼びつつ、ふるさとの方をのぞみながら、のどへ刃をつき立てて伏す兵もあつた。

みるみる、一向堂のまわりは、血のうみをなし、越後守仲時以下、糟谷三郎宗秋そのほか都合四百三十二人ことごとく、枕をならべて、自害してしまつたのだ。

むざんである。過去の歴史とはみても、胸がいたむ。何とか生きようもあつたらうにと、その一途いちずな集団死を、理性で問うのは、後世の、そして平和時の、幸福なるあげつらいというものである。乱世下に掻き立てられる生命の灯とは、自分自身ですら、戦そよぎの中のまたたきを、こんなにもふと断ちやすく、持ちきれなくもするのであつた。わけて、もの

のふという者のあわれは、そこに死すことを死に花とすらしようとす。

それにしても、四百余人の集団死とは、あまりに酸鼻さんびもはなはだしい。あるいは、これも古典常套の誇張でないかとの疑問もおこるが、しかしこれには疑いえない史証もある。

後年、附近の八葉山蓮華寺のうちに、

蓮華寺過去帳

なるものが伝えられた。

そのの伝写に依ると。

元弘三年五月・執筆・糟谷かすや十郎

と、供養者の氏名まで明記されて、それには仲時以下の死者四百三十二人の俗名が洩れなく書き遺のこされてきたのであった。なお執筆者の糟谷十郎とは、おそらく当年の糟谷三郎宗秋の縁故の人か。

くだって、江戸時代の「木曾名所図会」などみると、街道に沿うた番場ノ宿の町なかに「仲時の塚」というのが載っており、そばの丘には「六はら山」と註ちゆうがある。そして附近は、時宗じしゆでら蓮華寺の門前町と移り変って、そのむぎんな遺跡も、街道の一点景にすぎない風物と化し去っている。

矢うなりや、石つぶてもやみ、やがて賊徒も鳴りをしずめた。そして、賊たちはこわごわと寄つて来た。

いかに彼らでも目をおおつたことだろう。血のうみである。四百余人の声なき屍かばねだけである。

「……?」

そのうちに賊の部将らしい男どもが、目と目を見交わしていたとおもうと、勇を鼓こすがごとく、一向堂の縁へとびあがつた。そして堂の扉を蹴つた。つづいて六、七名が躍りこんだ。

「……あ」

と、かすかなふるえ声を、彼らは薄暗い中に聞いた。

しかし、それきりであった。凝ぎようぜん然ぜんと、彼らの土足は棒立ちをつづけてしまった。

大納言資名、宰相ノ有光、中納言経つねあき顕あきらのわずかな公卿が、身を楯たてとするように坐つたままこつちを見て、

「玉座であるぞ」

叱つたように聞きとれる。

下に居よ、との意味であつたらうが、かすれて、声もなさず、なお、何か言つたことも、よくは分らなかつた。

「うーむ」

と、賊どもは、うめいただけで、めずらしいことでも見たように、よけい無遠慮な眼を光らせた。

光厳、後伏見、花園、女院の二、三みなお体をひとつに寄せ、寄りかたまつたそのままに、半ば失神していたのである。まるで落雷下の物のように。

ともあれ、ご無事ではあつたのだ。——堂外では供奉ぐぶの六波羅武士四百余名が、枕をならべて自害したが、まずまず、おつつがなきをえたのである。古典ではここの所を、

主上、上皇は

この死人共の有様を

御覧ごらんずるに

肝きも、心もお身に添はず

只ただあきれてぞ御座おはしける

とばかりで、つぶさな描写を避けているが、およそ、ばかげた書き方である。越後守仲時らが、ことごとくその責めに任じて自刃しているものを「——ただあきれてぞおはしける」などというお心でいられたらうか。死者への詫びやら慙愧ざんきやらに、ここのお人々も、かなしみに悶もたえ、果ては茫然と、そのご運命をぜひなく賊手にまかせられたものだとおもう。

ところが古典の文章は、奇怪にも、ここでまた一転して、

さる程に、五ノ宮の官軍ども

主上上皇を取進とりまゐらせて

その日まづ、長光寺へ入れ奉たてまつる——

と、それまでは、野伏強盗あぶれどももの集まりとしていた賊方を、急に「官軍」とよんでいる。

が、ひとまず、それは措くとしても。

長光寺とは、一体どこか。

種々調べてみると、番場、柏原附近にも古くからの寺院は多いが、どうも伊吹山四院とその頃よばれていたうちの一寺らしい。「大日本史」にこういう記載がある。

元弘三年五月中

光嚴帝、後伏見、花園

六波羅ヲ落去

伊吹山太平護国寺ニ幸シカウ

留トドマルコト十八日

京師ニ歸ル

これで見れば、みかどたちのお身柄を、やがて一向堂からそこへお移した者は、決して賊徒の輩ではなかった。伊吹の佐々木道誉であったことはもう明白といってよい。

伊吹の西の麓ふもと、伊吹山太平護国寺はたんに、太平寺ともいわれ、佐々木道誉の城府とは、ほとんど森を接していた。

また太平寺にはそれいぜん、龜山上皇の御子が僧化そうげしておられたことがある。そこで「五ノ宮」などのお名が偽称されていたのではなからうか。

とにかく道誉とすれば、わが自領の下である。何をたくむにも都合はいい。

いまとなつて思えば。

仲時がここの加勢を待ったことも、梨なしの礫つぶてだつたはずである。なおまた六角時信が、京

へ返つてしまつた急變なども、そのときすでに、道誉から時信へ、何らかの旨むねがどいていたにちがひなかつた。

しかしその道誉は、「これもまたやむをえぬこと」と一人割切つていたことであつたらう。

すでに足利高氏とは先頃の密約がある。高氏との盟約を履行したまでのことにすぎぬと、道誉は、そらうそぶいているのかもしれない。——とはいへ、もし高氏の叛軍が六波羅に破れていたら？——それはまた、どういう構えを取つたかは分らぬ彼だが——なにしろ目前に、持明院統の帝室が蒙塵もうじんして来たのである。勃然ぼつぜん、手に唾つばして、小鳥網へかかつた物でも捕るように、「今は」とばかり、彼の非情が、酷むじさをほしいままにしたものは、うなずかれる。

が、なお用心ぶかい彼は、それをすら、土民の怪軍と覆面でやりのけていた。

みずから手をくだす寝ざめの悪さもあつたであろうが、四隣あしたの聞えや鎌倉の方へも氣をくばつていたものとおもわれる。むりはなかつた。世は晨あしたに夕べも分らない乱脈いっちょようさだつた。どこのたれがいつ仮面をぬぎ、またいつ寝返るやらも計りしれない。勝敗も一朝いっちょようには信じられず、人間同士もすべて狐たぬきの化かしあいだ。でなければ餓狼がろうの噛み合いであ

る、——と彼は、自分自体のものから推して現世を見ていた。疑いぶかいのもそのせいであり、人いちばい貪欲なくせに、一面消極的なのも、そのせいであった。

ところが時運の迅さは、はるかに、彼の予想を超えていた。ほどなく彼も知った。

飛報は、東国の空からだった。

この五月八日。

上野国の新田義貞が、郷土生品明神の社前で、旗上げを宣言していた。

すぐ十一日、十二日と。

新田軍は早や鎌倉への急進をみせ、鎌倉勢はこれを武蔵野にむかえ撃つて、いまや東国の天地も両軍の激戦場と化しつつある。——くわしいことはまだ後報によらねば分明ないが——と、ここへも聞えてきたのであった。

道誉はおどろいた。過ぐる日、高氏が洩らした言を、いまさらのように思い出していたのである。六波羅の陥落と遠い東国の蜂起とが、日まで、符節を合わせたごとくおこなわれたその遠謀のたしかさに、

「はて！ 足利という奴は」

と、舌を巻いたことだった。そしてあの薄あばたの、とかく与くみしやすくも思っていた高氏を、もいちど深く見直さずにいられなかった。で、もう何のためらいもなく、道誉はその急傾斜のままに、洛中の高氏へむかつて、われから頻ひん々と使いを派し、高氏の指示を仰ぎ出していた。

雑草復ざつそうふっかつ活

六波羅松原はあるが、六波羅の府は変った。

すべて人も昨日の人ではない。

占領二日後には、一切のあとしまつも完了していた。だがこれで大乱が終ったのでもない。進駐ちんくさの千種、赤松、足利の三大将は、協議のすえ、各の任を分担して、すぐそれぞれの陣所を、他方面へ移して行つた。

千種忠顕の軍は、二条富ノ小路の旧里内裏さとだいらへ。

赤松円心は、洛外警備へ。

そして高氏は、六波羅の府に、そのまま残つた。

「殿。……わかりました。やつと、お二人のご避難先が」

「お、右馬介、知れたか」

「はい。いぜんの羅刹谷らせつだににはおいでなく、あれよりもつと山深い木挽こびきの小屋に兵火の難を避けておられました」

「それはよかった」

高氏はしんから言った。

盲めしの覚一と草心尼とを、彼も忘れていなかった。とくに一色右馬介は、六波羅攻めの当夜から、兵をつれて捜し求めていたが、今日までその安否も分らずにいたのである。

「あのあたり、阿弥陀あみだヶ峰みねまで、いやもう難民の群れでたいへんでございます。見るもお気のどく。さつそくこれへお連れしてはと存じますが、いかがなものでございましょう」

「待て。ここはまだまだ母子ふたりを置けるような所ではない。そうだ、そちの手に預けておく。羅刹谷の元の家へ入れて、よう面倒を見てやるがいい。それに近傍は大和口の要所、兵も付けて」

「かしこまりました。時に……もひとつお伺いを」

「まだ用か」

「小右京どのの安否についてでございますが」

「む、後家の君か」

「兵を見せにやりましたところ、仁和寺長屋なども、みな逃げて、住人は人っこ一人おらぬそうでございます。あの小右京どのも、ひとり殿をたよりとしておられました。捜させましようか」

「まあ措おこう。そこまでは手がまわらぬわい」

高氏は彼をおいて、もうほかへ歩いていいた。見廻りの途中だったのである。南北両六波羅の広い地域だ。一回の巡視もなかなかそれは容易でなかった。

「殿」

「またも彼の姿をみて、用を持ってきた者がある。師直もろなおの弟、高ノ師泰もろやすだった。」

「例の……兵学者なりと自称する奇怪な老翁のことですが、あの者の処分は、いかがしたものでございませうな」

「吐雲齋とつんぱいか」

「さればで」

「樗おうちもん門の獄を出して、飯をたくさん食わせてやれ」

「それは仰せどおりしておきました。また先夜の兵火で、おおよけど大火傷をしていますので、それの手当もさせてはおきましたか」

「ならば、それでいい」

「ところが、きかぬ老爺で、火傷の苦しみにもめげず、高氏どのに会いたい、何でも会わせろ、と申し立ててやみません」

「ははは」と高氏は歩きながら笑い捨てた。「獄中にいて、あの夜の炎にくるまれたのだ。まだ半狂乱の火ほてりが冷めぬのももつともだ。放ッておけ、ほうッておけ」

一巡を終わって、高氏は、庁の床几場へもどって来た。すると、ここにも彼を待つ時務や訴えが山積していた。

訴えの中には、山野へ避けた難民の代表者もいて、庁の一隅で、それを訊く高ノ師直にどなりつけられ、二の句もなく恐れ縮んでいるようだった。

高氏は小耳にはさんで、

「何か」と、師直をよんで訊ねた。

師直がいうには。

「いやはや、単純なもので、難民どもは、はや御合戦もすんだごとく思い込み、一日も早う元の家々へ帰りたいとか、商売をしたいなどと陳情を持ちこんでまいりますゆえ、たわけども、戦はまだこれからだわ、命が不用なら、おのが家へでも焼け跡へでも戻るがいと、這奴しやつらの虫のよさに、只今、一喝かつをくれていたところでござりまする」

高氏はつぶやいた。

「虫がいいのは彼らの方ではあるまい。……さての」

一ト思索してから。

「洛民のうちでも、悪徒なんどのしぶとい奴は、わがもの顔に元の巢にいる。山野に伏して元の屋根を恋しがっているのはなべて良民だ。長く憂き目を見させてはおけまい。――

師直」

「は」

「申し渡してやれ。安心してみな洛内へもどるがよいと。そして何事によれ、訴え事は六波羅へ持つて来い。また夜昼の物騒も、われらが守ってつかわすゆえ、一日も早くそれぞれの職あきなや商いに励むがよい、と」

「大事ごございますまいか」

「いくさは地ならし、それがわれらの耕作というものだ。それすらが出来なんだから、いくさはしない方がいい」

師直が去つて、その旨を代表らへつたえてやると、法師、医者、町長まちおさなど交ぜた一ト群れの市民は、はるかから高氏の床几の方へ、低い礼を見せながら、庁の一門を出て行つた。

高氏は、即日、六波羅内に、
奉行所

を、設置した。六波羅奉行所とは、称とえなかつた。みゆるしにも職制にもよらず、占領下さつそくな行政の一役所として私わたくしに設けたものであつたからである。けれど北条氏百数十年らしいの六波羅政庁の陥落は、即そく、無政府状態を発生していたことなので、

「奉行所ができた」

と知つただけでも、一般には暗夜の灯ともよろこばれた。また事実、これが焦土の洛内に初めての、政治らしきものの芽生えであつた。

こうした洛内へ、やがて伊吹の太平護国寺からは、光厳帝をはじめ、後伏見、花園たちの囚とらわれ輿こしが、佐々木家の手で送り返されてきた。

それら持明院統の方々の処置は、それを千種忠顕のふんべつにまかせ、高氏は、庶民のいとなみを見はじめると、軍令を出して、市中における将士やあぶれどもの横行を取締り、その悪にたいしては、

「用捨なく、嚴罰でのぞめ」

と直ただよし義にいいつけた。

直義には適任だった。彼は、洛内四十八カ所のかがりや篝屋を復活させ、強盜、追剥ぎ、ゆすり、残党など、片っぱしから処刑に付していたが、そのうちに意外な或る大物をも逮捕した。

事のわけはこうである。

ある小雨の晩。

今出川御門そとの篝屋（町方警士の詰つめしよ所）へ、髪ふりみだした女が急を訴えに駈けこんできた。

酔屋すやぼう某の妻女であった。

それいぜんから、たれいうとなく、酔屋の二つの土蔵には、六波羅落ちをした公卿衆から預かつた財宝が匿かくされているといわれていた。それを狙われたものだろう。たつたいま

強盜が押入り、あるじ、雇人をみな縛りあげ、土蔵を破りにかかっているとの訴えだった。それ行け。

と、居合わせた箒屋武士十人ほどがすぐ駈けつけた。

ところが強盜は、いわゆる群盜であつて、それ以上の徒党であり、しかもおそろしく勇猛で、齒が立たない。

そこで辻々の箒屋へも、馬触れを廻し、相互、幾人もの死傷を出したあげく、やつとこのことで、首魁しゅかいと見られる者四人を、数珠じゆずツナギとして、これを直義の前につき出した。

直義は見て憎んだ。

うち一人は大法師である。

「きさまらは、そも、どこの何奴だ。かりそめにも、悪事らんぎよう濫行らんぎようにおよぶ徒は首斬るぞと、辻々にも、足利殿の御教書みぎようしよ（軍の政令）を以て、巖げんに布令ふれであるを知らぬはずはあ
るまい」

と、きびしく責め、

「坊主の寺はどこだ。また三名の主人はたれだ。所属を申せ。いわねば、拷問ごうもんにかけるぞ」

と、脅したが、四名とも唾かつんぼのように一言の答えも吐かない。のみならず、直義が「御教書」といつたときは、ふんと、鼻さきで笑うような風があった。

「こやつ。ただのあぶれや強盗とも思われぬ。よし、ひとまず六条の獄へ放りこんでおけ」
 こんな小事件などは、高氏には小耳にも入っていない。市中取締り令を発し、みずからそれを「御教書」ともよばせていたが、関東の空、千早金剛の方面、そのほか彼にはまだ当面、安からぬものが山ほどだった。

そこへある日、奉行所の内へ、

「大塔ノ宮の候人、殿ノ法印良忠どのがお越しでございませうが」
 という取次ぎ。

殿ノ法印というのは、一時捕われて、六波羅監禁をうけ、その監視を破って宮の吉野、十津川の拳兵に奔り、いまは信貴山にいて、大塔軍随一の、股肱の将と評判のある叡山の巨頭である。さつそく高氏が会って、来意をきいてみると、

「じつはさき頃、ご舎弟直義殿のお手にかかった四名の者。酒の上にて町家へ押入り、なにか乱暴をしたよしなれど、ここはひとつ無条件に、ご釈放くださるまいか。こう申せば、いわでもがな、はや、ご推量でおわそうが、彼ら四名は、宮が日常お目をかけて来ら

れた者なので、宮にもいたく、ご痛心のこととして」

という申し入れなのだった。

宮のご幕下ぼっかとは。

と、高氏は内心あきれた。しかし、ほかならぬおたのみと思うとむげにもできない。で、その日は「直義に申しましょう」と約してひとまず良忠を返した。

彼はさつそく弟をよび、四名の釈放を暗あんに勸すすめた。すると直義は、憤然とそれをこぼんだ。——そんなことではこの占領下の、治安の維持いじはたもてぬと、つよく言い張るのであった。

高氏は弱った。彼に潜む政治性が弱りぬいた。

その政治的な考慮から、大塔ノ宮の腹心殿ノ法印へは、先に「何とかいたしましょう」と、口約してあるのである。

しかし直義が、頑がんとして、

「いやです、いかに仰せでも、治安の任にある者として、さような計らいは出来かねまする」

と、受けつけないのにはどうにもならない。主張は、正しいにちがいないのだ。

「先夜とらえた群盗の首魁しゅかいが、大塔ご幕下ぼつかの者とわかれば、なおさら以て、嚴罰に付すべきで、それをゆるしなどしては、治安もくそもありません。ご肅正も空念仏に帰しまする」

直義は、むきになって、言いまくしたものだつた。

「なんのための御教書みぎょうしょであつたでしょう。かつは宮の御家来ならどんな非理でも通ると心得おるその思い上がりが小面憎い」

「まあ直義、そう一途いちずに申すなよ。世相にはうらおもてもある。むずかしい……まことにむずかしいこのさいなのだ」

「いや何とはなく、大塔ノ宮なる御存在が、兄者あにじやのお胸をむずかしくしているのでございましょうが」

「む。宮とのあいだに、あえて感情のもつれを持つなどは、惧おそれておる」

「では、恐れなので」

「穿はきちがえるな。恐こわいのは違ちがう。したが何といつても、後醍醐ごみこの御子みこのうちでも、また宮方軍すべてのうちでも、第一の御方にはちがいあるまい」

「兄者。こうなつては、じつを申しあげますが」

「じつをとほ」

「酢屋すやに押入った先夜の首魁しゅかい四名の者は、はや六条河原で首斬ってしまいました。いかに吟味しても、一言も吐きませぬゆえ、河原へ曳き出し、つい昨日、処分をすませたばかりなのです」

「なに、すでに斬ってしまっているのか」

これには高氏も、次のことばを失った。事後では今さらどうしようもない。ただかえすがえす、直義の用い所を、ひそかに悔いるのみだった。

殿ノ法印からは、かくとも知らず、しきりに引渡しを迫って来る。しかし高氏は、それを弟のせいにはしなかった。返答は腹をすえたものだった。四名の罪状は明白なので、宮方のご名譽のためにも、これを不問には付しかねる、悪しからず、と断わったのだ。

すると、信貴山しぎさんからは、ふたたび大塔の御名をかざして「処分はこちらです。ともあれ四名を引渡せ」と、高圧的に言ってきた。もちろん高氏は、すでに斬刑ざんけいずみのよしを答え、その群盗どもが、酢屋すやへ押入った当夜のもようを詳しい書類として、殿ノ法印まで送りとどけた。

事件は終った。

めずらしいことでもない。今の洛中には毎日あるようなものだった。けれど大塔ノ宮の幕下は、これをゆゆしい問題とし、恨みにとつた。「足利こそは」と、以後は何かにつけ、丸に二引の紋をべつな眼で見た。——初めからの後醍醐方でもない、つい昨日の寝返り武者が——という軽蔑なども多分にある。しかし当の高氏には今、そんな瓊末さまつを目のチリともしているひまはなかつた。

千早解ちはやどけ

洛中も洛中だが。なお幾多の事がらは後にゆずつておくべきだろう。ゆるがせにできないのは、河内方面の急である。千早のどよめき、金剛いったいの寄手の崩れだ。

六波羅陥落

の報が金剛山のふもとを驚かせたのは、おそくも九日か、十日も朝のうちと思われる。いずれにせよ、

「何、何。六波羅が？」

と、寄手の諸大將は、その飛報に、仰天したことにちがいない。

それまでの、ここのおちつきぶりからみても、

「しよせんは、長陣」

と、夏越しの蚊帳まで持ちこんでいたような寄手の首脳だったのである。「——京では、足利が寝返った」との取沙汰なども聞かないではなかったが、「足利とは、あの、ぶらり駒の高氏か」と、その憎しみも嘲ちやうろう弄ろうに交ぜて、たかをくくっていたほどだった。

もちろん高氏以外に、鎌倉からの援軍は刻々増派されているものと観み、まったく、ここをすてて六波羅の救援に駆けつけるなどの戦法は度外視していたのである。というよりも、阿曾あそ、長崎、大仏おびつ、二階堂の諸大将二万余騎ともいわれるこの大軍は、千早の城ただひとつに、意地でもとする攻略の妄念に吸いつけられていたのだろう。さもなくば攻めるに攻め飽き、秘策に秘策もつきはてて、いまはもう半歳の長陣に意気も倦うみ腐くッてしまっていたか。

どっちにしろ、鎌倉の鐮そう々そう十二大将が、ただひとりの楠木正成くすのきまさしげを、こうまで持てあましてきた帰結が、ついに足もとの大地盤を先に失う日をいま見てしまったこととしか言いようはない。六波羅の失陥は、即そく、都の喪失である。鎌倉との連絡もこれからはおぼつかない。

「さて、いかにすべき？」

を、彼らは、いくさ奉行長崎四郎左衛門ノ尉しろうざえもん じょうを中心に、その日、悲壮なまでに、こらしあつたに相違なからう。

しかしここでも、古戦記のうえだけでは、さっぱり呑みこめないことばかりである。古記録のいづれもが、六波羅の敗亡を知るやいな、寄手の十数万騎、見えもなく、なだれを打つて、逃げ退いたとある。はたして、そんなものだったろうか。

もすこし古記録の説を引いてみると——同時に千早の楠木勢が追い討ちに出で、そのため寄手は自分たちが設けておいた柵さくや逆茂木さかもぎにさまたげられ、道にふみ迷い、あるいは谷にころげ落ち、十万余騎の攻囲軍も、残り少ないまでに討たれてしまった。——それゆえ後々までも、金剛山のふもと、東条谷のあたりには、矢の穴や刀創のある髑髏どくろが、いつの世までも草むらにゴロゴロころがっていたという。

古来、戦ばなしとしては、以上のようなことに語りつたえられているが、ほんとはそんなわけではあるまい。

近江の番場では、同じ鎌倉武士の探題仲時以下四百何人が、ことごとく、枕をならべて壮烈な自刃をとげた。いかに衆をたのんでいたものにして、金剛山の下に埋まった白骨の

みが、いたずらにそんな周章狼^{ろうばい}狽^だだけの犬死をとげたなどとは思われない。

おそらくは味方同士のあいだから、さまざまな誤伝や流説がわきおこり、また事実、たちどころに、

「いまからは宮方へ」

と、裏切りに出るなどの同士討ちもおこなわれたのではあるまいか。

戦局に敏感なのは、上よりもむしろ下部である。——六波羅が落ちるいぜんからとうにここへも聞えていた——足利殿の離叛などは、とくに彼らの士気を大きくゆすぶっていたにちがいない。

それと、見のがせないのは、古記に徴^{ちよう}してみると、寄手の総退却となつて、

二里三里が間の山路を

敵には追つたてられ

今朝までは十万騎の勢も

残り少な^{すくな}に討たれて

わづかに生けるものも

馬^{うま}物^{もの}具^ぐを捨てぬはなし

というほどなのに、

されど宗徒むねとの大将達は

一人も討たれずして

その日の夜半に

南都にこそは落着かれける

と、ある一事だ。

これで見れば、歴々の大将たちは、長崎以下すべて、もつとも早く、またもつとも無事な逃げ口をとつて奈良方面へなだれ落ちたとしか考えられない。

けれど、それにせよ、ただ六波羅の悲報ひとつで、こんなに至るまでの、俄なみにくい総くずれをおこしたとするには、まだすこし疑問があるう。思うに、この味方内から離反者が簇ぞくしゆつ出したばかりでなく、撰せん河か、泉せんといったいにわたる日和見ひよりみ的な武族もまた、

「すわや洛中が官方のものとなつては、すえの勝敗もおよそみえたぞ」

と、がぜん態度を変え出したのではあるまいか。

さらには野伏から土地の散所さんじよみん民までが、こぞつて寄手方の背へ、けわしい形相をしめしたなどが、鎌倉勢には腹背ふくはいの怯えとなつて、さしも大軍とみえた金剛山麓ありの蟻ありの巢すの

ようなものも、一陣のくずれが、二陣三陣のくずれをよび、ついには収拾もつかない大混乱をみずから招いてしまったものとおもわれる。

偶然ではあろうが。和泉国の松尾寺まつのおでらでは、かねがね北条退治の如意輪にょいりんノ法ほうを修していたところ、ちようどその満願にあたる日に、千早の囲みが解けたと、その「松尾寺文書」は仏徳を誌しるしている。事の真偽はともかく、撰、河、泉といったの潜伏勢力が、いかに鎌倉勢の破綻はたんを窺うかがっていたかは、これらの例にみてもわかる気がする。

そして、時の芽ぶきを待ちつつ、近国近郡のひろい山野にその氣運を鬱うつ然ぜんと萌もえ出させた原動力は千早であった。千早に拠よつて、よく今日までを耐えてきた超人的な人々の力であった。

「やつ？」

城のやぐらで誰か叫んだ。

そのとき、物見山のとりでの方でも、

「おうつ、ただごとでない」

「寄手の内に何かがある」

「何か起った！」

と、異様な昂奮をみせていたが、たちまち楠木正季まさすえと二、三の将が、坂道を駈けくだつて、正成のいる三の曲輪くるわの方へと、

「兄上、兄上つ。お気づきですか。麓の方を」

喘あえぎのぼつて行くのも見える。

はや、正成のすがたも大勢にかこまれて、やぐらの上に立っていた。

一、二ノ曲輪くるわ、妙みょうけん見でまるの出丸、そのほかの諸将もみな一つに寄りかたまり、ここでは

かえつて声もなく、ただ金剛全山の異様な敵のうごきに、ひとみをこらし合っていた。

「お、ご舎弟」

正季がのぼつて来たのを知ると人々は正成のそばを少し離れて空あけた。その正季には、こここのすべての顔がみなゆるされない悠長なものに思われた。

「兄上、兄上には、どうぞいらになりますか。籠城百七十日いらい、寄手のこんな動揺は初めてです。ただ事でございますね」

正成は、

「むむ、……」

と、のみであつた。

ひとみも彼方のままだつた。

「遠くの陣ばかりか、近くの木見、猫背山、多聞寺下の敵兵なども、あわてふためいて、なだれ退が^さつて行きます。一兵も打つて出ず、ここはこうしておりますのに」

「正季、やっと、時が来たらしいな」

「てつきり六波羅が陥ちたものと思われま。まだ忍ノ大蔵の報せはありませぬが」

「ム、あれほどの敵勢が、致命をうけたような狼狽^{ちめい}ぶりは、まさにそれか？」

「兄上つ」と、正季は迫つて「——即刻、追討かけろと、ご指揮をおくくださいまし。浮き足のあの敵勢へ、ここからも打つて出れば」

「いや」

と、正成は、彼のせきこむ語気をさえぎつた。

「そのことは今も、これへ集まつた和田、松尾、南江、神宮寺、神宮寺、佐備、橋本らの部将が、口をそろえてわしにすすめていたところだ。……だが、待て」

「待てと仰せのまに、機を逸^いしましては」

「図に乗るまい。——籠城の兵は、病人負傷者をのぞけば千人を欠いておる。それも草を

食つて、飢餓きがにたえつつ、この孤塁こるいをささえてきた骨と皮ばかりな兵でしかない」

「でも決死の千人なら」

「しかし敵にも侍はいるぞ。たとえ戦意を失った寄手にしろ、総勢二万余騎の大軍だ。この城と、この天嶮よに拠ればこそ、よくふせぎえたものの、ただの野戦に出れば、その芸はできぬ。まちごうたらみな返り討ち。いや、もすこし見ていよう」

もすこしとは何を待てというのか。正季だけでなくみな疑った。しかし、いくらも時をおかないうちにあつた。寄手方から混乱の中を脱して、千早へ落ちてきた一勢がある。旗を巻つるき、弦はずを外し、全兵、降伏のかたちをとっている。

正成、正季について千早の内うちにいた石川豊麻呂の父、散所ノ太夫義辰の手勢てだった。義辰は子を助けたさに、先月らい、望んで寄手の陣に加わり、その子を介かして、ひそかに二心をかよわせていたのである。

これと同時に、忍おしノ大蔵も一群の忍おしの手下てかをつれてこれへ姿をみせた。正成もここに初めて外界の全貌がわかった。敵二万余騎の不可解なあわてぶりも、故なきではない事情をいまは信じていいとして来た。

「よしつ、打つて出る」

と、正成は、正季以下の者の望みを、そのごにおいて、初めてゆるした。

あらゆる観点から、寄手はもう必然な自解をおこしている支離滅裂と見たからであったが、しかしなお正成は、諸將の逸るにまかせて、ただ盲目的な追撃を誇つてよしとするのではなく、

「傷負は行くな」

と、いましめ、

「いささかでも体に故障ある兵は残れ。とりでにいて、あとを守れ」

と、その号令にもとくに心をつかっていた。

今や全城の士気は沸くばかりであつたにせよ、どれもこれも、幽鬼のような籠城裏れだつたのはぜひもない。病者怪我人のそれらをはぶくと、城外への急追撃にたえうる将士は、せいぜい六、七百か、あるいはもつと以下とすら想像される。

「つづけ」

ほどなく、正成は、率先して城を出た。

その正成も満足な体ではない。矢傷をこじらせた深股の傷口には蛆さえわいていた。

だが彼は、自分を押し進めることが、そのまま千早城の前進であり、敵に多くの死者を捨

てさせるより、もつと有利で意味の大きな味方の拡充と見ていたにちがいない。

「旗を振れ」

正成は、途々みちみち言つた。

「菊水の旗を、高々と振つて、旗の下へ、降伏してくる者、降伏せぬまでも、これへ刃向かつて来ぬ敵には、手出しをするな。やがてはみな寝返つてくる者ぞ。——ただ追い声かけて追いまくせ。いたずらに敵を殺して快とするな。逃げまどう雑兵など、いくら斬つても益はないぞ。ただ追えばよし。敵は敵みずからの恐怖に追われて潰走をつづけ、自身の馬蹄で自身の犠牲を止めどなく捨てて逃げよう」

これらの令を、正成はいちどに叫んでいたのである。

敵を追いつつ、機に応じて、いくたびにも、馬上から前後へ言つていたのである。

馬は、見事な鞍くらをおいたのさえ、敵の去つた諸所方々の陣のあとに、放れ駒となつて捨てられてあつた。正季もその駒の一つを拾つてまたがっていた。彼のほか、

和田正遠まさとお、正高兄弟まさたか

神宮寺ノ正師まさもろ

佐備正安さびまさやす

安房四郎左衛門

安間了現——なども駒をひろつて先駆し出した。

また、その日、返り忠してきたばかりの散所ノ太夫義辰とその子石川豊麻呂も、手勢をつれて追撃に加わっていた。

いやこの少ない千早勢が、赤坂ともう一方の間道を駈けくだして、西条川と東条川とをむすぶ麓の石川河原へと出てきたころには、おどろくべき人数にふくれあがっていた。敵の数千ともみえる部隊が、逃げおくれを装つてふみとどまり、正成たちと、その菊水の旗をみると、

「いまからは御麾下へ」

と、旗の下に、降を乞うのやら、あるいは、

「宮方へのおとりなしを」

と、部下の簿を呈して来る者やらで、そこは諸国の武者の色で、さながら武者市の観を呈し、正季らも、それらの降人を受け容れる忙しさに手いッぱいで、遠く潰乱しつづけてゆく敵へ、俄に追い迫って行くひまもないほどだった。

葛城、金剛、それに和泉山脈の一端がのびている。

為に、寄手数万の兵は、石川の流れと共に、北へ北へと、その潰走を一方へ争ツて行くしか、外界への吐け口はなかった。そのうえ、彼らが、もつとも恐れていたものと、予期せるごとくぶつかった。

なにかといえは。

古市や道明寺あたりの散所さんじよみん民らの反感だった。

かねがね、東国勢にたいする散所民らの反感は、露骨なほどだったのである。遠征二万余の将士が、威張つて、しかも半年も、設営で暮らしてくるには、その期間どうしても、彼ら細民を牛馬のごとくコキ使い、その労働力から膏こうけつ血までを、搾しぼり上げてするのなれば、行われない仕事であった。

だから関東の兵馬とみれば、日ごろから怨嗟えんさの的まとで、散所では、女子供までが、「けなくそわるい、くそ蠅や」

と、白い眼で見っていたのだ。

反対に、弱者は弱者に同情を持つ。

彼らに何の理解があるわけでもないが、朝夕に金剛山の空を見ては、楠木一族の孤塁を思い、この大軍の包圍によくもと、心で讚嘆したり、寄り寄り小声で声援もしていたのだ

つた。わけて楠木家の祖は、たまぐし玉櫛ノ庄しやうに住んで、散所民との縁も浅からぬ家柄だったことでもある。

「千早、がんばれ」

「お陥ちてくれるな」

関東勢の下に使われながら、ひそかには、そんな祈りをもっていた彼らなので、ひとたび、六波羅の敗亡を聞き、今日の寄手崩れを、寸前に知ると、

「わああつ」

と、各所でかん声をあげ、

「ざまを見さらせ」

とばかり、その退路の妨害に出たのは、たんなる暴徒の敗者いじめだけでもない何かであつた。

石川の流れは、当時、大小幾すじにもわかれていたが、随所の橋は、橋板を取って捨て、巨木や石を、ころがしておき、小さい橋はみな、ぶちこわしてしまった。また道には大穴をほつて、さりげなく見せておき、そんな陥し穴を、いたるところにこしら拵えておくなど、とにかく、かわちだいら河内平の散所民がこぞツてやったことである。だからその迅速さは、東国の軍

隊が千早攻めにほどこした程度のような小規模ではなかったのだ。

しかもまた、六波羅陥落を知ると同時に、難波、住吉、堺あたりにいた宮方の遊撃部隊や、和泉の一端からも急進して来た武族があつて、東国勢の逃げなだれて来た行くてをさえぎり、

「みなごろしに」

と、弦つるをならべて待ちかまえていたのであつた。ここにいたつてはもう、当初、二万余といわれた関東の寄手も、ただ支離滅裂な叫きょうかん喚わんに落ち、吹き捲こかれる枯葉こようのような、無力な渦と渦を描いて見せるだけだったであろう。

死傷、ソノ数ヲ知ラズ

といわれ、そして、

味方ノ屍カバネヲ踏カバネンデ逃カバネグル者、マタ忽カバネチ屍カバネトナツテ、他ノ馬ニ踏カバネマル――

と、古戦記にある惨状は、まさに、ここらで現出されたことだったのであるまいか。

もちろん、楠木勢も、この辺までは、追撃をゆるめず追ッかけて来ていたに違いあるまい。

敗走の兵馬ほど、怪しまれるものはない。これがきのうの、あの大軍か、あの歴々な大

将たちの軍旗かと、あきれもされる。

その東国勢は。軍のすがたもなく、ちりぢり、奈良へ逃げ込んだようだった。

逃げおくれた兵は、生駒いこまや龍田あたりで殲滅せんめつされたり降伏した。あるいはまた、自国へさして、逃げ帰った武族も少なくなかつたろう。

いずれにせよ、二万の軍も、雲散霧消のていだった。阿曾あそ、長崎らの諸大将は、ひとまず南都興福寺に拠つて、残兵をかりあつめ、

「このうえは、洛中へ出て六波羅を奪りと回かえさん」

と、再起をはかつてみたものの、もう昔せきじつ日の土気はない。それにここでも、奈良の土民の眼は冷たかつた。また僧団側も、食糧の協力をさえ、はや拒み出す有様だった。

結局。——彼らも今は、鎌倉へ落ちようにも行く道なく、やがてはみな、首を揃えて降伏に出るしかないものと見られるにいたつていた。「保曆間記ほれきかんき」には、五月中、なおしばしば、奈良近傍に宮方の出撃あり、とみえるが、それは以後ひきつづいて、敗残の鎌倉諸将を、興福寺へ狩り立てるための行動だったに相違ない。

時にきて、正成の方はどうなつていたか？

このさいにおける楠木正成の態度は、よほどよく、見ておく必要があるう。

いまや勝者の陣でも、彼こそは、武勲第一と自他共にゆるされるものだった。

いや、武門列だけでなく、民衆の声望もまた誰より高い。領下の民はもちろん散所民まで、

「ようも、あの砦とりで一つで」

「関東の大軍を。……」

「しかもそれも、六波羅へ向った宮方とは、わけがちがう。楠木勢だけの一手じやった」と、熱狂的にほめたたえた。沸騰ふつとうすると、民衆は、事実以上にも、誇張したがる。

しかし、野みに充つるそんな声に、正成は酔ったであろうか。自身の武勲むこに驕おごったろうか。どんな史ちように徴ちゆうしても、このときの正成に、それらしき風はみじん見あたらぬ。

もしその正成に、他日への野望やぼうがあり、また当初の「笠置出仕かさぎしゆっし」の腹が、栄達への野心しんであつたら、それへ登る階かいてい梯はは、

今こそ目の前

に、あつたといえよう。——孤壘千早を開いて、百七十日ぶりで降りてきた菊水の旗の前には、数千の降兵と、また和泉、紀伊、摂津せつの各地から呼応こおうしてきた味方とに、

「たのもしい楠木殿」

「わが多聞兵衛どの」

と、それこそ、時の氏神の顕現のように、圍繞されていたのである。——だから今なら、それら参陣の武族へ、彼がどんな高い床几から尊大な一顧をくれても、人々はみな彼を大将と仰いで、行く末までの隨身も惜しまなかつたに相違ない。

ところが、彼には、その気がなかつた。そしてそのことが後には逆に、野心満々な時人からは、物足らない人と見られて、やがては彼から人の離れて行く、一因にもなつていかと思われる。

とにかく河内平野は、この戦勝で沸騰していた。兵は勝どきに酔い、散所民には、豊年だった。彼らは山野を走りまわつて、東国勢の屍から、その持物を剥ぎ、肌着まで奪つて、一夜のうちに、どの死骸もみな、まる裸にしてしまった。その景気が飢餓の町を、近年になくさんぎめかせた。

「正季」

そんな中で、正成は弟をよんで、告げていた。

石川河原の、仮陣の夜だった。

「わしは明朝、いちど千早へ引きあげる。あとを、ようせよ」

「ここは」

「そちにまかす」

「かしこまりました」

「安間了現、神宮寺正師なども残しておく。なにせい、数千の降兵と、俄に、官方へなびいた近国の武者どもが、河内一円にひしめき出していることだ。よほど統御がむずかしい」
 「お案じなされますな。安間、神宮寺などは、武者扱いにそのない老臣、よく相談してやります。はや掠奪りやくだつ乱暴などの雑訴が、寺や百姓のうちから頻々と出ておりますが」
 「さつそく諸所へ、嚴戒の制札せいさつを立てろ。また、令旨りようじは、大塔ノ宮のおん名を以てするがいい」

「楠木家の名ではいけないのですか」

「領下だけならよいが、わが家は近郷の地主にすぎん。千早の籠城ろうじょうには、少なからず、宮のお援けもあつたこと。広くおよぼす沙汰には、宮のおん名を以ていたさねばなるまい」
 「それもこころえました。して、赤坂へはいつ？」

「移り住むかと申すのか。そうだの、下赤坂しもの城は、日を待たず復旧させよう。わけて山上にある女子供は、一日もはやく、そこへ帰りがつていなくてもあろうしの」

こうして、正成が、いちど千早へ引きあげて行くまでには、信貴山毘沙門堂にある大塔ノ宮へも、洛中の千種忠顕へも、使いをたてて、つぶさにこの戦捷を報告していた。

そして、彼の姿が、千早のとりでへ帰ってきた日は、あの河内平野に沸いた物狂わしい屍山血河の勝どきとは異なつて、寂かな青葉のうちから、よろこぶとも泣くともつかない、ただ高い感動にせまつた人々の諸声が、わあつと、飮し合つて、彼を争い迎えたのだつた。

「おお、御本屋さま」

「お館」

正成の姿は、たちまち、留守していた骸骨のような人々や、傷負の片輪たちに、取りすがられ、また行く道をふさがれて、歩けないほどだった。

「よろこべ。いくさは勝つた。みなのお蔭で勝つた」

正成もまた顔を濡らした。勝つたというよろこびも、彼にはこの群れの中で初めて実感のものになつていた。

「あとで。あとで、また」

と、正成はすぐその足を、さらに山上の、転法輪寺の方へ向けていた。

がいせん凱旋の彼を迎える祝いの鐘が、戦勝祈願の達成を告げる ごんぎよう勤行のそれか、上の転法

輪寺の鐘がごんごんと鳴っている。その声音のなかに、妻子の顔があつた。坂へかかると一ぱい歩行に困難な正成は、部下たちの手でその腰を押され押され登って行つた。

彼の姿が山上へ出ると、ここでもまた、五月の あおあらし青嵐に声を染めて、

「おお、おやかたじや」

「わが殿、わが殿」

と、歓呼の迎えだつた。

転法輪寺の門前には、兵といわず、すべて半歳の籠城を共にしてきた ぞうにん雑人から老幼男女まで群れ立って、どれも狂喜の顔をくずし合っていた。わけても、別院の病棟から、ころげるように走り出てきた八尾ノ新助、さぎ鷺十郎、矢尾常正らの重傷者たちは、

「お帰りなされませ」

「めでたく、ご凱旋で」

と、口々に、

「とはいえ、てまえらは、ご馬前にも立たず、かようなざまにて、面目もございませぬ」

と、さげび、果ては、

「不忠のほどおゆるしを」

と、正成の足もとに、それぞれ、その口惜しげな体を伏して、あやまるのだった。また、泣くのであった。

正成は、それらの者を見ると、

「ばかを申せ」

と、わざと笑つてみせた。

「きょうの勝ち軍は、おまえたちが、身を片輪にまでして剋ちとつてくれたものだ。うれし泣きなら聞えるが、愚痴はないはず。たれにも増してよろこぶがいい。おまえたちは勝つたのだ」

それから、彼の一步一步の前へ寄つて来る男女の手放しなよろこびようは、むしろ彼を途方に暮れさせた。しかし彼はなによりもまず、転法輪寺の内にある総帥の前に伺わねばならないとしていたのであった。

その寺中には、四条隆資の陣所がある。

この法体の公卿大将は、千早の上にいただけで、いわば名ばかりの大将ではあつたが、

そんなかぎりものにはすぎないお人へも、正成は決して非礼をしなかった。かつての、後醍醐の近臣であるので、その御名代のごとく仕えてきた。そしていまもつぶさに、その床几へむかつて大捷の報告をすました後、

「なにもかも、これは天てん佑ゆうと申すべきでしょう。勝つてもまだ、勝つたことが、夢心地のように存ぜられます」

と、正成はほんとの気もちのまま述じゅつ懐かいしていた。

「いや、兵衛ノ尉ひょうえい じょう」

と、隆資は、彼があまり誇らないのを、むしろ物足らないように賞ほめそやした。

「まったく、其許そこ一人の智謀がよく今日を招来したのじゃ。勲功随一と申してよい。早々に、伯耆ほうぎ船上山せんじょうせんのみかどの御本営へ、事のよしを使いへのぼせ、奏聞そうもんに達しおくぞよ」

隆資のそばには、大塔ノ宮の家来、高間秀行、僧快全なども、その帷幕いぼくを一つにしていたのである。

彼らとしては内心、自分たちが、裏金剛から千早をたすけていたことが、千早の命脈をささえて来た唯一の源泉力であったのだ——という自負満々であったが、しかし一応は口

をそろえて、正成の殊勲を共にたたえ、他日の恩賞には、正成こそ、その筆頭であろうな
どとも言い囃はやした。それを正成はただ頭づを垂れて聞いて退さがった。

そしてまもなく彼は、隣坊りんぼうの朝原寺へ移つて行つた。朝原寺には、彼の妻子が待ちわ
びていた。

たいへんである。生きて歸つた父を見た多聞丸や三郎丸は、正成が坐ると共に、この人
を自分らのものとして、つかまえたきり離はなしもしない。

いくさに勝つたと聞く昂奮こうふんはこの子供らをも異常にしていた。それにまかせて、ただ
眺めてゐる久子も涙ばかり先立つて、いつまでことばもないのであつた。

「さ、もうよからう」

まといつく子供らの手をそつと解いて、

「晩にしよう。のう、夜さりまた、ゆるりと、はなしをしようわえ」

正成もここでもう、その戦いくさ疲れを隠ひそめようとしていながつた。

子供たちは、なお、ねばつて。

「では、今夜は、お父さま、ここへ泊まるの」

「ね。一しよに寝ような」

「晩のごはんも」

「お、久しぶりで、みなと共に喰べようぞ」

「あしたの晩も」

「いや、今夜だけ」

「どうして？」

「ははは。よう聞けよ。近くのいくさは終わったが、まだまだ遠い九州や東国では、合戦の最中なのじゃ。そこで今のうちに、赤坂の館たちをこしらえ直して、母者やおまえたちを、元の住居へ返したり、父や一族どもも、次の備えをしておかねばなるまいがの。……また何事が起つてもビクともせぬように」

「うれしい。赤坂へ返るんだとさ」

子供らは手をたたいた。そして、父と母のまわりを、めぐり廻った。

「殿」

久子は、やっと、子供らから譲られたような良人のそばへ、こころもちすり寄った。

「わたくしたちは、なおここにいても、さして不自由はございません。それよりは、お体

のご養生を、幾日なりと、ひとまず先に遊ばしてから……」

「いや、いや」と、正成はかろく首を振って「館たちの修築を急ぐといえば、わたくし事のよ
うだが、それも軍事の急なのだ。畿内きない洛中も、まずは宮方一色に風靡ふうびされたが、いつまた、
意外な兵変を見ぬ限りでもない。——そのためには、下赤坂を復旧して、ふたたび木の
根や草を食わぬ用意だの要害も要いる……」

ふと、彼は耳をそばだてた。

「久子」

「はい」

「ごこの奥か、外の小屋か。生れたばかりのような嬰兒あかごの声がどこかですが……。あれ
は？」

「お妹の卯木うつきさまが、ついさき頃、御安産なされました。まだ産屋さんや囲いのうちにお臥ふせ
りではございますが」

「え。卯木が産んだか」

「それもほんに玉のようなよい男おの子を」

「ふうむ」

正成は、唇をむすんで、やがて、そのおもてにあつた戦場いらいの硬ばつたものを、自然な微笑に解ほぐしていた。

黒い戦雲の下では、あんなにも人が死んで行き、ここには、呱呱ここ々の声の一つ新たに生れて
ている。

「ふしぎだなあ！」

沁しみ々しみと、彼は肺の深いところから、つぶやいた。

「こんな籠城の中からできえ、宿やどつたものは、ついに生ぶ声をあげずにいない。しかも木の根や草で養われた胎内の子ではなかつたか。……ああ、やがて次代に、そんな子がどう成人してゆき、またどんな宿しゆく業ごうを課せられた人となつて行くのか。思えば、おもしろい宇宙だ。いや不思議きわまるものだ。人間の子が生れるというこの争いえない神わざは
！」

うかれ囃ばやし子

五月二日の朝だった。

ここで断わっておかねばならないが、以下の時局は、日時を少しさかのぼって、もいちど、元弘三年の「五月曆ごしよみ」をくりかえさねばなくなる。

ところでその二日の早朝。東国鎌倉ノ府ではまだ寝起き顔の人々のあいだに、ふと小さい噂がかもし出されて、家いえごとで、

「おかしいよ、どうも」

「何かヘンだぜ？」

と、不安な朝食をすましているまに、はや若宮小路わかみやこうじの執権しつけんノ御所でも、あきららかに、何かあったらしいうごきを総門の内外に見せていた。

「わかった、わかった。いやもう、たいへんだ」

たれが、どう嗅かぎつけて、つたわり出すのか。

町の目や耳は、午ひるごろには、事のあらましを知って、一そう心ぼそげな眸を、武者の馬ぼこりに、そばめあった。

でなくてさえ、彼らは、上方における鎌倉軍の旗いろは知っている。——武者所まんじょや政まんど所じょでは、やつきとなつて、

「東国勢は征ゆくとところで勝っている！」

と、偽報を公示して、人心の揺れを抑えていたものの、しかし昆虫のように、また蝶や鳥みたいにも、府民は生活を託しているこの土壤に敏感なのだった。ただいやおうなしの権力下にあるばかりに、その労働力や技術や商戸のいとなみを、軍幕府の強要にささげてはいたが、もうどこかには、この鎌倉の運命を感じとっている顔つきばかりなのである。

「えっ、何が？ どこで何があつたんだね」

「大蔵おおくらのおやしきだよ。……あの足利屋敷の内に、御執権の命令で、質子ちしとして、足止めをされていた足利どののお子が、いつのまにか、いなくなったという騒ぎなんだ」

「へえ、あの千寿王せんじゅおうさまか」

「まだ四ツ五ツの、お小さいお方だそうだ」

「もうひとかたの、竹若さまとか仰つしやる方は」

「それも、叔父御おじごの法師にお預けとなり、伊豆の寺に閉じこめられているそうな」

「じゃあ、その和子も、逃げ出したろうか」

「さあて。そこまでは分つてないが、質子が脱け出したのは、父御ていごのさしずちにちがない、すわやもう、足利のむほんきわと極まつたぞ、と執権御所のご評議やら、すぐ八方へ追手が駆けるやらで……それでこんな、馬ぼこりが舞う始末じゃげな」

「ふーむ、足利殿がの」

町じゅうは沈んだが、しかしまだ、半信半疑ではあった。

けれど午後にはまた、大蔵屋敷のほか、二軒の館が、幕府の兵にかこまれたのを、彼らは目で見た。

一つは、鶴ヶ岡下の赤橋守時の邸であった。高氏の妻、登子とうこが預けられていた実家である。

が、登子は、姿を消しもせず、ちゃんとそこにいたという。

さらにもう一軒の方は、小町ノ辻の新田義貞の屋敷で、昨今、義貞も妻子もないことは、幕府方にもわかっていたのに、あえて差向けられた兵は、土足で乱入するやいな、すぐ屋敷じゅうの家捜しにかかっていた。

「ない」

「なにもないわ」

「目ぼしい物は何ひとつ」

「まるで空家だ！」

家捜しの物音は、兵たちの張合いなげな口々のうちに終っていた。

「ひきあげよう」

幾通かの、公卿名の書簡ぐらいを獲物として手にかかえた部将が、こう、あごをしゃくつて、兵たちと共に、いちど新田屋敷の門を出たが、

「いや待てよ。いかに当主義貞や家族がおらぬ屋敷にせよ、余りな無人さは、いぶかしい」彼の再度の命で、兵はまたあとへもどつた。そして留守居の老臣、小者、釜屋かまや働きの男女十七、八名の者を残らず、じゆずつな繋ぎとして引きあげて行つた。

この光景も、町の人々の目を刺した。

今暁、足利屋敷から、質子ちしの千寿王が、とつぜん、姿を消したことにまた輪わをかけての噂うさが、

「新田どのも怪しいのか？」

と、波長をひろめた。

その新田義貞は、過ぐる三月下旬ごろ、たつた二、三日この鎌倉にいたことがある。

「心なくも病氣のため」

という称しなえで、金剛山の攻囲軍のうちから、暇いとまを願つて、郷里へ帰る途中であつた。

幕府では、彼が、現地からそのまま帰国の途とをとらず、病中なのにわざわざ鎌倉へ立寄

つて、正しい届け出での手続きに出たことを、

「神妙である」

として、そのさいの彼には、おおむね寛大だった。

小町の留守には、彼もまた、ほかの御家人並に、正妻がおいてあった。で、病身の看護みとりの手に、ぜひその妻を、連れ帰りたいと願い出たのである。

義貞の室は、北条氏の重臣、安東左衛門高貞（入道聖秀ともいう）のむすめであり、その安東家からも、

「よろしきように」

との口添えが、幕府へなされていたので、その妻と共に、上野こうずけへ帰って行った。

ところが、帰国以後の義貞の身辺には、とかく病身ともみえぬという報告が、近くの国府から幕府のうちに聞えていた。——それがいにもチラホラ腑ふにおちぬ風聞があり、さらに今暁の、足利千寿王の失踪しつそうという突発事も起ったので、

「念のためだ。新田の小町屋敷もいちど洗つてみよ」

との高時の命から、俄な家捜しとなったものだった。

が、結果は何もうるところがない。数通の公卿手紙も、四季のたよりや、持明院統の人

の筆で、幕府として、何ら敵視されるものでなかった。

それと留守居の老臣も、ほんとに世事にもくらしい老家職にすぎず、小者、釜屋働きにいたっては、論外な無知で、取調べの労にも足りない。

しかし幕府は、これでいいとはすまさない。むしろ、積極的な一策へと移行した。すなわち、その日すぐ

あかしいずものすけちかつら
明石出雲介親連

くろぬまひこしろうともきよ
黒沼彦四郎伴清

のふたりが、こうずけのくに上野国新田ノ庄へ急いで行ったことでもその関心のほどが知れよう。

がこの両武将は、決して武力をかざして向ったのでなく、表面、幕府の徴税使ちようぜいしとして下向して行ったのだった。

ちし質子の足利千寿王のとつぜんな失踪は、諸書、どれにも、

五月二日夜半ノ事

と見えるから、それがしもつけ下野、こうずけ上野あたりへわかったのは、おそくも五月五日以内であつたにちがいない。

とすれば、すでに新田義貞は、自己の諜報網からそれは耳にしていたと見るべきであろうが、彼の住む世良田の館は、さくら若葉のなかに、きょうもいたって森閑としていたのみならず、その奥まったところからは、笛、つづみ、太鼓の音など、いとも暢び暢びとながれていた。

考えてみると。

この日、五月五日は男の節句であった。武家ではとくに、端午ノ節句は、おごそかにやる。

わけて義貞には、幼名を辰千代といった義顕や、その下の徳寿丸（後の義興）などの男子があつた。それで今日は近親者の子や父兄まで招かれて「あやめ酒」をいただいたり、五月遊びに興じあつていたのである。——とにかくその賑やかなささら歌や笑い声の興もまだ尽きない午過ぎ頃のことだつた。

「おそれいるが」

と、息をきつている家臣の里見新兵衛という者が、中次ノ間の侍へ、「脇屋殿の顔を、ちよつとこれへおかしいただきとうぞんずる。せつかく、お遊びの中ではあれど、すておけぬ火急な大事がおこりましたので」

と、上がりもせず、庭口からの願いであった。

ご無礼には当るまいか。

はじめ、中次の侍たちは、それですこし渋っているやに見えたが、新兵衛の血相もただならずと思つたか、やがて一人が立つて奥殿おくでんのにぎやかな大一座のほうへ廊を渡つて行った。

と。まもなく、

「新兵衛か」

廊の上に、顔へ酔を花やがせている人がみえた。義貞の弟、脇屋ノ二郎義助である。

近くの宝泉寺村脇屋に別所をかまえているので、脇屋殿とみなよんでいた。

「申しわけございませぬ。お座立ちをねがいました」

「かまわぬよ、そんなことは。それよりは何事がおこつたのだ？」

「ただいま熊谷くまがひから早馬が飛んでまいりました」

「む！」

「鎌倉表の同勢五十人ほどの一隊が、これへまいるとの知らせです。いや、すでに利根とねの渡しへかかっているよしにございますが」

「鎌倉の？」

「はい。明石出雲あかしいずも、黒沼彦四郎、そうふたりが、幕府の使者として、新田ノ庄へくだるものと、道ではいわれておりますそうな」

「ふーむ。なんの前ぶれなしにだな？」

「怪しまれます。しかもこのさいのことではあり……」

「待っておれ。一おう、殿のお耳へ入れてくる」

義助は、いちど奥へもどつたが、またまもなく姿をみせた。そして新兵衛を近くにまねき、廊の上と下とで、なにかを、ひそかに耳打ちしていた。

新兵衛は、主命をのみこむと、ひざまずいて、

「こころえました。では、そのように」

と、すぐどこかへ走り去つた。

世良田のみなみへ半里、利根川べりに行きあたる。

その川岸の里は地名を徳川といい、新田家の一支族、徳川とくがわ教のりうじ氏の住地だった。――

――この世良田徳川の子孫が、遠いのちに、江戸幕府の徳川將軍家となつたのである。だか

ら代々の徳川家は、祖先新田氏をおろそかにしなかった。

さて余談はおき、いま、利根を渡つて来た徴税使ちようぜいしの一行は、河原の辺で、しばらく憩いこうていたが、

「まず近くの徳川家へ、沙汰の使いをやつてみようか」

と、宰領さいりょうの明石出雲介と黒沼彦四郎とが、やおら、腰をあげはじめ。

ところへ、駈けつけて来た里見新兵衛が、馬を下りて、二人の前へつかつかと歩みよつて行き、そしてたずねた。

「あいや近国の衆ともお見うけ申されぬが、いずれからお越しあつて、いずれへおわたりの人々か」

「わしらか」

傲然ごうぜんと、出雲介がうけて、

「鎌倉から」

と、単にいう。

「はて鎌倉のご上使なら、前もつてお館へ、何らかの触れもあるはずですが」

「いや、自分らは政所まんどころ直属の者でおざる。つまり貢税こうぜいの急務をおびて、当地のみな

らず、東国諸所へまかりくだるもの、いちいちの先触れなどはしておらぬ」

「ははあ、ぜいもつ税物のお役儀で」

「いかにも」

「これは、そつじ率爾を」

と、新兵衛は自分の思いがちをそう詫びた。けれど決して、先方のことばどおりなものとも受け取っていなかった。

「して、当所への、ご用向きは」

「たれぞ、しかるべき仁しんに会うて申し渡そう。そこもとは、新田殿の家臣か」

「さようにござります。いつも街道木戸番所に詰めておるけみやく検見役、里見新兵衛ともうす者で」

「ならばちようどよい。新田殿へもぜいもつ税物の御下命があり、そのため当所へ下くだり申した。ひとまず宿所へご案内ねがいたい」

「かしこまりました。しばらくお待ちを」

新兵衛は、いちど去った。そして近くの徳川教氏や大関平馬の門へ告げて、それぞれ家来を糾合し、出迎えの列を揃えて、そのさきに立った。

徴税使の下向ときくと、どこの領土でもこの頃は、またかと、おののいたものである。大戦いらいの出費に次ぐ出費から、幕府としてもムリは承知で諸国へ苛烈な追徴の使をのべつ派遣していたところなのだった。

「いざ、どうぞ」

新兵衛たちは一行四、五十人の徴税使をつれて世良田へ入った。といつても、義貞の居館へではない。その隣の「館ノ坊」とよぶ寺だった。

館ノ坊と、義貞の館とは、べつなように一つでもあった。徴税使の宰領ふたりは、やがてその陀羅尼院の客殿におさまった。そして新兵衛から、

「ほどなく、脇屋どのが、ごあいさつにお伺いいたしまする」

と聞いていたが、しかし当の脇屋義助は、いつまで見えはしなかった。のみならずその夕、義貞の館では、いよいよにぎやかな端午遊びの笛太鼓だった。

「耳ざわりな」

と、ふたりの徴税使は、にがりきつて、

「なんだろう、あの無遠慮な、浮かれ囃子は」

と、陀羅尼院のうちから、義貞の館のほうを、木のま越しにうかがって言っていた。

「いや忘れていたが、きょうは五月の節句。端午の客の騒ぎとみえる」

「それは合点がてんだがよ」

と、出雲介は、彼方の大屋根の灯へ、目をすえたまま、

「ここは上野こうずけの僻地だが、天下、戦にあえいでいる今だというのに」

「それも、来てみて分った。新田は戦の外に立って費ついえを避け、このすきに、自領の力を養っているらしい」

「では、足利千寿王の逃亡と義貞とは、関かかわりがないと、貴公は見るのか」

「まず、ないと見てまちがいあるまい。一方の高氏は遠い上方の戦場へ出ていることだし……。またもし新田に策があるものなら、このさい、笛や太鼓の端午遊びどころではないはずだ」

「それもそうか……」出雲介は肯定して。「では、さっそく評定所のほうへ、それは早打ちしておくとして、明日は足利領へ廻まわつてみるか」

「それにも及およぶまい」

彦四郎は打消した。

「それよりは、当初の名分どおり、税ちようを徴して立帰ったほうが、公辺へは、よい御首尾で

はあるまいか。数日ここに構え込んで」

「なるほど、そのうちもし新田の内輪いに異なる気振りでもあれば、嗅かぎ出せることにもなるの」

「しつ。……」

ふたりは口をつぐんだ。

たれか見えたのである。里見新兵衛であった。またすぐうしろに、武者むさえぼし、狩衣すがたの、かつちりと肉のしまった面おもざしをもった二十六、七歳の人ひとが来て、新兵衛を下においたまま、ずつと室内へさきに通つて大きく坐つた。

「脇屋殿でいらせられます。御当主の弟あにぎみ、脇屋の二郎義助さまで」

新兵衛が、両使へ言つた。

つづいて、その義助が、あいさつを述べた。そして、いかなる政まんどころめい所命か、兄義貞は病中なので、自分へ仰せ聞けられたいと、いんぎんに言つた。

ことばは、なるほど、いんぎんであつたが、しかし脇屋義助のからだからは、昼からの酒がふんぷんと匂つていた。それだけでも、むかつと、相手は反撥を持つに充分だった。

——で、黒沼彦四郎伴清がまず政所ノ状をとりだして読みきかせ、状はそのまま義助へ手

わたされた。

錢ゼニ五グ万ワン貫

五日ノ内ニ上納ノ事

右、領主シヤウケ庄家、一致シテ違反ナカルベキ旨ムネ、御上意也ナリ

と、いう令であつた。

「……脇屋殿」

「は」

「いつまで、無言でおいでられるか、お受けのことばは？」

「出てまいりませぬ」

「出ぬとは」

「何ともお受けあいいたしかねまする」

「なにお受けできぬ？　これは聞き捨てならん」

黒沼と明石の両使は、ひらき直つた。そしてその高圧的な態度を、もつと露骨に。

「脇屋殿！　政所まんどころの徴税の令は、台命ですぞ。執権殿しつけんのおことばもおなじものだ！

台命にそむき召さるか」

「いや、そむきは仕らぬ」

「でもいま、できぬと申されたではないか」

「さよう、五日の内に、錢五万貫の上納などは、できぬゆえに、できぬと申しあげたまで」

「それが上命を拒むものでなくて何である。相次ぐ戦いのため、幕府のお手もともいまや容易なご出費ではない。北条殿九代にわたるご恩顧をおもえば、このさい諸大名が、それぞれの力において、兵糧や錢の徵募に応じるぐらいは、あたりまえなご奉公ではあるまいか」

「そうです！」と、脇屋義助は相手がたかぶれば昂ぶるほどおちつきはらつて。「——さればこそ、わが家においても、さきには金剛山の寄手にも加わり、一倉、二倉とあるかぎりの蓄備の稲も税物にささげ、また去年も錢一万貫、この一月にも五千貫と、仰せつけのまま課税はすいぶんさし出しておる」

「それや何も、ご当家だけではない。しかも新田殿はこの三月いらい、病のためとて、戦陣からご帰国のままではないか。ほかの諸大将にくらべれば、それだけでも、樂をしておる。せめて税物の面でその不奉公を償わねば、相すむまいが」

「とはいえ、わが新田領の稲も銭も、まったく余力はありません。領民どもからも、しぼれるだけの物はしぼって、すべて軍費にささげつくしています」

「そうはいわさん。国府の調べでも、また近国の目でも、新田ノ庄ほど富有ふゆうな所はないとみないっておる」

「よそ目には、でしょう」

「いやいや、そうでない。この天下大乱の折に、悠々と、節句遊せつくびの豪奢ごうしゃなご酒宴しゆゑんぶりなどは。……柳營りゆうゑいですら、ことしはお取止めになった」

「子供のための祭りぐらいがなんで悪い。とまれ、五日以内に、銭五万貫の調達などは思おもおよばぬ。政所へは悪しからず、おとりなし給わりたい」

「虫のいいことを。さような悪例をひらいては、よその領主への徴税にも事を欠く。よろしい、世良田のお館でできぬなら、直接、われらの手で当地の庄家しよつげ（庄屋）や富豪から、それだけの物を徴発して行こう。さもなくば、むなしく鎌倉へも立帰れぬ」

「ご存分に」

と、義助は言つて、それ以上は、さからいもしなかった。そしてすぐ座を立ちかけ、「新兵衛。ご両使はまだ当分ここにおいでらしい。せめて、おもてなしでもしてさしあげ

ろ」

と、いいのこして館の方へもどつて行つた。

もう宵をすぎている。

節句の客の、小さい者たちはみな帰つてしまつていたが、その近親者やら家臣のおもなるものは、なお広間で酒をのんでいた。義貞も上座のしとねに、やや居ずまいをくずして、義助がみえるのを待ちかねていたふうだった。そして義助が来てからは、いちばい声もひそまつて、そこはそのまま密議の車座となつていた。

ふ
触れ不動

「よし」

義貞は言つた。

密議のすえにである。

さんざんな議論も出たが、彼のくちからさいごの断だんがそう下くだると、とたんにみな黙つて、どの顔にも悲壮な色がみなぎつた。

「ぜひもない」

と、義貞はかさねていう。

「まこと、当家の旗上げは、もすこし先にとしていたが、千寿王の逃走、徴税の催促、かたがた四圍の情勢も、いまは一刻の猶予もしてはいられぬようだ」

「いられませぬ」

と、義助も和して。

「いたずらに、大事をとつて、上方の戦況を、にらみ合せていたのでは、ついに機を逸すばかりか、逆に鎌倉方の先手を食うかもしれませぬ」

「が、そうなると邪魔なのは、陀羅尼院だらにいんへ入れおいたあの徴税使の二人だが」

「いや、義助におまかせおきください。むしろここは彼らのなすがままにさせておいたほうが、鎌倉の目へはまぎ“紛れ”となつて、よい都合かと存ぜられます」

「それもそうだ……」

と、義貞はすぐほかの顔へ。

「事俄かなので、岩松経家はまだ、今日のことは知っていない。かねての手はず通り、都にある足利から再度の飛脚がくるのを待った上でと心得ているだろう。……たれか岩松の

許へ、かくかくと、報じておけ」

そのほか、新田ノ庄の郷々さとさとに散在していて、ここには居合さなかつた大胡おおこ、額田ぬかだ、一ノ井、細谷、綿打、横瀬、堤などの一族へもこの場からすぐおなじ旨をおびた使いが立つて行つた。

が、そうした近郷のほか、新田の同族は、なお遠国にもたくさんいる。

たとえば、足利家における三河の三河党のように、新田氏の分家や累葉るいようは、越後の魚沼郡地方に多くかたまつていたのである。——で、それら越後党の味方へは、どういう方法で知らせるのがもつとも速いか。——この問題がまだのこつていた。

「それも、岩松経家に託しましょう。すべて岩松家の者は、そうしたことには、ずぬけて、熟練しておりますれば」

義助のすすめに、

「よかろう。では、そちが経家と共に、計ろうてくれ」

と、義貞はまかせた。

やがて脇屋義助が、その経家と会つたのは、まだ夜のうちであつた。経家が住む岩松村は、世良田の館から、馬なら一ト鞭むちの距離ではあり、さきに使いもうけていたので、経家

はもう急な旗上げとなったことは聞いていた。

「いや、何とか思案もございましょうわい」

経家は、案外なほど、義助が持つてきた至難な任務を、むぞうさにひきうけて、

「では、ついそこまで、ご同道をねがったうえで」

と、彼をつれて、屋敷裏からすぐ近くの安養寺の地内へ案内して行った。

岩松の祖、新田義重をまつつてある菩提寺である。また明王院と号する一宇の不動堂もある。

その不動堂の扉をたたいて、

「吉致、吉致」

と、彼はよんだ。

すると内から「おうつ」と、答えて顔を見せた男がある。これが、かの岩松吉致であったのだ。

あらためていうまでもないが、この吉致は、経家の弟で、かつては、島商人となつて隠岐の配所へ近づいたり、また唐梅紋の海賊旗のもとに、後醍醐のご脱出を扶けたりしてきた、あの岩松吉致なのである。

「や、この深夜に」

と、驚き顔に。

「何事のお越しで？」

やがて、明王院の一室に小さい灯がともされた。

その座で彼は、兄の経家と脇屋義助から、予定の旗上げの日が、俄にくりあげられたと聞かされたが、それにはかくべつ意外な容子でもなかつた。

「して、その日はいつとおきまりになりましたので」

「極秘だが」

と、義助が声をのんだ。

「——八日の朝、生いくしなみ品なみ明みょう神じんの前に勢揃いの事——と触れ出された」

「八日」

「む」

「すると、あと二日しかありませんな」

「それよ」

と、経家は事の要点へ入った。

「何せい火急だ。これを越後の同族たちへ、牒ちようじ合あわしているいとまもない。……そこで、脇屋たの殿がそちを恃たのんでお見えなされたようなわけだが」

「わかりました。すぐ越後へ発足いたしましょう」

「そちが」

「いや一人では足りません。同坊ども五、六名を連れ、風のごとく急いで、越後じゅうの新田一味へ触れを廻しまする」

「が、幕府の国府や途中の武辺に怪しまれては一大事だが」

「ご懸念には及びませぬ」

自信をもって吉致は言った。

こういうことには吉致は馴れている。

いつか九州一円にわたって、船上山の御旗上げを数日のまに触れ廻ったのも、彼の指揮だった。

また、都へ出ては、阿波の勝浦ノ庄を根じろに、大塔ノ宮との連絡にあたり、さらに鎌倉へも忍んで、幾たびか、足利高氏を訪い、高氏と義貞とのあいだに、東西同時旗上げの密約を運ぶなど、それらの下した拵こしらえをしてきたのは、みなこの吉致の暗躍にあった

のだ。

そうした、むずかしい裏面工作にくらべれば、こんどのただ時速だけを尊ぶ、越後触れ^{えちごぶ}の一ト役などは、さして彼には至難でもなかつたにちがひなく、

「しばらくお待ちを」

と、やがて彼は、身支度のため、ふたりをおいて、どこかへかくれた。

明王院の内には、つねに数十人の不動行者^{ふどうぎようじや}（山伏の類）が住んでいた。すべて吉致の家来であった。そして事ある日には、この白衣^{びやくえ}一杖^{じやう}の行者が、どこへでも秘命をおびて飛んで行くのである。吉致はいま、その中から最も足の早い者ばかり六人をえらび出し、自身も不動行者に装って、

「では」

と、ふたたび元の座に、その姿をそろえて、義助、経家のふたりへ告げた。

「同行七名の不動山伏。すぐお触れ状をたずさえて、越後路へむかいます。とは申せ、いかに急いでも、八日には間にあいませぬが、ご出馬の途中にては、きつと、越後軍のこらずお旗の下に馳^はせ加わりましようゆえ、どうぞ、ごしんぱいなく、予定のおすすめを」
そのころの、不動行者なるものは、どんな服装をしていたらうか。

ふつうの山伏ともちがって、白綿の手てつこうきやはん甲脚絆きやはんに、白木の杖つえをもち、不動明王の像をまつた笈おひを背に諸国をあるく者が江戸時代にはあった。またおなじ行装で、大きな天狗の仮面めんを背負っているのを、天狗山伏とも呼んだものである。

とまれ古くから山伏類似のそんな不動行者もあつて諸国の山川さんせんを跋渉ぼつしようしていたにはちがいあるまい。またそういう遍歴者のすがたこそが、岩松吉致のような、多忙なる風雲の策士には常々恰好な「隠れ蓑かくみの」として、利用されていたことかとも想像される。

いずれにしろ、その吉致をかしらに、不動行者に扮ふんした七名の武士が、新田ノ庄を六日の未明に立つて、利根の上流を赤城山麓あかぎさんろくから北方へ飛行するがごとく急いで行つたのは事実としてよい。——とすれば、次の七日には、上野こうずけと越後との国境、三国山脈みくにをも、はや踏みかけていたのではなかつたか。

その三国峠を越え、浅貝、三俣みつまたから神立村かんだちむらへ下りると、もう越後新田党の領土になる。

また、べつな清水越えをとつても、行く先々の村には、新田の支族が住んでいた。

さらに信濃川流域の小千谷おぢや、十日町の地方まで、魚沼郡の三郡ほとんどは、新田の党が、古くから耕してきた土だつた。

それらの門戸の党首を、誰々といえは、

おおいだつねたか
大井田経隆

羽川刑部

風間信濃之助

からすやま
烏山太郎時成

中条ノ入道、その子佐渡

五十嵐文四、文五

そのほか田中家、一ノ井家、籠沢家こもりざわけ、細谷家、坂口家、山上家など、幾十家やら分ら

ないほどだった。

ところが、義貞旗上げの数日前に、この地方には一つの不思議があつたという伝説がある。

どこから来たとも知れぬ天狗らしき者が、一日のまに国じゆうを駈けまわって、

「かねてのさだめどおり、勅ちよくじょう 詔を奉じて、いよいよ新田殿のお旗上げなるぞ」

と、触れまわり、また、

「時は八日。おくれぬように、各家の子郎党をひきつれて参陣せよ」

と、出兵の急をうながしていたというのである。

そこで、越後、信濃の族人ばらは、義貞の挙兵におくれることなく参加しえたが、あとで思うに、あのとときの軍いくさぶ触れは、何とも人間わざではない、あれは新田ノ庄の不動堂の尊像天狗が抜け出して、沙汰ぶれしたものに相違ない。「あの天狗山伏は、不動の化身であつたのである」「触れ不動だ!」「触れ不動の奇瑞きずいであつた」と、みな信じて疑わなかつたと「参考太平記」までが伝えている。

が、それもまんざら根のない荒唐無稽こつとうむけいとはいいきれない。岩松吉致たち七人が、すべびやくえて白衣の行者姿で、三国越え、清水峠、渋峠などから手分けして、一時に諸方の在所ざいしよ在所へ触れたとすれば、おそらく同一人の所業にもみえたであらうし、日かずといつても須臾しゆゆのまに、それは国じゆうへ知れ渡つたにちがいないからだ。

節句すぎの六日から七日。新田ノ庄の領民は、とつぜん大恐惶におそわれていた。

富有な商戸や農倉を目ざし、強制的な戦時税の税物の供出が命ぜられて来たのである。それも莫大な割当を、

「即日に」

という厳しきだった。

のみならず、しがな小農家の戸ごとへまで、ぜに銭何貫、あるいは、穀物、布、皮革、うるしなどの物税を課してきて、

「それぞれの庄家しやうけまで、ただちに持参せよ。おこたる者は、重科に処す」
との催促だ。

領民はふるえあがった。従来の貢物こうもつは、それぞれの庄家をへて、世良田せらたの「みつぎ倉」へ運びこまれ、やがて牛馬車の列になって鎌倉ノ府へ輸送されていたのであったが、こんどはちがう。鎌倉幕府直々の徴命であるという。

なんで世良田のお館をこえて、直接こんな課税がきたのか。上のいきさつは、もとより彼らに分ろうはずもない。ただ鎌倉の御用ときかさされ、また、陀羅尼院だろにんに滞在中の徴税使や、国府役人の恫喝どっかつに会って、

「このうえ何を出す物があるだよ」

と、隠し納屋の穴ぐらから自身の血肉を裂くような蓄えの物を取出していた。いや強奪にあったといったほうが彼らの気もちに近いだろう。なにしろ、世良田を中心に、いたるところこの騒ぎと悲鳴でない村はない。

「なに、なかには公命に応じぬ輩やからもあると申すか」

徴税使の出雲介と彦四郎は、部下五十人に加え、近くの国府から国府役人の手までかり出して、世良田の辻に、仮の税物収納所をおいていた。そして、不穏な声をきくとすぐ兵をやつて、

「さような奴は、家族どもをひつくくれ」

と命じ、また、

「家に土倉つちぐらを持つ者なら、その土倉や納屋なやに封ふうをして、稼業も差し止めい」

とばかり、終日諸所方々へむかつて、馬ぼこりをけむらせ、有無うむをいわせず、権力の遂行をほこっていた。

こんな恐怖の日も暮れた七日の夜である。——七日の半月はんげつが空にあるほか、世良田をはじめ、新田ノ庄の闇は声もなかった。その眠りのなかで領民たちは、鎌倉の吏の苛烈を怨むより以上に、世良田ノ館たちをうらんでいた。どうして、ご領主たるものが、よそ事みたいにこれを黙もつて視みているのであろうかと。

すると、夜半すぎだった。

「な、なんじやろ」

「あの人声は？」

世良田の民は、大地震かとても慌てたように、寝まき、はだしのままで、みな外へとび出していた。

いくさだ、いや火事だ、と彼らの識別もまださだかでないうちだった。陀羅尼院だらにいんの森はまつ赤に映え、火の粉が降り、黒けむりの下から逃げ出してくる徴税使の兵が、すぐ目のまえの辻や畑で、次から次と、新田家の武士の手で殺されていた。

「わあつ、お館の衆だ、お館がお怒りいか召された！」

領民は快を叫んだ。それを自分らのためになされた報復かのように見たものらしい。

逃げる者は逃げ、逃げおくれた兵はあちこちで殺され、陀羅尼院の火もまた、まもなく黒ずんでいた。

「ほぼ終ったな」

床几しょうぎの、義貞は微笑をみせ、

「つないである奴をこれへ曳いて来い」

と、かたわらの武者へむかつていいつけた。

世良田ノ館は、すぐ森隣りであった。余燼よじんはもうもうと、ここの庭をもけむらせている。

その、けむりの中でさえ、彼のすがたは、キラめかしかつた。家重代いえじゆうだいのよろいを着、美刀を横たえ、かぶとは、床几わきの小姓武者に持たせている。

彼ばかりでない。家中の士全部もみな身を鎧よろつて、足には新しい武者草鞋むしやわらんじの緒おをしめ、家の内もそれで歩いていたのであった。その様子でもわかるように、はやここには婦女子ものこさず、館一切を捨てて立つ準備がなされていたのらしい。

「おん前に」

やがて、二人の縄付きが彼のまえに曳きすえられた。

鎌倉下向の、黒沼彦四郎と明石出雲介のふたりだったが、出雲介だけは、何といても、下に着つかず、

「むほん人に、土下座するいわれはない」

と、義貞を面罵した。

九代を通じての北条氏の恩顧をわすれたか、日和見ひよりみ武士、忘恩の徒と、唾つばして罵ののし。

日和見といわれた一語は、ひどく義貞のかんを突いたらしい。でなくてさえ、義貞にはよくカツと色をなす性情がある。つと、義貞の顔が横を向く。その面の冴えなど、美しい太刀の沸にえのようだった。

「新兵衛つ、ものいわすな、血祭りにしてしまえ！」

「はっ」

繩尻にひかえていた里見新兵衛のからだごとたんに躍った。おそろしく迅かったのでその太刀は出雲介の首の根を狙って右肩からあばらへ斜はすに通ったか否かも目にとまらないほどだった。だが、ぎゃつと声がした。下に坐っていた黒沼彦四郎の声だったのである。彦四郎のあたまの上へ、出雲介が仆れてきたので、同時に二人が斬られたような鮮血をかぶっていたのであった。

「船田の入道」

義貞は、うしろへ言った。一族の船田ノ入道善昌ぜんしやうへあごをしゃくつて。

「たしか、黒沼とかは、そちが妻の縁類にあたる者だったな」

「さようにござりまする」

「ならば、黒沼の身柄は、そちの手に預けてくれる。どうにでもいたせ」

「これは、お情けな」

「晴れの門立かどだちだ。縁類を悲しめてここを出たくない。出雲介の首だけを辻かに梟かけて、領民どもへ見せてやれ」

「こころえました」

「大館おおだて（宗氏）、大館」

「はっ」

「濃みの奥方おくや女子供は」

「仰せつけのとおり、せがれ氏明うしあき、氏兼がお供をして、遠くの山へおかくし申しあげました」

「一族各の女たちも」

「は。みなひとつに」

「よし、それで足手まといもまず安心ぞ。義助（脇屋）、貝を吹け。はやほかの一族ばらは、生品明神いくしなみようじんで待ちかねていよう。いざ、わたたちもここを出よう」

生品明神は、東山道に沿う道ばたの小社こやしらで、世良田ノ館からほほ二里、方角は、北にあたる。

だが、鎌倉は真南だ。

一路、南進すべきはずの新田軍が、そのかど出になぜ北方へ逆行したのか。旗上げ場所

を、生品明神の社頭としたのか。

理由はいくつもあつたであろうが、鎌倉がたの代官がいる群馬郷の国府（現・前橋市と高崎市の間、元総社と呼ぶ地）をうしろに、それを措いて南進するのは無謀であり、危険と考えられたことも一つにちがいない。

それとまた。

義貞の別館（しもやしき）のある反町そりまちにも近く、脇屋義助の脇屋ノ里や、そのほか江田、綿打わたうち、田中、額田などの同族たちが一瞬にあつまるにも生品明神がもつとも地の利であつたなどの点も考えられる。

ともあれ、それは五月八日もまだまっ暗な寅とらノ上刻（午前三時）ごろ。

黒い魚紋ぎよもんのように、社頭に群れて、はやくから逸はやる駒を泳がせていた武者ばらの影は、やがて、

「しいーっ」

と、制し声を交わしながらわらわらと駒をおりた。世良田から義貞、義助たちの一勢が着いたのである。その声なき影の群れを割って、義貞の影は黙々と社殿の前へすすんで行く。そしてすぐ、かねて賜わっていた綸旨りんじと、願文がんもんを読みあげた。

とくに綸旨は、彼の挙兵の動機を正当づけ、また将士をして、それに死なしめる思いを
与えるのでなければならぬ。

頃年 キヤウネン 北条高時入道

朝憲ヲ軽ンジ テウケン

逆威ヲ恣ニ振ヒ ホシイママ

積悪 セキアク 已ニ天誅ニ値ス ステ テンチュウ アタヒ

ココニ至リ ルキネン 累年ノ宸襟ヲ休ンゼンガ為 ヤス

将ニ一挙ノ義兵ヲ起サントス マサ

叡感 エイカン 尤モ深シ

抽賞 チウシヤウ 何ゾ浅カラシ

宜シク ヨロ 早クニ

関東征伐ノ策ヲ運シ メクラ

静謐ノ功ヲイタセ セイヒツ

これを読みあげているうちに、義貞はいまや自分は神に選ばれた武の権化ごんげみたいな心境
にみちびかれていた。決してふと湧いてきた驕慢きょうまんではなかつた。——八幡太郎いらい

の源家の血は自分にある。足利家にもおとらない嫡系ちやっけいの家柄でもある。——こんな世に自分が起つのは当然であるとする日ごろからの、自己の再確認だった。

「船田の入道」

「はっ」

「簿ぼを点したか」

「点てんこ呼こいたしまするか」

「む。呼んでみい」

執事の船田善昌ぜんししょうは、社頭に立ち出て、軍の名簿を星あかりに。

脇屋ノ二郎義助以下、大館宗氏、堀口貞満、同行義、岩松経家、里見義胤さとみよしたね、江田行義、篠塚伊賀守、瓜生保うりゆうたもつ、綿打ノ入道わたうち義昭ぎしやう、世良田兵庫助、田中氏政、山名忠家、額田ぬかだためつな為綱、等、等、等……

呼ぶ。答える。

呼ぶ。答える。

「船田、もうよい、すべてで何人？」

「およそ百五十騎にございまする」

「百五十騎か」

少ないのは覚悟のまえであった。馬上になった義貞は、すぐ鞭を西北へ指して「行くぞ」と、麾下の将士へ目合図を配った。

「明けぬまにこそ」

義貞は号令する。

「国府を蹴ちらせ。かど出の血まつりにだ！」

「おうっ」

騎馬の者全部のムチの手が一せいに唸った。

道はいい。東山道の街道である。一陣の疾風は駆けた。義貞は先頭だった。そしておそらくいまの伊勢崎から利根の上流を望んだころも、まだ夜は明けず赤城山も見えそめていなかったろう。

いかに義貞が、時を惜しんでいたかがわかる。このさいの彼は、桶狭間の織田信長に似ている。いや信長は後代の人だから、故智を習んだものではない。義貞の天分だった。

たとえ成算はあったにしろ、一族悉皆でもわずか百五十騎という小勢で起ったその勇氣は驚目にあたいる。——それも四隣すべて北条勢力圏とみられていた関東平野のまん

中から起つたのだ。

ひとつには、あの徴税使ふたりが、旗上げの時期を早めさす口火にもなっていたわけだ。——で当然、陀羅尼院だらにいんの炎の下から逃げのびた両使の部下は、この大變をすぐ国府へ急報してもいただろう。

と、すれば。この朝、いや朝ともならぬうち、国府がわの守護代官も、ただちに軍備をととのえ、新田ノ庄へ出勢していたに相違ない。古典「太平記」にはこのへんのこととはならん見え、ただ「梅松論」の一節に、

然る間、当国ノ守護、長崎孫四郎左衛門、すぐさま馳はせ向つて、合戦におよぶといへども……

と、一戦の下に敗れて逃げたとあるばかりである。思うに現今の前橋、高崎附近で遭遇戦となり、新田軍は、これをかど出の一撃に撃破して、

「いざ、南へ」

と、即時にその進路を、鎌倉の方向へ、向けかえていたものとみてまちがない。

「さいさきはいいぞ」

「うしろで、赤城の山も見送っている」

「おお赤城の山とも」

「しばらくは……」

軍は、どこかで、朝兵糧あさがてをとつたとしても、ひる頃には、本庄から武蔵ノ国児玉郡へ入つていたはず。そして比企郡ひきぐんの將軍沢、須賀谷を經、やがて高麗郡こまぐんの一端をさらに南へ、女影ヶ原おなかげ、広瀬、入間川という順に、いよいよ、武蔵野の青と五月の雲をのぞんでいた。この間のこととされる。

はるか北の三国みくにを越え、清水を越え、渋峠を越えて、例の「触れ不動」で急を知つた越後新田の諸党も、手勢をつれて、それぞれに追いついて来た。

大井田経隆をはじめ、羽川、烏山からすやまなどの諸将である。また、その使いを首尾よくした岩松吉致たちである。義貞もそれはよほどうれしかったにちがいない。また士氣に一ぱいの拍車をかけることも忘れなかった。

鞍つぼから身をのぼして、彼は全軍の将士へいった。

「みな聞け。不思議そつろの候うぞ。北越の一族がかくも早く来たり会すなどは、まったく八幡はちまのご加護かごによるう。新田ノ庄を出ていらひ、われには事ごと、吉瑞きちずいがある。行くところ味方は勝とう。戦いくさは勝つ。勝つにちがいないぞ」

むらさきひともと
紫の一本

義貞の語尾について、全軍は、わあつ……と三たびの諸声もろごえをあわせた。

中黒なかぐろの軍旗の下は、こうして越後同族を合流し、その日から一やく、四千騎ぢかい奔流となっていた。

もつとも、それが南下してきた道すじの児玉郡や比企地方ひきは、古来「武蔵七党」の山野であり、熊谷、秩父ちちぶなどの無数の古源氏ふるげんじが蟠踞ばんきよしているところである。——だから越後兵以外、奥武蔵の郷武者さとむしやばらも馳せ参じて、

「お味方に」

と、多少は傘下さんかへ来ていたろうと思われる。

だが、義貞の腹づもりにはしてみると、

「それにしては？」

と、参加者の数になお不足だったに相違ない。そして、武蔵野一帯から、多摩、秩父の山波にもひそまっている不気味な古源氏の武族が、

「いったい、敵にまわるものか。中立の腹か？」

と、その出方に、たえまなき警戒を持ちながら、進路を南へしていたのだった。

そして、十一日の昼。

女影ヶ原おなかげ——いまの川越市の西北方面——まで進んでくると、とつぜん、前哨隊の騎

兵が、

「やつ、敵がみえる」

「追ツかけろ。敵の物見か」

と、はや彼方の丘陵へむかつて数十騎は突撃していた。

黄色い花山吹の花粉のような埃りが夏草の上をながれた。行々子の啼き声よしきりがハタとやん

だのを見ると、その前方には高麗川のわかれが、道を遮さえぎっていたのだろう。弓の弦音つるおとだ

けがビンビンと澄んだ大気に鳴り出していた。

「待てつ。射るな」

あとから近づいて来た義貞の声だった。

義貞は、もしやと思つていたものを、見つけたのである。川向うの丘に立っている一人

の男が、竹竿のさきに、童子の水すいかん干らしい紫いろの羅衣うすものをくくしつけて、しきりに振

りぬいている様子なのだ。——武蔵野の紫草にちなんで、それを目じるしに——とはかねて義貞と義助だけが胸の奥においていた密契みつけいの一ツであった。その紫と知ったので、

「義助、行って止める。そしてすぐこれへ迎えて来い」

と、そばの脇屋義助を川べりへ駈けさせた。川幅といっても狭い支流である。しぶきを見せて、はや騎兵の一部は、向うの岸へ駈け上がりかけている。

「やあいつ、逸はやまるなツ。見かけたのは敵ではないぞ。足利殿のおん曹司そうじだわ。ひかえろ、ひかえろ」

義助のこの大声には、たれもが耳を疑った。しかし、彼らがやつとその弓をおさめたと知ると、こんどは先の男が、丘の上なる雑木林の蔭へむかつて、その手にしていた竹竿の紫の水干を振っていた。

するとはじめて、そこらの木の間から、百人ほどな兵や雑人ぞうにんたちが、ぞろぞろ姿をあらわした。また、一ト張りの粗末な童輿わらべこしも見え、一人の老武者は、すぐこつちへ向けて駈け降りてきた。

「お越しありしは、脇屋殿か」

「おお、義助です！」

「やれよかつた。足利殿の留守居、紀ノ五左衛門でおぎる。千寿王さまのお供して、からもこれまでお連れ申しあげました」

まもなく義助は、千寿王の輿に付きそい、供の紀ノ五左衛門ら百人ほどをみちびいて、引つ返してくる様子だ。

遠くで、義貞はそれを見、ほほ笑ましげに、

「来たわ、稚子が」

と、つぶやいていた。

全軍へは「休メ」の号令がかかり、兵は急に、そのへんの青^{あお} 芒^{すすき}を大鎌でバラバラ刈つた。

草ばかりな武蔵野の空の下である。薙^なぎられた芒^{すすき}のあとは義貞の茵^{しとね}と千寿王のすわる座敷になった。——やがて輿からおろされた千寿王はほんとにきれいな稚子^{ちご}だった。かぞえ年五ツであった。でも躰^{しっけ}はある。五左衛門に介添^{かいぞ}えされて、義貞の前に、ちよこんと坐つた。そしてお辞儀をした。義貞もていねいに礼儀を返した。

「よう、つつがなく、わせられたの」

やさしい眼まなざしをして見せながら、何かと、義貞はいたわった。

「さだめし、ご苦勞なされたろうが、もう何もご心配はいらぬ。……この新田は、父御ててごの足利どのとは、仲のよい友達じや。先祖もひとつの家同士よ。……されば和子もこの陣中では、父御になり代つて、一方のおん大将であらねばなるまい。足利軍の大将は、千寿どの、あなたなのだ。……おわかりか」

「はい」

「む、よいお子だ。どこやら又太郎高氏のおもかげもある。……船田の入道」

「はっ」

「なんぞないかの。甘い物でも」

「持もてまいりましょう」

「さしあげておけ」

そのまに、義貞は、紀ノ五左衛門から、これまでの経過を親しく訊いていた。

さきに、高氏と義貞との盟約のあいだには、

「鎌倉攻めの日には、一子千寿を御軍中に預ける」

「ここにこえた。しかと預かる」

という一条項も、ふくまれていたのであった。

他のどんな軍事上の提携よりも、高氏は、このクサビに他日のふくみを打ちこんでいた。——子を鎌倉の質子ちしとして去る親の立場から、その千寿王の生命を、義貞に保護させておくことにもなるし、また、

（鎌倉攻めは、新田だけの催しでなく、足利の一子と一軍も、参加していた）

となす、発言権をも、ここで将来のため、確保しておこうという考えがある。

義貞は、善意だった。この一約にかんずるかぎり、彼はきわめて単純に、

「千寿王の参陣は、よろこばしい。新田、足利、両源氏の双壁そうへきが揃うことだ。名分も一ばい大きく聞え、足利有縁うえんの武士など、こぞツて寄つて来るだろう。かたがた高氏の一男を、わが手もとにおくことは、何かにつけ、不利ではない」

と、していたのだった。

かりに碁将棋ごしょうぎでいうならば、ここらの遠謀がその人の「読み」そのものではあるまいか。もちろん義貞とて、全運命を賭けて踏みきった戦局である。それには人知れぬ読みの苦心も存していたにちがいない。——だがこの、幼い一本ひともとの武蔵野の草をわが畑へ入れたことが、どんな結果をまねくにいたるか、そこまでは彼も思いおよんでいなかった。

ところで足利千寿王は、いったいどうして鎌倉脱走の冒険に、成功したのか。

いま、紀ノ五左衛門が義貞に語るところによると、次のようなわけだった。

さきに、足利高氏は、その上方出征の途中、箱根路の山中で、家士二十人を抜擢し、これをひそかに変装させて、元の道へ返している。

質子の千寿王を、他へ隠す計が、そのとき早や彼らへふくめられていたのである。

密命をうけた彼ら二十人の家士は、笠売り、鏡かがみと研ぎ、馬飼ほつかしい、放下師などのさまざまに姿をやつして、鎌倉府内へ入りこんでいた。そして五月二日に事を決行したのだった。

その五月二日は。

上方では高氏が、丹波篠村しのむらで離反を宣言したあの七日前にあたっている。で、高氏は

丹波入りの直前に、都から隠密たちへ、

「時を移さず行れ」

と、飛報していたものに相違ない。

同様な飛命は、伊豆山へもとどいていたろう。伊豆山には、もうひとりの庶子の竹若が質ちとなつている。

かねがね、用意のことなので、千寿王の大蔵脱走はさして困難でもなかった。紀ノ五左衛門が馬の前つぼにお抱きして、蓑みのをかぶせ、百姓親子のごとき恰好で、夜の白々明けごろ、雑人通行の群れに交じって山ノ内街道の木戸を越え出ていたのである。また身なりさまざまな二十人の家士も、前後して藤沢方面へ走り、後、奥武蔵の丹党たんとうの間に匿かくわれてきたものだった。

これを諸書には、下野しもつけに隠れたとあるが、足利の国元へはすぐ追捕ついでが廻まわっていたろうことはいうまでもない。またすでに高氏はむほんしたのだ。千寿王がわざわざ危地へ行くはずはない。

武蔵七党の一つ、丹党の一族安保あほノ丹三郎たんざぶろう忠実ただぎねが彼を守った。そして義貞の南下の日を待ったのである。

「そうか」

義貞は、聞き終って。

「では、安保ノ丹三郎も供のうちか」

「は。これへ千寿王さまのお供をしまいったのは、あらまし安保の人数でございまする」
「手柄な者だ。五左衛門、丹三郎を呼ぶがいい」

「お会い賜わりますか」

五左衛門にさしまねかれて、丹三郎忠実も、そこへ出て、何かと義貞の問いに、答えていた。義貞はまた、その二人へむかつて。

「もう一名の、足利殿の庶子しよし、竹若たけわかしみは、その後、いかがなされしか」

「されば、その君は、伊豆山から叔父の法師ほか十数名に守られて落ち行く途中、御運つたなく、駿河の浮島うきしまヶ原はらにて、幕府の武士にみなごろしにされたとかの噂にござります」

「みなごろしに。……では竹若どのもか」

「は、聞きおよぶところでは」

「それや酷むじい。残念だったの。したが、日ならずして千寿王どのが、その恨みはお晴らしあろう。そうだ、一方の大將千寿王どのにも、何ぞお旗じるしがないければならぬが」

さしあたって、足利家の丸に二引両の旗はここになかった。借陣かりじんながら千寿王にも旗がなくは一軍の形をなさない。

「いかがでしょう？」

丹三郎忠実の智恵だった。

「さいぜん、若ぎみの水干すいかんを拝借して、竹竿のさきに付け、新田殿のご軍勢へ、丘から合図あひづいたしました。あれを当座のお印しるしとなされましては」

「旗にか」

「さようで」

「紫だつたな」

「紫の水干でございました」

「なるほど。紫なら乱軍のなかでも、千寿王どののいる所は遠目にもすぐ知れよう。稚子ちご大将にふさわしいお旗だ。よい思いつきと存ずるがの」

と、義貞は言っただけで、ほかならぬことだけに、紀ノ五左衛門の意へまかせた。

五左衛門も異存はない。さつそく水干を裁たつて、白布に縫い合せ、白と紫つなぎの一旒りゆうの旗を作らせた。そして、

「ご守護あれ」

と、その旗手を丹党の丹三郎忠実へ囑まかした。

当とうの丹三郎だけでなく、丹党の武士は、譜代ふだいでもない自分らの手に旗が預けられたことを誉ほれに感じたようだった。まもなく、義貞以下、全軍の人馬は、また武蔵野の野路のじを分

けて、南へ南へ、さぐるように、えんえんと流れて行った。

千寿王の輿こしは、義貞、義助らの中軍からもう一段あとの馬群にくるまれて進んだ。——
輿こしわきは、老臣紀ノ五左衛門、足利の士二十人が、厚くつつみ、丹三郎が持つ象徴の紫を、
折々空に仰いでは行く。

夕がせまった。

入間川を前に夜をすごすか、越えて野営するかは、問題である。が、そのうち物見の情
報に「数里の先にも敵を見ず」とあったので、全軍、夕川を押し渡る。

するとその夜早や、足立あたち、豊島としま、葛飾かつしかなどの近郡から、

「鎌倉攻めのお催しとか。年来、今日を待っていた輩やからでおぎる」

と、言つて来たり、

「足利殿の稚子大將も御在陣と聞き、合力に参さんじ申した」

などと味方に馳せ加わつて来る武士が、ぞくぞく、絶えないほどだった。

彼らはまた、新たな情報を、それぞれにもたらして来た。——義貞が綜合してみるに——
敵は目に見えないが、もうまちかにありと思わずにいられない。

草枕、また、短か夜だ。

まどろむまもなく、

「昨夜のうちに、鎌倉軍一万以上の大兵が、多摩川を押し渡り、府中、立川をこえて北上中との聞えです」

と、夜明けの一報が、物見隊から響いてきた。

「まず腹拵えだ」

義貞は騒がなかつた。

「早飯も戦のうち——」と。

この日、十二日、初めて両軍は久米川（所沢附近の南方）をはさんで矢合せの序戦を切った。

幕府が、変を知ったのは、どんなに早くても、九日の夜であつたろう。即時、桜田治部大輔を大将に、兵五万騎を派すと号された。しかしそんな余力は鎌倉にない。時間的にもまにあわない。一万余でもたいへんである。ただその速さには、いかに幕府が仰天して、これへ全力を傾けて来たかがわかる。

序戦、半日の矢戦では、新田軍はほとんど所持の矢束を費いつくし、ぜひなく小手指ヶ原の北方へ、一時その陣を遠く退いた。

なぜ、義貞は退却したのか。

思うに、持ち矢は尽き、代え矢も不足してきたのであろう。矢束やたばの量は、半日の矢戦でも、たいへんな数を消耗する。

これを積み歩く輸送力など容易でない。矢三百本を一トから擲げとした矢束一力は水を充たした桶ほどの重量である。四千騎で射れば、一瞬ごとに、四千本は消えてゆく。——それだけの物を、牛馬車の輸送隊で、えんえんと持ち歩くなどは、こんどのような急行軍のばあい、不可能だし、義貞の本意でもない。

疾風迅雷、鎌倉の不意を突く。

また。日ごろ鍛錬の鉄騎と白刃にものをいわせ、あくまで野戦の騎兵主力で突入する。その腹だったにちがいない。

「船田の入道」

「はっ」

「千寿王どのの手勢も無事に退いたろうな」

「されば、ずんと後陣でしたから、はやあれなる低い丘に、紫のお旗を見せておられます」

「才、あれがそうか。紀ノ五左衛門を、ここへと呼べ」

その伝令をうけると、五左衛門はすぐ馬でとんで来た。

「五左衛門、すさまじい矢戦やいくさだったが、そちの主君の稚子大將は、輿こしの内で、お泣きになつた容子でもないか」

「なかなか」

と、五左衛門は笑つてみせた。

「お泣き遊ばすどころか、ややもすれば輿からお顔を出して飽きもし給わぬご容子です。われら輿側こしわきの隨身どもが、かえつてハラハラいたしております」

「さすが、たのもしい」

語気を、一転して。

「ところで、昨夜来、ずいぶん足利殿有縁うえんの武士が、近郡からお供にまいつたと聞かすが、いま御人数はどれほどぞ」

「いつか二千を超えております」

「二千？」

「はい、続々と。昨夜、今朝、そして今も今とて、下総しもとうさき、常陸ひたちの遠い所の武族までも」

「それはめでたい」

かろい嫉妬の感じを、義貞はそう言いかえた。

自分の麾下へ、自分を慕つて来る武族もあるにはある。しかし五歳の稚子大将をたよつて、足利殿と聞いただけで、はや遠国の武者までに、そんな参陣の決意を奮わせている事実は、何と見たらいいのだろうか。

「五左衛門。馳せ加わる味方はなお、刻々ふえるのみだろう。鎌倉入りは、新田、足利、轡を並べて、果たすもの。いずれが主、いずれが従でもない」

「もとよりわれらも、おゆるしとあれば、先陣に出て、一死を惜しむものではございませぬ」

「いやいや、そちなどは幼君のおそばにあつて、どんな乱軍の中でも離れてはならん。したが新参の兵は、ことごとく、義貞の麾下へ廻してよこせ。先陣、または二ノ陣に加えよう」

「望むところにござります。一切は、ご指揮の下に」

「船田の入道。——このひまに夜来の人名を簿に書きあげ、またその新参どもを、岩松、脇屋、そのほか諸将の隊に配属して、たそがれまでに、すべて陣容を新たにしておけ」

原より出でて原に入る——といわれる武蔵野の陽は、大きく赤く、西にうすずきかけていた。

退いたとみせ、じつは兵力の充足や陣組みを新たにしていた新田軍は、十二日朝のまだ暗いうちに、久米川の敵陣へ朝討ちをかけた。

「鎌倉勢は疲れている。また急遽、馳せ向つてきた驕慢な兵でもある。そのうえ序戦にもまず勝つたと思ひ、この暁は正体なく寝入つているに違いない」

こう観^みた義貞の「観^{かん}の目^め」は中^{あた}つていた。

数においては、はるかに多い鎌倉軍であつたが、

「すわ」

と、なつたときすでに、その野営地帯は、新田方の騎兵を主力とする斬込み隊によつて、寸断され、駈^かけちらされ、

「退くなつ」

「あわてるな！」

ぐらいの上将の叱咤^{しつた}では、どうにも立直りえない大混乱におちてしまった。

下部だけではない。

桜田治部ノ大輔の中軍にしてさえ、やがて東村山から恋ヶ窪（現・国分寺駅附近）の方へ、われがちな退却をおこしていたし、左右両翼の一つは、横田から拝島へかけ、もう一軍は田無方面へと、三分裂の潰走を止めどなくして、かず知れぬ捕虜や死傷者を途中に捨てた。

もちろん、踏みとどまって、新田勢をなやました敵もまた少しではない。それらは、ひろい武蔵野の雑木林や丘や部落などの遮蔽物をめぐって、終日、頑強な抵抗をくり返した。しかしもう主力を迷ぐれた孤軍である。ついには随所で殲滅され、やがて夜の曠野には、その雄たけびもなくなっていた。そしてただ、しいんと血ぐさい風がこの世の草木を吹きなでており、遠くの赤い火だけが勝者のどよめきを次の朝までほこっていた。

こうして、きのう今日の戦場になった所は、すべて鎌倉街道の「古道」であつた。——で、その宿々にあたる入間川、所沢（古くは野老沢とも書く）、恋ヶ窪などには、例外なく、遊女のねぐらもあつたし、また立川には、当時、おそろしい勢いでまんえんの兆しをみせ出していた性慾往生を教義とする新興宗教の立川流とよぶ、真言秘密道場なども流行つていた。

おそろく、義貞の姿は。

そんな庶民の目からは、こつねんと、世に現われた將軍のように見えたであろう。坊主、遊女、土地としろの名代などが、さつそくその陣営には、うるさいほど、献上物をたずさえて、媚こびを呈しに寄ってきた。

さらにはまた、この夜も甲斐、信濃、そのほか国々から来たり投じる武族がたえない。

「まさに、諸方の徒とは、自分が出るのを待っていたのだ」

義貞自身も、はや他日の將軍の榮はえを身に擬して半ば鎌倉を吞んでいた。一日ごとに地位の一階段をのぼってゆく自分に思えた。また国々の新参武士らは、すでに彼を昨日の

「新田殿」と見ず、もう新たな司権者として、ただの礼を超えたいやうやしきで、あがめたてまつり出すのであった。

わるくない。義貞でなくても、自然、こういう形には乗せられてゆく。わけて義貞は榮はえを好む。見得を大事に思う。で、大將の氣を映して、軍は破竹はちくの勢いをしめし、次の日もさらに南下をつづけていた。

多摩川が見えだしていた。

義貞は、多摩野の中ほどで、やや駒足を落しながら。

「義助義助。府中へ物見を入れてみたか」

「は。宿場しゆくばには一人の敵も見えぬそうです」

「河原の方は」

「かなりいたはずの敵勢も、お旗の近づくを知るやいな、みな鳥影のごとく川向うへ逃げ
失せましたそうな」

「怯おびえ立ったの」

「北条も平家。ゆらい平家にとって、川は鬼門きもんなのでございましょう。富士川の水鳥以来」

「いかさま。あははは」

前後の将も、みな笑った。

府中の六所神社ろくしよじんじやで義貞は願文がんもんをあげた。また千寿王へは、全軍が多摩川を渡りき
るまでここにいるようにと行って、その紫の旗を玉垣の外に立てさせた。何かと悠々たる
義貞の指令ぶりだった。すでにきのうの一戦で敵は完膚かんぷなきまで叩いてある。川向うに抛
った残軍が、その陣容をたとえばどう立て直していようとも、ほぼその抵抗ぶりなど知れた
ものとしていたのであったらしい。

ところが。

やがて江田行義、篠塚伊賀守、綿打わたうちノ入道にゆうどう義昭ぎしやうらの三隊が、川へ先陣を切つて

ゆくと、がぜん、対岸から猛烈な弓鳴りがおこつた。およそ相手が渡渉して来そうな浅瀬は敵もよく見ていたのである。川のなかばを越えるやいな、白い死線のしぶきが描かれ、みるまに、騎馬歩兵、次々に泡沫となつて消えうせる。

上流にも備えがあつた。

また下流でもおなじ犠牲がかず知れず出ていた。

ようやく、義貞も、

「これは」

と、この渡河戦にやや用意を欠いていたことに悔いの汗をにじませていた。しかしもう消極な作戦には返りえない。彼の命令で、水馬に自信のある者は、敵影のない深瀬の淵を
通つて馬を泳がせ泳がせ渡っている。——また一部の兵は、矢をくぐつて、向う岸へかけ
あがり、阿修羅の吠えを放つていた。

「とどいたぞ。岸を踏んだぞ。脇屋どのの一手、瓜生保」

「田中氏政ッ」

「越後党の烏山時成」

声々に、敵のなかへ斬り込んでゆく。たちまち影も見えなくなる。いつか敵の陣はおそ

ろしい数を加えていたのだった。

そのはずなのだ。

きのうの残軍だけがここに備えていたのではない。——二日おくれて鎌倉を出た幕軍の第二軍三軍がすでに合がっしていたものだった。その兵力も先の比でなく二万五、六千はかぞえられる。また総大将には、執権高時の実弟北条泰家やすいえをあげ、その領袖りょうしゅうにも、塩しおだ田陸奥守むつのかみ、新開左衛門しんかいさえもんノ入道、安東高貞あんどうたかさだ、城ノ越後守などの幾十将をえらび出し、およそいまある鎌倉の府の人材と現兵力とを傾けつくして来たともいえる大軍であったのだ。

「退けッ」

義貞は俄に叫んだ。

「船田の入道。退き貝吹かせろ。味方にとつて地勢もまずい」

しかし、退くには多くの犠牲が出よう。義貞はそれも覚悟か、一たん渡りかけた多摩川から全軍をひきあげさせた。そして分倍河原ふばいがわら（現・府中競馬場の西）の小高い端に旗をおいて、なお、下流上流の将士までも呼び返した。

かたちは逆転した。

いちど乱離と崩れた陣は、容易にこれを組み直せない。かなり沈着な部将にしてさえ、
呪罵どば、地だんだ、ただ、てんやわんやの喚おめきの中に吹きくるまれる。

はやそのうちに。

鎌倉軍二万余騎の新手は川を地つづきにして押渡つて来た。——見つつどうしようもない新田勢であった。その騎兵主義もはや威力はなく、弓隊を持たないので、みすみす敵をして、難なく分倍河原ふばいがわらの陣地も彼の蹂躪じゅうりんにまかせてしまった。

義貞、散々さんざんに打負けて

すでにここにて

討たれ給ふべかりしを

堀金をさして、引退ひきしりぞく。

一方、府中の六所神社にいた足利千寿王とその隨身たちも、合戦の悪化に驚き、幼君の輿こしを昇かいて、共に逃げ退いたのはいうまでもなかったろう。——ともかく、新田軍は、ここでその三分の一兵力を失つたといわれている。

もうこのさい、鎌倉勢が猶予をおかず、さらに新田勢へ追撃に追撃を加えていたら、義貞も討たれ、千寿王もまた、捕われていたかもしれない。——だが、なぜか追わなかった。

多摩川北岸にとどまって、明日を待つてしまったのである。

天佑とはこんなことか。

その晩である。

三浦三崎の族党、三浦兵六左衛門義勝が、おなじ陣にいた松田、河村、土肥、本間などの相模党さがみとうの武士を誘つて、総勢で約千四、五百人、

「今からは」

と、義貞の許へ投降してきた。

そして投降の将は口々に、

「かねがね、宮方へ心をよせていたのですが、よい折もなく、心ならずも、今日まで幕府の下にいた者どもです。ご疑念を解くため明日の合戦には、われらが先陣して鎌倉入りのおみちびきを仕らん」

と、いうのだった。

いぶかしいのは、これだけではない。明け方にもまた、大量な投降者があつた。

「何で敗者のわが陣へ？」

と、夜来やらい、不審にしていた義貞にも、ようやく、その真相がわかつてきた。

六波羅滅亡！

その噂がここへも知れてきたのである。

もちろん、幕府は極力それを秘して来たにちがいないが、近江番場における探題以下の自決だの、光厳、後伏見、花園上皇の囚われなど、次々の悲報も風のごとく海道にひろまり、事の真相は、むしろ下部の兵や荷駄の者から、ぱつといわれ出して、俄な動揺となつたのらしい。

これでは当然だ。内にそんな動揺があつては、勝機をつかんだ鎌倉勢も、一頓挫を来たさないわけにゆくまい。——逆に、義貞の方とすれば、都の聞えは、まさにここでの起死回生となつていた。

「まだ聞かぬ者は聞け。六波羅は陥ち、箱根以西はみな宮方に降伏したというぞ。余すは鎌倉の府のみ。余命いくらもない鎌倉に手間暇かすな」

義貞は、その朝、声を大にして全軍へ告げ、さらに分倍河原への逆襲をはか図つていた。

高時の弟、北条泰家は、右近ノ大夫入道えしやう恵性ともいって、まだうら若いおおよろいが、兄高時とひとしくほったい法体の武人であつた。が、今日はもちろん大おおよろい鎧よろいに身を装い、総大将として、たまの多摩野に駒をたてていた。

陣は、あけがた、分倍河原から多摩野へわたって、

「ごさんなれ」

と、新田の逆よせにそなえていたが、きのうは大捷をはくし、なお、敵に三倍する大軍を持つてもいるのだ。それが俄に、こんな守勢に転じなければならぬとは——と彼の若さは、心外でたまらなかつた。

「いつたい、鎌倉武士のほこりは今、どこへ失せてしまったのか」

索莫さくぼくたるひとみで、味方の陣をながめわたし、そばにいる長崎時光、城ノ越後守、安あ東高貞とうたかさだ、安保ノ道勘あほ どうかん、塩田陸奥守らの副将たちの顔へ、

「いいのか。こんな手当てで。大丈夫か」

と、くりかえしていた。

「鶴翼かくよくの陣形です」

一将いちしょうが、指さしつつ説明する。

「敵が、まともに来れば、両翼でおおいつつみます。右端へかかれれば、下の河原しもにかくしである一軍が出て、敵のうしろを取る。また、左端へまいれば、彼方の森蔭にある遊軍が突いて出ますから」

「そんなことは分つておる。わしが念をおしているのは、このうえにもまた、裏切り者が続出せぬかという惧れだ」

「いや」

と、塩田陸奥しおだむつがこんどはいう。

「昨夜らい、六波羅失陥の噂やら、上方の敗報しきりと聞いて、急に、お味方を捨て去つた卑劣なやからは、もう出つくしております。またそのような二タ股者が、ふみとどまっていたにせよ、何ら頼みにはなりません。むしろ、脱落するものは脱落し去つて、いまは堅くなつたといえましょう」

「そうかな？」

「そうです。鎌倉武士も廃れかといまお嘆きでしたが、何の、臆病武士や二タ股者は、いつの世でもいること。——たとえば、これにおける安東高貞をみても、まだ御譜代ごふだいの中には人もいると思し召されませぬか」

「いかにも」

人々の眼は、高貞へそがれた。高貞は、さしうつつ向いた。

ここに一将として加わっていた安東左衛門高貞は、敵の新田義貞の舅しゅうとである。義貞の妻

は、この人のむすめであった。

「……………」

泰家は、眸をそらした。気の毒さに何もいえず、すぐ馬をめぐらした。そして親しく中軍の士気をはげましているうちに、野末のすえの一端が、黄いろい砂塵さじんにけむり出した。——するとその土ぼこりはたちまち全面にひろまってきた。もうもうと、何かが泰家に迫っている。しかし泰家にはその塵煙じんえんや草ぼこりのうちを駈けみだれる凄まじい騎影すまぎや歩兵が、敵か、自軍か、それすら見分けられなくなっていた。すぐそばの一将が、朱あけになって落馬し、彼の馬も、いななき狂った。

「塩田っ。どうしたのだ？」

「寝返り者です」

「それ見ろっ。して何者が」

「どの手勢とも分りませんが、新田の騎馬隊に陣をひらいて、わぎと中軍へみちびき入れた不届者があります。ここは危ない。はや川向うへお立退きを」

「ばかなっ」

泰家はきかなかった。

「なお、二心の輩やいからもあろうことは、あらかじめ覚悟していた。退くやつは退け。泰家は死ぬまで戦うのだ」

「死に場所もございましょう。ご短気すぎる」

老将の塩田陸奥は、耳もかさない。

かえってあたりの近習たちへ。

「恵性えしやう（泰家）どののお身に万一あらずな。お怪我なきよう、ともあれ先に川向うまでお連れ申せ。危険だ。わからぬ。逆睹ぎやくとしがたい形になった。決戦はわれらの手でする」

「塩田。わしには、見物していと申すのか」

「ぜひもございませぬ。裏切り者につづく裏切り者の続出。これが、どこまで出たら止まるものか」

「その非武士めを懲こらしめてやるのだわ。泰家、何の面目をさげて、このまま鎌倉へ逃げ帰れようか」

「それこそ、ご血気。塩田が思うに、御府内もまた、ただ事ではありませんまい。高時公の御安否すら気がかりだ。それでも、あたらこんな場所で、死をお急ぎなされますや」

極言だった。

しかしこの老将には、頼みがたい人心の浪の逆巻きが、もうそんなにまで急迫したものに見えたのだろう。——よもやと、これほどとは予想もしていなかった塩田だけに、失望の度もつよかったにちがいない。

事実、二次の分倍河原の合戦は、いわゆる「味方破れ」というもので、鎌倉勢は、自軍から出した昨日の味方と戦ってやぶれたようなものだった。そしてほぼ一昼夜にわたる激戦のはて、多摩野や多摩の川原には、算なき死骸をそのあとに捨てみだし、逆に新田軍は、多くの投降者やまた新たな「馳せ参じ」を容れていたから、その兵力はいよいよ激増をみせていた。

「まず、大物見を」

と、義貞は初手の苦戦にかんがみて、大部隊の偵察や、また三浦義勝などの投降部隊に先導させて、多摩の南岸へわたり、その日、関戸の宿に陣取った。

そして、十六日は、うごかなかった。

兵馬をやすめ、また帷幕ではひそかに、鎌倉入りの作戦、部署の秘など、練っていたもの。

またこのうちにも、武州の熊谷直方、直春。常陸の塙大和守、陸奥の人石川義光な

ど、一族して投じてきた。上方では六波羅の滅亡、東国では新田軍の優勢と、いまや幕府の悲境は、諸州、かくれもなくなくなっていた。

それと、武人の間では。

足利どのの若御料わかごりよう

という呼び声が、一種の人気のようによく人の口端くちばにのぼった。若御料とは、千寿王への敬称である。たんに可憐であるためか。それとも別な何かであるのか。とにかく、陣中の人気はこの稚子君ちごぎみにさらわれた観かんがある。

いよいよ十七日。——関戸陣を払って、鎌倉攻め開始の日には、彼ら、若御料を愛する武士たちは、幼君の輿こしを牛車の上に組み立て、紫の小旗をひるがえし、前後、ものものしい騎馬鉄槍で守りながら、中軍について前進した。——義貞はふと嫌いやな顔したが、また兎戯わざに似た業わざとも見直したように苦笑していた。

暗君片鱗あんくんへんりん

みな黒髪を投げ伏せて泣いていた。柳營の大奥なのである。……むつらの御方おんかた、お妻さい

の局つぼね 百合殿ゆりどのの小女房、常葉ときわの局など、なぐさめてもなく、とり乱している。

藤も散り、なぎさの菖蒲やつつじの花も黒ずんできた五月の蒸し暑い昼だった。すると、庭の遠くで、

「女房がた。女房がた」

と、男の顔が垣越しに、

「なんとなされましたぞ。ご執権しゅっけんのお焦立ちいらだにふれぬうち、早ようお持ちなされ。いつものものを」

と、内へ告げて立ち去った。

われに返った裳もや黒髪は、あわててそれぞれの局へかくれた。そして顔のくずれを鏡に直し、やがてのこと、お妻の局がお薬湯の天てん目めをささげ、また、ほかの局も、お手ふきやら、ぬる湯を入れた耳みみ盥だらなどを持って、廊から廊を、執権のいる表おもて小御所ごしよのほうへ渡って行った。

これは、いつも、

「お目ざめ」

と聞くとすぐ彼女らがする御起居の習慣となっている。

とかく夜は眠れず、昼は時を問わず、疲れるとすぐ横になる高時だった。その錯倒もここ数日は極端になり、いまもむつくり起きたところであった。

夢見でも悪かったのか。醒めて安居していたが、不きげんだった。またひどく青白い。もつとも、具足のままだ。浮かないのはムリもない。小手指ケ原、分倍河原と、新田勢の南進を刻々耳にしはじめてからは、さすが戦嫌いな彼も、かたい腹巻と、籠手脛当は、寝るまも脱いでいなかった。

彼のよろい具足は、お抱えの明珍に凶案させ、緘から彫金のかな具一ツまで、料を凝らしめたものである。それをいま彼は着ていた。しかし自分の好みといえ、それは工芸家の技術を見たいために作らせたもので、かかる日の実用に着るのは、彼の本意でない。——だから昼寝の汗を拭くだにも、この窮屈な物が、小癩にさわるらしかった。

「新右衛門っ」

近習の長崎新右衛門を見て。

「はやく汗拭いを持ってまいらんか。なにしておる」

「は。いま、ごさいそくを申しやりました」

「いまごろか」

そのすきに、伊具越前ノ前司宗有が、横から注意をうながした。

「太守。……」

「伊具か。なんだ」

「戦場からのご急使が、さいぜんより、お目ざめをお待ちしておりますが」

「どいに」

あらためて、寝ざめの目をさまよわすほど、周囲は武臣の姿で埋まっていた。いまやこの表小御所は陣営中の陣営だった。いわば死か生かの、鎌倉さいごの命脈を支配している心臓部なのである。

見ると、二名の血まみれな武士が庭前にぬかずいていた。その背に、午後の陽が直射していた。ひとりの方は虫の息らしく力がない。身じろぎもしないので血に蠅の群れがたかっていた。高時は本能的に眼をそらして、ついと座から立ってしまった。

「たれか聞いておけ。つかのま、具足を解いて、肌の汗を拭きたい。崇頭でも駿河でも、その間に戦況を聞きおいてくれい」

ちようど廊に女房たちの列が見えた機だったのである。

「ハハハよこせ」

高時は、石ノ庭の廂へ坐つた。血まみれ武者の虫の息を見て、寝起き顔の貧血を、よけい青白いものにしていた。

耳みみだら 盥あらいのぬる湯で絞しぼる白い布を見て。

「お妻、もいちど絞れ」

「お肌もお拭きあそばしますか」

「この汗だわ。誰ぞ、具足の紐を解け。そして襟もとから手を入れて、背を拭うてくれ」
そのあいだに、常葉の局は、唐団扇で横から涼を送り、百合殿ノ小女房は、天目台てんもくだいにのせたお薬湯の盥わんをすすめた。

高時は一ト口ふくんで、石ノ庭へ吐きすてた。

「こんなもの、たれが持つて来いといった」

彼女らは、遠くすべつて、おののきの指をそろえた。

「ご近習や、典葉頭てんやくのかみから、お目ぎめの都度つどには、きつと、さし上げるようにとのことで」

「ばかな。この高時のどこが病者か。病人は天下の奴輩やつばらだ。上は主上公卿の堂上から下種すにいたるまで、天下惣気狂いとなっている現状には相違ない。しかるに、この高時ひとりすをみな狂人視いたしおる。おまえたちまでがわしを変だと思ふのか」

「め、めつそうもない。ただおからだをお案じ申しあげるばかりに」

「おや。泣いているな。……どうした。いま泣き腫らした顔でもないが。……みんな揃いも揃って、何を泣いていたのだ」

「おゆるしくださいませ」

「もどかしい。ほんとのことをいえ！ほんとのことを」

「うえ様……」と、常葉の局が、むせびあげて。「ほんとは、たつたいま、六波羅の御合戦から近江番場のくわしいことが、さる御僧の文知らせで、わかって来たのでございませぬ」

「そして」

「むつらの御方の愛し子やら、お妻の局の父御、百合の小女房の良人、またわたくしのただ一人の身寄りも」

「死んだのか」

「討死したり自害したり、有縁の者、ひとりも生きたという名は見えませぬ」

「しかたがあるまい。人間がみんなどうかしてしまったのだ。冬の梢のように、一ト葉も残らず、枯れつくし、死に尽くさねば、この業は熄まないかもしれないのだ。おそろしい

ことになった。ああ、苦にがい。口が苦い。酒をもつてこい」

「ご酒しゅを」

「くすりとは、そのことだ。わしは負けたくない。こんな世に負けたくない。一日でも愉たのしまなくて何の生きてきた効かいがあるうや。生きぬいてみせる！」

「——太たい守しゅ」

それは、廊の外へきていた金沢ノ入道崇そう顕けんの声だった。が、目もくれずに。

「お妻さい、むつら。酒を早よう持つてこい」

「はい」

彼女らが起つとふたたび、

「太守」

と、崇顕は、沈痛ないろを眉いっばいにたたえて、ゆるしも待たず、内へにじり入つてきた。

「またも凶報でございました。新田勢およそ二万騎とか。はや、両三日中にはここへ迫るかもしれませぬ」

「また、負けたのか」

何か、遊戯の上の負け事みたいに高時はそう言ったが、やはり落胆は大きいのであろう。肩を落して、

「ふうむ……」

と、うつろに鼻腔を鳴らした。

ふと、崇顕は涙ぐんだ。

一族中の長老である。十五代の執権代しゅけんだい、十二代の連署れんしよなど、補佐ほさの重職を歴任してきた彼だった。

だからこの金沢ノ老大夫には、ことし三十一歳となった人の恐れる相模入道高時も、まだ子供みたいな、言ってみるなら天真らんまん、幼いままなお人としか見えないのであった。

お気のどくな。

こんな世に、こんな家に、お生れなくば。

と崇顕は、いつもそうした同情について先立たれる。

世評、ややもすれば、高時を暗君と見、また「うつつなき人」といったりして、一族御家人までが、腹のなかでは、軽んじているのだが、崇顕から見ると、すべてそれは、高時

自身の罪ではない。

朝廷では、この人を、鎌倉の司権にすえておくことが、なんにつけても、都合がよかつた。高時だと、諸事、言いなりになるからである。

また幕府内でも、高時を外せば、その執権の職には、一族みな虎視眈々こしたんたんで、たちまち、内紛のおそれがあり、そのもつれは、今日までたびたび、くりかえしてきたのであつた。で。たとえば、かざり物でも暗君でも、この君を立てておくしかないときれて来たのである。

要するに四囲のためだ。

政略、勢力争い、すべて四囲の人間が、自分らの保身と、相手の擡頭をふせぐため、つつなき人、高時は道具にされていたようなものでしかない。——しかもその人は、生れながらの病弱で、長じてからも瘋癲ふうてんの持病があり、周囲はそれも知りぬいていた。そして暗君、風狂、奢侈しゃし、安逸、あらゆる悪政家の汚名はいま高時の名にかぶせられて来たが、高時にいわせれば、じぶんの知ったことではあるまい。

だが決して、そうとはいわず、また考えるでもなく、我には当然な天職と思ひこんで、その執権の座に、衆臣の畏伏や美言をそのまま信じている高時が、金沢ノ老大夫には一そ

うあわれでならなかったのだ。

「太守。……なにとぞ、おこころしずかに。……いかなる事態が迫りましよう、この崇頭から長崎、伊具、普恩寺らのたくさんな御一族も、おそばにおりますことなれば」

「気をしっかり持てというのか。これ金沢の爺、わしのどろが取り乱している」

「いや、念のためのみでございします。なにせい、新田勢は日ましに数を加え、はや武州多摩川をこえ、関戸の辺までも」

「待て待て。どうしてそんな俄に新田勢が近づいて来られるのだ。味方の左近大夫（泰家）や桜田などの諸大將は、いったい、どこで何しているのか」

「ぜひなき仕儀となつて、総崩れを来たし、急遽、鎌倉さして、おひきあげと聞えまする」
「ぜひなき仕儀とは」

「されば……。ついきのうまでは御幕下たりし大名から、国々の地方武士まで、手のひらかえすごとく、お味方を裏切つて、敵に廻つたためと聞きおよびまする」

「では、新田が強いのもなく、味方の負けは、裏切り者が出たせいだの」

「いやそうとばかりも」

「ほかに理由は？」

「六波羅の敗報などが一時に知れて、それがお味方の士氣を一挙に挫いたやに存ぜられま
す」

「おなじことだわ」

高時は、嘲笑した。

誰へでもない。嘲笑は、日頃もよくする人だった。彼の娯楽の一つなのである。

そこへ、お妻ノ局と小女房が、銚子をもつて来た。酒は、なみなみと銀盃ぎんわんに注がせ、
三献さんけんほど、息もつかずに傾けて、

「持つてゆけ」

と、すぐ追いやった。

ぼうと、瞼に生氣の色がさしてくる。高時の中の、もひとつの高時が、やつと眠りをさ
ましたふうだった。

「負け戦！ それもはや近ごろは耳新しいことでもない。……わけて世は裏切り流行だ。

この鎌倉も落日とみて、裏切らぬやつは、近頃、ばかみたいなものだからの。はははは、
そうじゃあるまいか、金沢の爺」

「滅多な仰せ事を。かりそめにも、ご執権おんみずから。……彼方の侍どもにも聞えます

る」

「聞えてもいい。わしは世間を眺めて思うのだ。裏切ったやつがまたいつか人を裏切り自分を裏切る日が来なければ倅せだと。……恐ろしさも、こうなると、いつそ、面白の世やと、謡拍子うたびょうしにして謡いとうなる」

「太守。ここは御陣中です。浮沈のさかいです。なにとぞ、ご酔言もちとおつつしみを」
 「だまれ。いまほどんな酒で酔いはいたさぬ。ほんの鬱気うつきを散さんじるため、薬湯やくとう代りに、折々、用いているまでだわ。この高時に酒進さけまいらせぬと、わが軍の士気は揚がらぬぞ、はははは」

彼は立った。

歩き方まで違っている。

以前の、表小御所の陣座へもどつて、どかと坐り直したのだった。そしてキラキラよくうごくその酔眼が、居ならば一族、御家人を睥睨へいげいして、

「ち」

と、癩性な舌打ちをもらった。——いまの大敗報にひしがれてか、満庭まんてい、しゅんとしていたからだった。

その陰気さが、彼には堪らなく厭らしい。じつは自分の本質にも、平常、孤独な陰気がかもつている。そこで、こういう情景には人いちばい陰々滅々な感を深くして、逆な放言をし出すのだった。

「みな聞け。いまも金沢ノ大夫に申したが、近ごろ武門は寝返り流行とか。遠慮はないぞ。鎌倉を出たい者はこのさい新田へ走るがいい。——さきには足利、結城、いやあんなに、わしが可愛がつっていた道誉すらもだ。見事な寝返りを見せおつた。……いわんや、高時がさして目もかけなかつた輩の寝返りはむりとも思わん」

「……………」

「だが言っておく。高時は一人となつてもここで戦う。高時にはほかへ逃げて行く国もない。鎌倉はわが祖先の地だし、わしが当代の工匠どもをあつめて地上の浄土を創るべく工芸の粹で飾つた都だ。人間の都とは、人間がたのしく暮らしあうための楽園だろ。その花園を兵馬で蹂躪するやつがあれば、高時とて坐視していられぬ。高時と鎌倉とは一つものだ。守つて見せる。見せいでか」

そのとき、中門の外でなにか言い争う武者声がしていた。

高時はすぐ気づいて。

「赤橋の声もする。守時が来たのか？」

すると、駈け入って来た一将が、こう訴えた。——かねてから謹慎中の赤橋殿が、無断、禁をやぶってこれへ出仕してまわれ、しかも家の子郎党を連れた御出陣の態である。

「いかがしたもので？」と台下の命を仰ぐのだった。

「上げるな」

高時は言つて立つた。

誰もが、ご赫怒と見て、はつとしたらしいが、高時は階を下りて、大庭に立っていた。

そして、

「床几を二つそこへおけ」

と、近習へ命じ、その一つに腰かけてから中門の将へ。

「赤橋をつれて来い」

「お伴いいたしますので」

「なぜ問い返す」

「はっ」

「別れに来たに相違ないのだ。死んだら死んだ先までの憎しみなどは誰へもない。みなも

さようには思わぬか」

彼に添って、ぞろぞろ、庭上へ降りてきた金沢ノ大夫以下、同族の武将の群れをふりむいて、そう話しかけなどしている。

——と、もう彼方の内門に赤橋守時の顔が見えた。高時だけでなく、その姿はここにいる限りな人々の視線に曝さらされつつ、おそろおそろ、その一步も重そうに、こなたへ歩いてくるさまだった。

足利高氏の妻の兄。

いわば反逆人の片われ。

と見る衆人の目のトゲが、わけて千寿王の失踪いらいは、彼の頬をも肩の肉をも削けずりつつていたかのような窶やつれにみえる。

「……………」

無言のまま、守時は、高時の床几のまえに、ぬかずいた。

高時は、日頃のような口吻で、床几をすすめた。

「赤橋。かけたらどうだ。まずそれへ」

「謹慎の身です。ありがたくは存じますが、いただきかねます」

「遠慮はいらん。わしがゆるすのだ。また、無断出仕の胸もほぼ分つておる。赤橋、出陣のゆるしを求めに参つたのである」

「ご明察の通りです。新田の大軍は、はやこれへ近づき、西の海道からも、大塔ノ宮の指令による海道の宮方武士が、新田に呼応して、攻めくだつてまいるよし。なにとぞ、守時に一手の防ぎをお命じ給わりますように」

「望みか」

「さもなくては、この守時、死にきれませぬ。——守時とて北条一族の内、その妹いもとむこ 賀いに、宗家そうけへ弓を引く反逆の子を出したことです。世間の疑いの目、誹りそしの声、それはまだ忍ぶとしても、この御存亡の日を、ただよそ目には見ていられません。宗家へのおわび、かつは武士として、身の面目の上からも」

「もつともだ。人はみな依然、赤橋を疑っている。兵馬を持たせて前線へ出すなど、とんでもないことだというだろう。……だが、高時はそう思わん。疑うくらいなら八ツ裂きにしてしまう。御辺ごへんに謹慎を命じおいたのは、坊主にでもなる心かと察したからだ。……が、そうではなく、やはり武士なれば武士で死にたいというならば、それもよからむ。一方の大将を御辺に託そう。戦つてくれ。高時も降伏などはせぬつもりだ」

守時は、落涙した。なんども、高時の床几を拝して、

「かたじけのう存じまする」

と、身を沈める。

その手をとつて、高時は抱くように、彼を床几へかけさせた。

「赤橋。いまからは、御辺も一方の大將としてのたのむのだ。もう謹慎の身ではない」

「不覚な態。面目もございませぬ。幾十日ぶりかで、守時の上にも、青空があつたようなと、つい心をとりみだしまして」

「いや。御辺がこれへ来たことは、高時にもうれしいのだ。人間同士が信じられぬままでは何とも浅ましい。わけて高時は人一倍の淋しがり。わしの陣に、赤橋のごとき者が一人ふえたと思えば、心も少し賑やかになる」

「おことば、一生の賜物と、死しに榮ほえを感じます。御意ぎよを胸に持ち、笑つて討死も……」

「ときに……」と、高時はふと、語気をかえた。

「登子とつこはどうしておるな？」

「はっ、その妹は」

守時は、さしうつつむいて。

「子の千寿王が、大蔵のお固めを破つて脱走したのも知らず、良人高氏の反逆いらい、この守時の実家で、尼同様なぶつまごも仏間籠りの日々を送つておりましたが、ついに今暁……」

「今暁、どうかしたのか」

「仏間にて、わが手でのどを突き、相果てておりました。……宗家御一統や、またこの兄へ、深くわびた遺書一通を、経机の上へのこしまして」

「やれ……。ふびんであつたな。あんな明るい、よいむすめであつたのに」

高時の一語には、嘘でない愛しみがこもっていた。いまだに高時は、高氏と初めて会つたときの印象や、酒の上で、彼に投げられたことなども忘れていず、まして高氏が離反してから、一ト通りでない憎しみも持つていたが、妻の登子へは、血につながる一族のせいもあるが、いたつて寛大であつたのだつた。

しかし、周囲は決してそうばかりではない。

ご寛大も度どがすぎる！

となし、千寿王の失踪などは、母として登子も未然に知っていたにちがひなく、赤橋殿もまた、知りつつ見のがしていた同穴のむじな貉か？ とさえ極言する輩もないではなかつた。

現にいま、この場で高時のことばを聞いていた一族御家人の将星の中には、

ああ、暗君だ

暗君はついにどこまで来ても暗君だった！

と、なんら明察の敏びんもないその凡人なみな感じ方や赤橋守時の処置ぶりなど見て、ひそかな慨嘆がいたんを胸につつむらしい不平顔もかなり目立った。

——とはいえ、高時の性情はいま始まったことでもない。

また彼ら自身も、いまさら、北条血族のきずなは切れないし、恥を敵に売って、あげくに、首斬られる恐れもあることは知っている。ここはただ阿修羅になって守りぬき、ひとまず外敵を追った日こそ、この暗君を、他のよき人に代える絶好な機会としていているものだった。

しかし、北条九代の府、鎌倉武士の名もここから出たのである。禅もここで栄え、学問も政治も、かつての日には生きていたのだ。一概に武士は廃すたれたともいえない。人は元来いろいろだ。この日に会して、生き方、死に方、武人もさまざまだったのは是非がない。

散ちりいそぐ

十七日の夕。

海道の一駅、藤沢の宿しゆくでは、小合戦があつた。

しかし物見隊同士の遭遇戦にすぎないもので、いつか、夜半の暗い雨となつていた。

雨は風を加え、そのなかを、先鋒、本軍、後続部隊まで、新田勢はぞくぞく藤沢の宿へこみ入つて来た。——足利若御料わかごりようの紫の旗もまた、明けがた、遊行寺ゆぎようじの門に濡れ垂れた。

「ここの寺は時宗じしゆうだの」

義貞は、これへ着いても休息をとる容子はない。ただ雨も小やみと見、船田ノ入道が、寺内の広場に床几場いっぺんしやうにんを設けて。

「されば。一遍上人いっぺんしやうにんの起した藤沢道場とはここの由でございます」

「では、寺中には、たくさんな男女の阿弥衆あみしゆうがおりはせぬか」

「おるかもしれませぬ」

「まず、それを洗え。とかく念仏いっこつ一向の仲間には、まま敵がたの曲者がまぎれこんでいるものだ。——義助にそう申せ」

その脇屋義助は、兄の旨をうけると、まもなく二人の虚無僧ぼんじんを寺中から拉らっして来た。

笠、尺八は持っているが、後世の普化僧ふけそうみたいなものではない。雑多な物乞い法師や旅芸人のなかに生じた一種の半俗僧といってよい。

「義助、怪しい奴か。この二人は」

「いや、お味方です。遊行寺に潜んで、今日のご着陣を、待ちかねていたものと申しまする」

「ほ。たれのお使いだの？」

義貞は、ていねいになった。虚無僧二人は、大塔ノ宮の党人、三木俊連みきとしつらの家来であり、合力の牒状を持って、これへ潜行して来た者とのことだった。

その合力状によると。

かねがね、大塔ノ宮の密命の下に、三河半島の一角で待機していた船団がある。伊勢、熊野などの海党も交じっていて、三木俊連がその束ねたばであった。——そして義貞が起つ日を、その鎌倉入りの日を——待ちすましていたものと、書面に見える。

「かたじけない」

義貞は書面を巻いて、ちよつと、拝はを見せながら、船田ノ入道へ手渡した。

「つとに、宮のご令旨りようじはいただいておつたが、作戦のうえにも、それほどまでのお手廻

しがおありとは、ここへまいるまで、義貞、つい存じもよらなかつた。——なにぶんにも野戦一色の兵馬、海手うなではいかがせんと案じていたが、これで上々の配置になると申すもの……して、すでに三木殿以下の船手は？」

「はい」と、三木の家来、奥富三郎兵衛が、それへ答えた。「四日ほど前、それは風浪の高い日でございましたが、武蔵野からの早打ちに接するやいな、兵船九隻に、兵千七百を乗せ、鎌倉の海へさして船出なされました」

「では、その船手は早や、ついそこへ来ておるのだな」

「まいつております。江ノ島の島蔭まで」

「よしつ、さらば、こちらも急ぐ」

「その総がかりは、いつとなりましようか。おそれながら、ご軍勢のくばりと、また、三木勢の上陸地、攻め入る口など、おさしず仰ぎとう存じますが」

「それは秘中の秘。……さ、それはだな」

義貞は口を洩つた。まだいくらかの疑惑を二人へもつらしく、その人態にんていなどを眼で舐ねぶるがごとく見直すのだった。

「ここは『ツメ手』というところである。」

天下諸州にわたる宮方と北条幕府とのたたかいも、ほぼ終盤に入っている。

そして、北条氏の王将の府「鎌倉」だけが、いま詰むか詰まないかの境にある。だがまた、もし下手に詰めそこねたら、これまでの宮方の優勢とて、さてどうなるかわからない。

「七郎っ」

義貞は見まわした。

呼ばれて、

「これにおります」

と、諸将のうちでも一トきわ若いひとりの若武者が、すすんで、義貞のことばを待った。一族の、新田藏くろうど人七郎氏義というものだった。

「七郎、大手への先陣をつとめろ。——すぐ腰越から七里ヶ浜を駈けて、極楽寺の下へせまるのだ」

「これは……」と、藏人ノ七郎は武者ぶるいにふるえ。「身の面目にござりまする」

「待て。まだある」

「は」

「海上に船手をつらねて待つと聞く三木俊連の一勢は、すべてそちの指揮下とする。——

よいか、三木の使い両名も、すぐ馬をとばして、このむねを俊連以下の人々へ達しておけ」この朝、これが義貞の最初の軍令であつた。

それまでは、あるいは義貞もまだ「詰の大事」に迷うところもあつたであろう。が、詰手は幾つもあるものではない。徐々の緩か、電撃の急かである。彼がこうして速戦即決の打込みへ踏み切つたのは、浜手にも三木俊連の新たな味方があることを知つたからにちがいない。

ここ数日で、その持ち駒も、二万余騎とふえていたが、大半以上は利を見て傾いて来たものである。新田の一引両、足利若御料の旗、そのの景気が招いた烏合の武族だ。

——が、瀕死の府といえ、北条方はそうでない。窮鼠の強さに加え、鎌倉最期の日とも覚悟してこそぞり起てば、府内、なお三、四万の兵力は優にあらう。

そのうえ、地勢のこともある。嶮ではないが、鎌倉四境はすべて山だ。また山に沿う丘やら谷やら狭道で攻めるに難い。——のみならず、南は海で、その海面に義貞はなんら攻め手を持つていなかった。

もし高時以下、一族北条が、

他日を期して

と、するならば、海上から船で遠く逃げおちることもできなくはない。あれこれ、義貞も思いめぐらしていたことだろう。が今は何の^{しゅんじゅん} 遼 巡 もない。まず蔵人ノ七郎をして、浜寄りの腰越方面へ走らすと、以下、彼の一令一令のもとに、全軍は藤沢ノ宿を引払つて、三方面へわかれだした。

これを藤沢から見ると。

左翼の一軍は、堀口貞満、大島守^{もりゆき}之がひきいて、鎌倉の北ノ口、小袋坂方面へ。

また右翼は。

大館宗氏、江田行義が将となつて、さきに新田蔵人が急いだ鎌倉の大手、極楽寺の切通し口へ。

そして大将義貞の中軍は、おなじく大将足利若御料の輿^{こし}と共に、ちようど左右両翼軍の中間の路にあたる^{けわいざか} 仮粧坂の方へと、その陣足を雲のように^{はや} 迅めていた。

鎌倉攻め。そのの総がかりは、十八日その日から始まった。

迅かつた。

北条方でも、もちろん、^{じんらい} 迅雷の急とは予測していたろうが、こうまでとは、考えきれ

なかつたものとみえる。

相模原から藤沢まで、暗夜、雨にさえ濡れてきた連戦の兵が、眠りもとらず、すぐ鎌倉へ肉薄するはずもない。——などと府内へ報じていた物見隊の観測などが、かえって、あやまらせていたものか。

いやそればかりでもない。前線でやぶれた将士が一時にせまい鎌倉じゆうに込み入っていたのである。わけて下郎、雑武者などは、自分らの敗北を聞えよくかざるため、競って敵方の兵力を誇大にいう。またその惨烈さを吹聴ふいちようする。裏切りの続出をのしりわめく。

街は、釜の湯が沸くような騒ぎに落ちた。一面の海をのぞけば、鎌倉の街そのものが釜の底といってよい。その中で煮られる豆みたいに府民は家もすてて泣きさまよった。山へ走れば山はどこも兵の陣場になっているし、浜へ逃げれば、沖には兵船だけで、小舟一そなげさう渚にはない。

けん、けん……と、どこかでは群犬の声が雲にこだましている。鳥合とりあいヶ原はらのお犬小屋の狂いであろう。動物的な官能は彼らのほうがずっとするどい。人間は眼前のものと戦い、なお頽勢たいせいをもりかえそうと晦くらんでいるが、天に吠える群犬の声にはいんいんとこもる悲ひ

哭こくがあつて、すでに未然の何かを知っていたかと思われるものがあつた。

「二度とは見まい」

守時は、誓つて出た。

「ここ、住み馴れた鶴ヶ岡も、赤橋のわが家も」と。

執権御所の内で、

「征ゆけ」

と高時から令をうけたのが十七日のひるさがり。家は柳宮に近く、勢揃いも八幡社頭でおこなわれたので、つかのま、彼はやしきへも立寄つていた。

女めのわらわ童

や老女まで、およそはみな暇をやつてあつたので、百年の歴史をもつこの門

も空からかぜ風が鳴つているだけだった。ただひとり残されていた老家職が、守時のすがたに、

さんぜんむせと咽なび泣いた。

「よいか。心得たるか」

くれぐれも念を押して、彼は門前の赤橋を渡つて戻つた。いや橋の上で立ちどまつた。

——そして行く谷水を見てみると、かつての年、妹の登とうこ子が足利家へ嫁とついだときの白い姿

や、あの夜のさかんな庭燎にわびやらがふと目に浮ぶ。

ここを出るとき、花嫁すがたの妹は泣いた……。

倅しあわせになれよ。

女は良人しかないものぞ。

もどるな。よい妻になれ、よい母に。

守時は忘れはしない。妹へ言った。鎌倉武門のあいだではあたりまえな庭ていきん訓だった。

わけてその妹髻に高氏を選んだ責任の多くも兄の自分にあるとされていた。

守時は兄だが、両親とも早世だったので、父同様な心で登子を手もとにそだてて来たのである。で、実感からも責任感としても、彼には父以上なものがあつた。それが今日の愛別の苦となっていた。——しかし、彼はいささかも悔いている色ではない。妹の良人高氏が、謀反とわかつたときでさえ、そうかといつただけの彼だった。

ほどなく、赤橋守時の一軍は、前線のふせぎせに急いだ。

その下には侍大将の南条左衛門高直以下の勢せい六万騎と、古典では誇張してある。が、実数はほぼ一万弱か。

それでも、府内の残存兵力とすれば少なくはない。主戦場は、三街道の口と見られ、仮け粧坂わいざかのかためには、金沢左近大夫有時を大将に。

また、極楽寺方面へは、大仏陸奥守貞直を將とし、ここへは兵力も一万以上、もつとも重厚な守備をみせている。

いや、守備籠城のかたちではなかつた。

敵に長陣を強いて、長期籠城の戦法なら、こう全力をあげて、打っては出まい。

一気に、迎え打って、敵を粉碎するの気でいたのである。——鎌倉武士の気負いとして軍議は必然そうなつたろう。——また連戦の息やすめもせず、ひたぶる急下してきた敵勢でもある。

「疲れを打て」

ともしたにちがいない。とにかく、上方でも武蔵野でも連敗は喫^{きつ}してきたが、なおそれくらいな意気はあつた。また自信していい兵数もあつた。しかも、受けて立つ位置からみれば、北の山ノ内、仮粧坂の隘路、大手の浜道^{いなむら}稲村^{さき}ヶ崎、三方面どこも地の利は味方にある。

十七日の夕、赤橋軍は山ノ内を北へ越えていた。

同夜、雨の中。

洲崎、青船に陣す、とある。

洲崎はいまの北鎌倉の山崎あたりか。

青船あおふな、あるいは、青船原ともよばれていたのは、現在の大船である。

あけて十八日のたたかいは、まずこの辺の喊かんせい声からわき起つた。あかつきまだ暗いうちの情報で——新田軍、藤沢ノ宿に着く——とは聞えていたのだが、よもやまだ朝のまに、もう敵騎を目に見ようとは、赤橋勢も予期していなかったことらしい。夜来、陣容もまだととのつていないうちのことではあつたし、序戦まず、混乱を突かれた。

「あれ見よ」

と、守時は味方へ言つた。

「敵は、馬も兵も、泥土にまみれ、相模野から駈けつづけて来た疲れのままだ。味方は新
手の精銳、なんで怯ひるむ。——新手の弱味は、捨て身の戦いくさぎも胆いそが、とつき、腹にすわらぬ
ところにある。——南条、押し返せ」

侍大将の南条高直は、これを辱はじとして、自身陣頭に出た。

そして、たちまち、新田がたの両将、堀口貞満、大島守之の二軍を追いしりぞけた。

だが、すぐ敵は逆巻いてきた。

とくにこの手についていた越後新田党の北国武士は果敢だった。山国の瘦地でそだち、

累代、半百姓の飢寒と不平にたえてきた欲望の猛兵である。とかく栄耀えいようの中にあつた府内の幕士や、御家人勢の比ではない。

ぶつかるやいな、とツさから激突だった。追ツつ追われつだ。新田勢も鎌倉勢も、いきなりどうしてこんな形ぎようそう相となつたものか。まず矢合せを序じよきよく曲とした源平時代の合戦には見られなかつた激烈さである。

思うに新田方は策として、一挙決戦を逸はやつていたし、一方、赤橋守時の兵も、大将守時が、ひそかに抱いていた悲壯な決意をそのまま映うつして、全軍決死の相そうをおびていたものにちがいない。

そのころの武蔵路、大船から戸塚街道へかけて。また藤沢寄りの丘や野づらでも——兩軍の衝突は、地形に制せられて、幾十カ所にも分裂していた。

卯ノ刻——午前六時ごろから暮れがたまで、各所での白兵戦六十余たび、なお、ひからびた兩軍の武者吠えはやまず、敵か味方かの、けじめもつかなくなっていた。

すでに白い夕星ゆうすづつを見、風にはなんともいえぬ血臭くて重たい湿度があつた。とくに赤橋勢の損害はひどく、るいるいと屍かばねを野にみだしていたが、そんな中をいま、

「殿ツ」

足もとの見さかきもなく、一人の小冠者が狂奔して行き、

「殿っ。殿はどこです？」

と駈け過ぎる騎馬をみるたび、手をあげていたが、耳をかす一騎もない。すべて逃げ退いてゆくらしかった。

そのうちに、小冠者も、空馬を拾った。そしておなじ方向へ駈けた。すると山崎の上に密集している軍があつた。彼は馬を捨て、またおなじ叫びをくりかえしながら崖をのぼった。

やっと尋ねるお人に会えたのである。さんざんな敗北となった残余の勢を退きまとめて、主将の赤橋守時は、懐愴な味方の者の影にかこまれていた。

「小市か」

守時は、人なき木蔭に腰をおろして、

「ごころ待ちにしていたぞ。女どもはみな無事か。それとも、そちが来たのは、なにか異変か」

と、たずねた。

紀ノ小市丸は、千寿王の侍童で、また紀ノ五左衛門の孫でもある。だから元々は、大蔵

屋敷の者だが、登子の身が実家方預けとなつたとき、共に赤橋家へ移つて行き、今なお、登子のそばから離れてはいないのだつた。

一書を遺して、

良人の罪をわびて、

妹は自害いたしました。

と、守時は先に執権の前でも答え、そとにもそう信じさせてきたが、まことは、幾人かの侍女老女に、紀ノ小市を付けて、密かに、他へ身を隠せと、追いやつていたものだつた。おそらくそこには、他人には想像もしえない涙と涙の顔で、愛情にもとづく言い争いもあつたであろう。兄を死地に立たせてまで生きようとしないう登子であつたにはちがいない。けれどそれを叱つて、鬼のごとく叱つて、しいて登子を谷の隠れ穴へ追いやつたのち、身の出陣を、高時の前へ、願ひ出ていた守時だつた。

「ご無事でいらつしやいます。誰にも見つかる谷の洞ではございませぬ。けれど、以後は明けてもくれても、兄君へ申しわけないとばかりに」

「まだわかつていないのか。……わが子の千寿王は、もうついその陣へ、父に代つて来ておるのに」

「いえ、まずはごらん下さい。おそらくは今こんみやう 明中がお別れかと、さいごのお文ふみを、これへお申しつけでございませうれば」

守時は受け取つて、星あかりにかざして読んだ。そして返書代りにと、静かに言つた。
 「生き抜くお覚悟との文ふみを拝見して、守時も満足。これで思いのこすことはない。さように守時が申していたと、妹の登子へ、いや、足利御台所へようおつたえ申してくれい。くれぐれ、世に長くお倅せにと」

紀ノ小冠者が、そこを駈け去つてから、時間としていくらでもない。

殺さつと到した新田勢は、

「あれだ。赤橋の崩れ本陣は」

「西道を取れ」

「その崖をのぼれ」

と、昼からの勝ちに乗じて、肉薄してきた。

丘一帯は、松の暗がりには、たちどころに鳴動しだした。相打つ怒濤の吠えと、白い穂先やつるぎの飛沫しぶきに。——それも時たつほど、獣林の揺れに似ていた。

侍大将の南条高直は、

「や。あのお声は」

と、乱刃のなかを退いて、ひと息入れ、またすぐ、自分を呼ぶ声をあてに駈けだした。守時が待つていた。

背を大樹にもたせて、髪もみだし、槍を杖に、

「南条か」

やつと、立ちささえている姿だった。

「ア、どこを。いますぐお手当てをいたしまする」

「それには及ばぬ」

青い眼のふちは笑つていた。

「……わしは果てる。本望と思つて死ぬ。あとをたのむ」

「なんの、まだ」

「いや死なせてくれ。そちは侍大将。退けまいが、はや退くがいい」

「思いもよらぬ仰せ。伊豆田方郡で重代いずたがたご恩をうけた鎌倉殿の臣。退くほどなら斬り死にします。自分の郎党も目の前に死なせておるものを」

「そうだったな。惜しい者ほど、散りいそぐか。ならば行け。思うさま武士の名に生きるがいい」

「赤橋どのは」

「あれで」

と、守時は槍を杖にすこし歩いた。すぐそばに小さい北野天神の祠ほこらがあった。縁にあぐらして、守時は静かによろいを脱いだ。——見るにたえず、高直は下にうづくまつたが、顔を上げたとき、もうその人は紅くれないの座に前身を俯うつつ伏ぶせていた。

敵の目にふれてはと、首を搔かいて、祠の裏に穴を掘った。気づいたのはそのときで、守時の首は一通の文ふみをかたく啞くわえていた。なぜかは知らず、南条は自分の口からしぜんに出た念仏と共に土をかけた。そろそろと掛けて行ってその穴のあとを足では踏めなかった。病葉わくらばを搔かき寄せて来て、そこらにかぶせた。

ゆらい守時最期の地は、

洲崎千代塚

と、古典にみえる。が、千代塚の名も洲崎も現地名にはない。ただ「相模風土記稿」によれば、わずかに北鎌倉の寺てら分ぶん、町屋の辺かと考えられるばかりである。

南条高直の戦死も、同夜の宵過ぎてはいなかった。——主将守時の死を見とどけ、直後、敵のなかへ駈け入っていたのであろう。なにしても、鎌倉の北の口はこれで突破され、越後新田党の猛兵や、堀口、大島の二隊も勢いを駆って、夜半にはもう山ノ内まで進出していた。

もつとも、分断された赤橋軍の残兵は、まだ藤沢街道の村岡や深沢あたりで戦っているらしくもある。夜更けるにつれ、遠く民家の焼ける火が赤かった。

しかし、ここ以外は、中軍の義貞が陣した仮粧坂^{けわいざか}方面も、右翼軍が迫った腰越、極楽寺の方にも、まだなんのうごきはなかった。ただ刻々が不気味なほどの夜半であった。

稲村^{いなむら}ヶ崎^{さき}

仮粧坂は、どの攻め口よりも、鎌倉の腹部に近い。だが、幕府もここへは大兵を当て、道には樹林を伐^きって仆すなどの万策もとっているので、ひよどり越えの故智^{こち}にも出られず、「さて?」と、義貞も足ぶみしたことにちがいない。

だから彼の本陣を仮粧坂とは称^よんでも、じつさいには仮粧坂まで進出できず、当夜まだ、

葛原くずはらヶ岡おかの西で形勢を見ていたものとおもわれる。

そこへ、左翼軍から、

「お味方は敵将赤橋守時を討ちとつて、はや小袋坂をまえにしております」

との捷報しょうほうが入った。

義貞は、もうわが物と思つたらう。夜明けへかけてはまた、諸方の火の手もますますふえ、くるまれた鎌倉の府の屋根は、海までも、薄墨いろの底だった。

ところが。その十九日のひる、様相は逆転しだした。一大凶報が入ったのである。

浜手へ向つた右翼、大館宗氏の一隊が、この朝の引潮どきを狙つて、稲村ヶ崎ひがたの干潟を伝つたい、敵中突入への「抜け駆け」に出たのであった。

奇功をそうした大館勢は、府内へあばれ入つて、前浜の民家に火を放った。鎌倉じゆうは為にどよめきを起したが、当然な猛反抗に、大将大館宗氏が、まず稲瀬川のへんで斬り死にをどげてしまい、そのほか、部下の多くも討たれたので、残余の兵は、からくも靈りょう山ぜんヶ崎さきの上へ逃げ上つた。とはいえなお生き残りの七、八百人は完全な敵前の孤児になつているといふ報であつた。

「……しまった。左に赤橋を討つて、右で大館を失つたか」

おおいえない色が、義貞の眉を研いだ。

なによりは、敵に士気を振寄せたことこそ重大である。手薄になった浜手は苦戦に落ちるだろう。また小袋坂の方まで盛りかえされるかもしれない。

「いや、そんなことよりもだ」

と、彼は意を決した。

霊山の上で、危険にさらされている敵中の孤児を見ごろしにはならない。このさい、救うにためらいを示していたら、義貞の威信はなくなる。坂東武者というやつは、元来がそういうところで自己を託している人間の将器というものの軽^{けいちよう}重^{じゆう}を、内々、測^{はか}つているやつだ。

「義助。そちの一手はここへ残すぞ。擬勢のためだ、さとられるな」

「兄上は」

「自身、ここにある岩松、里見、山名。また越後党の一ノ井、^{からすやま}鳥山、羽川などの諸隊をひきいて片瀬、腰越を迂回し、極楽寺坂へついて出る」

「ならば、それがしに代らせてください」

「いやここには足利若御料もおる。万一、正面の敵金沢有時の知るところとなったら、味

方は分断され、勝目のほどもおぼつかない。ここも大事だ。義貞に代ってここにおれ」
 あぶない戦法ではあるが、腰越までの間は、低い独立した小山群であり、またそれを縫う谷つづきだった。旗、槍、馬上の影を低く沈めて、迂回潜行の奇策へ出るにはその地的条件は絶好といってよい。

義貞は、そもそもの、生品明神の旗上げからこの日まで、終始、捨て身の戦法、いちか、ばちかで通してきた。また、勝ってきた。

だが、ここはかたい。

敵の大手だ。平常でも、京と鎌倉間の街道口なので、府境第一の関門となっている。その極楽寺坂は、岬の山の横腹を中断した開鑿道路で、両がわ木も草もない岩壁だった。そのうえ前面の極楽寺川、針摺橋に二段陣地の防寨を構築していた。

「あれしきの逆茂木」

「なじか破れぬことがある」

浪となつて、新田勢の部隊は、交互、われこそと、ぶつかって行く。また引き返す。

そのつど犠牲は少なくない。敵は、尽きない矢のかずを持っており、矢かず惜しまず射あびせるのだ。どうしても白兵戦に持ち込まぬかぎりには勝負にならない。

二十日、二十一日、攻めあぐねた義貞は、

「七郎を呼び返せ」

と、藤沢遊行寺の陣からこの口へ、一番に立たせておいた甥おいの新田ノ蔵人七郎氏義を、
行合ゆきあひ（行逢がわ）川の本陣へ呼びつけた。

「ま。食べないか」

義貞は、自分も手づかみで取っていた玄米くろこめのにぎり飯を盛った大鉢を眼でさしながら、
「七郎。こう力押しのかえしはこけなことだ。いわば敵の思うつぼに乗っているもの。
なにか戦法を変えずばなるまい」

「はや、味方の堀口、大島などは、功をあげたと申すのに、面目もございませぬ」

「いやその山ノ内方面の序しよノ勝ちも、小袋坂で食いとめられているのか、あれ以後の捷報も聞かぬ。——仮粧坂けわいざか口はもとより動きがとれず、また義助にかたくうごくなども命じてある。なんといたせ、ここを破らねば、一期いちごの大事だいじだが」

「おやかた。一策がないでもございませぬが」

「聞こう。どんな策か」

「この附近の田鍋谷から北へ入って、長谷山へ出て、極楽寺の敵の背後へ突き出でまする」
 「いい考えだ。が、義貞もこの辺の姥ヶ谷、田鍋谷などの八方へ兵を入れては間道をさぐらせてみた。しかしいずれも兵馬の通れるような所ではないという」

「いや田鍋谷なら越え行けぬことはない、三木俊連が申しおります。おゆるしとあれば、三木の一勢が」

「行くというのか」

「望んでおりまする」

「俊連のひきいて来た船手も、かくては用をなしていないな」

「なにせい、わずか九隻。それにくらべ、敵の兵船は大小百余艘もありましようか。陸くにおいて、攻め口を開かぬうちは、船手の者も、突ツこむわけにはゆきませぬ。……で、俊連も加勢あがに上陸あがり、まいど齒がみを嚙んでおりますわけ」

「七郎」

「はっ」

「こよい、深夜の干潮は、正しくは何刻なんじきごろに相なるな？」

「このところ、夜々、月の出は亥の刻（午後十時）過ぎ、従つて、潮の干ざかりは、四更の丑満さがりとなりましようか」

「すると？ ……」

義貞は何か考えこんだ。

或る確信をえたらしい。

「潮は今だ、潮時もいい」

と、義貞はいった。

すぐ彼は、帷幕の面々を、よび集めた。

もうここでは床几などは使っていない。帷幕といつても、行合川のほとりの草原に、各、あぐらをくんだままのものだ。

鳩首して、やがての後、

「よろしいか」

義貞は、念をおした。

諸將、ことばもなかつた。しかしことば以上なもので深く頭を下げた。

岩松経家と吉致の兄弟は、すぐ九隻の船手の指揮者として、船馴れた一隊をつれて腰

越の磯へいそいだ。

また、三木俊連は、陣借じんがりの身分なので、同族の行俊、貞俊ら以下、手飼いの郎党小者ばかり二百余人の小勢で、かねて調べておいた「田鍋谷」へ分け入って行った。

道もない道を迂回路として行くのであったから、三木部隊はみな徒歩だった。馬一頭ひ曳ひいていない。

こうして、夕までに、海陸ふた手は、夜を待つべしと、義貞の計をうけて立ち去ったが、この間にも、行合川の陣場には、二家の新しい参陣者があつた。

ひとり伊豆の天野経つねあき頭。

もひとりは、父におくられて駆けつけてきた武州熊谷の小四郎直経の子、熊谷虎一だった。どっちも、ひきつれて来た人数は少ないものだが、

「折もよし」と、義貞は、うれしく会って、

「そちたちは、運のいいやつだ。もしこよいを過ぎて来たら、秋の扇か、日和の傘、用にもされず、自分でも、武運つたない者と悔やんだらうに」

と、いつて笑った。

そして虎一はすぐ父と同陣の、新田又五郎常政の手へ配属された。

どの部隊も、この宵は、たらふく食わされて寝ころんでいた。牛の群れみたいである。黒々と、行合川の海口ぢかい砂丘一帯にまでみえる。

いつか深々、寝込んでしまっている顔もあつた。泥ンこな兵たち、欲も得もないような寝顔、それでも誰かが、

「月の出か？」

つぶや 眩くと、すぐ薄目をあく。

いこく 亥の刻——十時ごろ——の月の出を合図にここの本軍全部は前進との内示だった。前進とは極楽寺坂の敵へぶつかることにほかならない。それまでの命かと観念の臉もある、ふてぶてしい。

まもなく、彼らの草枕は、伝令の騎馬に蹴ちらされた。

「起きろ。起きろっ」

「用意、用意」

すでに中軍の旗本群は、馬首をそろえていた。その中に、義貞の影もある。

「山国勢は、先に出ろ」

これは夕方の陣替えに編成され直していた約束だった。——まだ一度も海を見たことが

なく、初めて海を見たという兵もかなり多かったのである。

そういう山国兵は、すべてこれを選りのけて、蔵人ノ七郎氏義の手勢に付け、その氏義を先鋒に、総勢、義貞の旗本もくるめて四千騎ならず、縦隊三段になって、極楽寺坂へ攻めよせた。ただの一兵も、あとには残しておかなかった。

兵家のあいだの兵法言葉に“まぎれ”という語が広義な意味でよくつかわれる。極楽寺坂の総がかりもまた、この“まぎれ”戦法にほかならぬものだった。

うおうつつつ

わああつ……

迫つてゆくが、たちまち、わざと崩れをみせて退く。また肉薄する。猛攻をしめす。

そして敵をここ一点に充血させ、干潮が来るまでの、時をかせぐのが主目的であったのである。

極楽寺坂の敵の主将は、大^{おさらしぎ}仏^{さだなお}陸奥守貞直だった。

長谷^{はせ}ノ大^{だいぶつ}仏^{ぶつ}辺に館があつたので、地名オサラギを当てて、大仏殿とよばれ、北条一族中ではもつとも声望があつた人だから、この手の総大将としては申し分のない人だった。

しかし、その大仏貞直にしてさえも、

「新田勢のこよいの攻め方は、これまでのようではない。逆軍の義貞も今やあせつて、気短に、雌雄しゆうをわれと決せんとするものか」

と、当面の猛攻撃が、相手の「まぎれの攻め」とは気づいていなかったふうである。

もし気づいていたならば、「ここよりは」と、まず稲村ヶ崎の突端の防禦と、干潮時の時刻とに、最大な注意を払っていなければならなかった。

もちろん、彼も細心な防禦法は講じていた。

わけて、つい三日前、新田がたの大館宗氏の一勢が、昼の干潮時をうかがって、突如、干潟ひがたつた伝いに、郭内かくないへ斬り込んだりできた前例もあることなので、そこは海面だからといって、決して安心はしていない。むしろ一そう嚴げんにはしてある。

だが先の大館勢は、これを袋の鼠にして殲滅せんめつし、主将の大館宗氏の首をも挙げていたことなので、自然、郭内の兵は驕おごっていた。あの失敗をみては新田方のどんな命知らずも、ふたたび無謀な危険はおかして来まい。よしややつて来ても、海上には北条家の船手が船列をしいて見張っているし、岬みさきの突端から前浜へかけては、幾多ほっさいの防禦が築かれてもいる。

「来るなら来い。ごござんなれ」

と、多少のたかはくくつていたに相違ない。

「まぎれ」はつまり、心理戦でもある。こうした郭内の将士の心理が、義貞のおもわくを都合よく進めていたことも否まれまい。やがて深夜もすぎ、丑ノ刻うし（午前二時）ごろにもなると、七里ヶ浜の渚なぎさも、稲村ヶ崎の岬みさきの磯も、目立って、干潟ひがたの砂を、刻々にあらわしてきた。

「七郎。敵の木戸へ、また一ト押し、押し迫れ」

義貞は、次いで、もつと烈しい命をくだした。

「このたびは、そちの部下のみで、小勢になるぞ。その小勢まぎを紛らすため、敵の逆茂木さかもぎ、道の木々、所きらわず、火をかける、火を用いろ！」

このとき、義貞自身は、またその本軍の大部隊は、大きく急旋回して、稲村ヶ崎の磯根づたいに、岬廻りの道へ向い出していたのであった。

そこは昔、鎌倉開府のころには、磯根に沿って、細い岬みさきまわ廻りの往還おうかんがあつた所だが、荒天の日には道も洗われ、上からは絶壁の石コロなども落ちてくるので、極楽寺坂の切り通しが成ると同時に、いつかあとかたもない廃道になってしまったものだという。

岬、南へ突出すること

十町ばかり

海崖、およそ三十間

切岸の「石くえ」絶えず

峰の北は

りやうぜん
靈山、長谷の山に連なる

いまはどうか。古記にはそんな形容がつかわれている。「石くえ」とは、石ナダレのことである。

「切岸に沿って行くのはかえって危ないぞ。なるべく干潟ひがたの遠くを通れ」

口から口へ、義貞は、うしろの隊へ伝令させた。

陰暦五月二十二日は、まだ俗にいう「大潮」の季節である。かなり沖遠くまで潮は引く。その時刻も、後世幾多の考証で、あきらかに算出されており、正しくいえば、最干潮時は、いまの時間で午前二時五十七分であった——という。

まさに時こそであったのだ。義貞以下、江田、里見、烏山、羽川、山名などの旗本、諸部隊、多くは騎馬で、むら千鳥ちどりのように駆けみだれた。

けれど古来、この新田義貞の稲村ヶ崎駆け渡りの事は、古典から伝説化されて、例の有

名な史話となっている。

それは義貞が、佩はいていた黄金こがねづくりの太刀を海中に投じて、龍神に祈念をこめたところ、彼の忠烈を龍神も納のうじゆ受ましまし、

その夜の月の入る方へ、

前々、干ひる事もなかりし稲村ヶ崎

俄に二十余町も干あがりて、

平沙渺へいさべうべう々たり。

横矢、射んと、待ち構へぬる数千の兵船も、

落ち行く潮に誘はれて、

遥かの沖に漂ただよへり。

不思議といふも類たぐひなし。

という奇蹟話になっているのである。これがよく、いぜんには歴史画の画題などにも取り上げられ、新田義貞といえは、稲村ヶ崎の龍神祈りが、かつての童幼がいだく唯一の影像にもなっていたものだった。

せつかくな古典もこんな分りきった作さく為いを弄ろうしたりするものだから、後世の学者に「太

平記は信ずるに足らず、史料に益なし」などとほかの箇所まで全面的に無視されることもあつたりしたのだが、しかし、こんな笑うべき舞文のうちにも、たった一つ、一ト握りの砂にも似たような史料だが、信じていい史片はある。

なにかといえは、

横矢射んと、待ちかまへぬる数千の兵船——

と、あるそのことだ。

当然、北条方には、数千ほどではなくても、兵船の配備はあつたはずである。——ところが古典太平記の荒唐無稽を笑つて、ただし推理や傍証を加えてきた多くの学説も、どうしたわけか、干潮時間や、渡渉進軍の可能だけをいって、海上に兵船のあつたことにはほとんど言及していない。思うに、学者がそれをいわないのは、傍証の史料を欠いてるためだろうが、さりとてそれをいま「私本太平記」のここでは無視するわけにはゆかない。

新田方にも、十そう前後の兵船はあつた。

先に大塔ノ宮のさしらずで、三木俊連が伊勢、熊野の遠くからひきつれて来た加勢である。が、指揮の将には、新田一族の、岩松経家と吉致が乗りこんで、宵から沖で待機していた。そして今し、義貞の本軍が、岬廻りの奇襲に出たとみるやいな、彼らの舳も一せいに、

突端の干潟へさしていそいでいた。

掩護戦のためにである。

一方。極楽寺川の下から、干潟十町を駈けて、

「ここ一ト息ぞ」

と、すでに、驀進をみせていた新田勢は、ちょうどその曲折線の所で、当然な、一大苦戦をよぎなくされた。

かねて、警戒の船列をしいていた北条方の船手が、これを見ているはずもなく、
「すわ」

と、弦をそろえて「横矢」の矢ぶすまを浴びせて来たし、また船上の海兵もただちに、その舷々を跳び下りて来て、直接、新田勢の前進をはばめにかかつて来たものだった。加うるに、干潟にも、逆茂木やら粗朶垣やらの障害はあつたらうから、新田勢がここでの死闘は、これまでの、どこの戦闘よりは苦しかった。おそらくは義貞も、心中、

「これまでか」

と、早や討死の覚悟もしたほどではあるまいか。

しかも、干潮の最頂期を境として、潮位はまたすぐ、上げ潮へ変ってゆく。

戦の駆け引きはしていられないのだ。あくまで無二無三でなければならぬ。海面で岩松の船手が、敵の大船列へ突ツこんで、元寇ノ役さながらの船戦を展開して、いくぶんの牽制はしていたものの、ここの干潟合戦の咆哮は、いつ果てるともみえない死闘の揉み合いだった。

そのうちに。

これがわあツと、北条方の敗勢と気崩れになつて来たにはべつな理由がある。

彼らの心臓部——つまり極楽寺坂の郭内から——またその附近の高所低所から——火ノ手があがり出したのだつた。潮風だし、傾斜地だし、一瞬に海をも染めてきたのである。いうまでもなく、それはさきに田鍋谷から長谷山へ分け入った三木俊連の一隊が、霊山そのほかの高地をとつて、敵の不意をつき、敵の本陣地への乱入に成功したものにちがひなく、そのため大混乱におちたらしい長谷、前浜あたりの叫喚がこの沖近くまで聞えてくる。

「勝ツたぞ」

義貞は、絶叫した。

「宮ノ党人三木勢にのみ名を成さすな。極楽寺坂はもう味方の足もとに踏まれている！」

新田勢はそれに乗じて、干潟を駈け抜け、極楽寺下、前浜あたりへ、一せいに駈け上がったが、郭内の防衛陣は、もう四分五裂となっていた。——稲瀬川をこえ、由比ヶ浜の一ノ鳥居方面へ。——あるいは、大仏下の山ノ手づたいに、黒けむりの下を、ぞくぞく町屋の方へ逃げ退いてゆく長蛇の敵しか見られなかった。

「朝を待とう！」

義貞は令した。もう鎌倉そのものは、袋の中と見たのである。

朝になって分ったことだが、極楽寺口の大將大仏貞直は、乱軍のなかで戦死していた。彼のまわりには、十数人の将士の屍が、殉じていた。抵抗振りの烈しさもしのばれる。また、仮粧坂口では、その守将、金沢貞将が討死をとげ、脇屋義助の手勢は、同朝、府内へ突入していた。

これで鎌倉の守りは、

小袋坂

仮粧坂口

極楽寺坂

三道とも突きやぶられ、あとは狭い府内の主要地を残しているだけのものになり終った。——が、諸所の合戦は、熄やんではいない。

むしろ死相の死にももの狂いと、滅めつぜん前いっせんの一閃ともいうべき、凄絶さを極めていた。

義貞は、甘繩山の下、無量寺谷のへんに、陣場をすすめて、由比ヶ浜から、町の内までを、一望に見ていた。

そのうちに、一ノ大鳥居のあたりにむらがる敵軍のうちから、ただ一騎、いかにも見事な敵振りの武者が、浜を駆けて、味方の陣へ突進して来た。

これは、島津四郎といって、長崎円喜の烏帽子えぼし子ごといわれ、相模入道高時にも、日ごろ可愛がられていた者である。

だから、敵味方とも、

「あわれ、島津が寵ちようおん恩おんにこたえて、いまを一期ごと、働く気か」

と見ていたところ、さはなくて、島津は新田勢の前まで来ると、馬をすて、かぶとを脱いで、降参に出たのであった。

敵味方、これを見て

あな汚きたなし、と、

悪まぬ者はなかりける

と、いかに降人も多かつたかの一例として古典は彼を挙げている。だが、

年来、重恩の郎党

或は、累代奉公の家人共

主を棄て、親を捨て

敵方につき

目もあてられざる有様なり

ともいつている。それが実状であつたであらう。

とはいえ、そうした武士ばかりでもない。さきには赤橋守時がある。また大仏貞直や金沢武蔵守のような華々しい者もあつた。とくに長崎一族は、みなよく戦つて、北条最期の日に殉じた。

長崎ノ入道思元しげんと、その子、為基ためもとのふたりも、辻の一手を防いでいたが、そのうちに父思元が、扇ヶ谷の黒煙を見て、その方へ行きかけると、為基が、

「父上っ」

と、呼びかけ、

「お別れとなりました。よくお顔を見せてください」

と、瞬間だが、涙ぐんだ。

すると思元は笑つて、

「なにをいう。長いことなら知らず、鎌倉の運命もきよう限りのこと。夕にはあの世の辻でまたすぐ会えようものを」

「ああ、そうでした」

為基は引つ返して、由比ヶ浜で奮戦して果て、思元は、扇ヶ谷方面で討死にした。

またべつな辻では、塩飽しあくノ入道聖せいおん恩が、禅僧みたいに、辞世の偈げをのこして割腹し、その子忠頼も、父にならつて自害した。

——時に、ここで寄手の総帥義貞が、何とかして敵の中から救い出そうと、その救出にあせつていた者がある。妻の父、彼には舅の安東左衛門高貞だった。だがその高貞は、いくら誘つても来なかつた。最後の最後まで戦つて、ついに新田勢の矢風のなかで戦死していた。

たかときまんだら
高時曼陀羅

「いやだつ」

高時は、なんとしても、きかなかつた。

「ここは、うごかぬ」

とじているのである。

しかしその執権御所も、新田勢が三方面から府内へ火をかけ出してからは、まもなく、四面楚歌しめんそかの潮の中だつた。

あの石ノ庭、局つぼね々々、およそ柳營の隅々までをいま、足音のない闖入者ちんにゅうしゃのような

薄煙うすけむりが、所きらわず這いまわっている――。

「太守たいしゆ」

うごかない高時の姿をめぐつて、墓場のような沈黙におちていた周囲から、長崎ノ入道
 円喜が、彼の床几へ、再度の諫めいさめをこころみていた。

「……ご無念はよう拝察はいさついたされませんが、なにせい小袋坂、仮粧坂けわいざか、極楽寺坂、三道と
 もに、撃ち破られましたは」

「逃げろというのか」

「たちまち火の手も街の四方に廻りましょう。また、こうなつては、辻々のお味方が、どうよく防ぎ戦いまして、あと半日か、今日じゆうのもの」

「では、どう逃げる？」

「時早くば、朝比奈の切通シから六浦越えむつらぎに出る一策もございましたが」

「ばかな」

と、高時は嘲わらつた。ひと事みたいにするのである。

「その方面は、寝返りの将、千葉貞胤が新田に付いて、金沢の爺の息子、武蔵守貞将を破り、はや金沢街道を塞ふさぎ止めたというではないか」

「は。……それゆえに、陸くわでは早や落ち行く道はただの一つもありません」

「それ見たことか。——足搔あがいたところで、どうにもなるまい」

「いや、さきに金沢ノ崇頭がおすすめ申し上げましたごとく、小壺ノ浦には、日ごろの御遊船やら大船八、九そをを武装させ、万一の用意につないでございします。……ひとまず、海上へお逃のがれあつて」

「くどく」

烈しく、高時は首を横に振つた。こんどは、ひと事みたいでなく、彼自身の自尊心がゆ

るさぬような青筋だった。

「円喜、一つことを、一体なんど繰返すのだ。長崎の息子、甥おいども、いずれもよく戦って、これへ返ってくる者が無いのに、年も八十近いそのほうが、いちばん死に懲おこかいて惑うているのは、みぐるしいぞ。はははは、そんなにここが恐いなら、そち一人で鬼界ヶ島へでも何処へでも落ちて行け」

「……………」

円喜は黙った。赤面して、うしろへ隠れた。

一族御家人、なお千余人は、大庭せましと、充満していたのである。上を行く煙は刻々と黒さを増し、一報の聞えるたび、悲痛な揺れが、外門げもんから内門を押し返していた。

すると、そこへ、

「尼公にこうのお使いがお見えなるぞ。そこを通せ。武者ども、開け」

と、大声がした。——尼公といえば、高時の生母、覚海尼のことではかない。その人からの急使だろうか。見れば妙齡なひとりの尼が、静かに、刀槍のあいだを平然と、高時の床几の前に案内されて来るのであった。

「おつ。春溪しゅんけい尼か」

高時は驚きの目をみはった。こんな修羅しゆらの戦場を、若い尼がどうしてただ一人で来られたかと、その姿へ、

「やれ、思わぬ客を見るものだ。誰たぞ、尼へ床几を与えよ。春溪尼、まずそれへかけろ。

……して、母の尼公には、いかがしておいでになるぞ」

と、たてつづけに訊ねた。

「いただきます」

尼は一礼して、与えられた床几へかけた。

彼女は、この陣中ときわするがのかみのりさだにいる常葉駿河守範貞の妹であった。また姉の常葉ノ局は、現に、

高時の側室でもある。

そして、その姉にもまさる美貌なのに、なぜか嫁ぐことも栄耀えいようもきらつて、高時の生母、

覚海夫人の許でその黒髪をおろしてしまった。

それには、姉、高時、彼女自身の恋。いろんなもつれの結果だと、噂は一時さまざまだ

つたが、しかし彼女の道心は堅固で、また尼公ちちようの寵ちやうもあつく、いつか四、五年は過ぎてい

た。

「太たい守しゆさま」

「春溪。とうとう最後が来たらしい。して、母ぎみのお文ふみか。おことばか」

「待たぬ日は早くまいりました。いつかはとは知りながら」

「いつかは……と。それは母公ぼこうが仰おほつしやつておいでたのか」

「はい。お口ぐせのように日頃から」

「むむ、思い出す。こんな日が来るぞよと、母の尼公は、わしの顔さえ見れば、きつう申した。それがうるさいので寄りつかなんだが……。今朝からはしきりと、幼い頃の、添い寝の母が思い出されてならなんだ」

「尼公さまも、ここ幾夜もお嘆きでございましたが、はや東慶寺の御門も危うくなりましたので、今暁、五山の僧衆に守られて、円覚寺の奥まった一院へお身をお移しなされました」

「そうか。……高時が行くところたちまちそこは兵火となる。……お会いは出来ぬが安心いたしました。長い間ご不孝をおかけしましたと、おつたえ申しあげてくれい」

「尼公さまからも、今生の後あとさき先などは、つかのまのこと。どうぞおとりみだしなく、北条九代の終りを、いさぎよく遊ばすようにと……」

「いさぎよく？」

「満つれば花にも落花みじんの日が呑みようなくまいります」

「いや、人間の子には業ごうがある。花のようにはまいらん。……だが言ってくれ。高時は高時の死に方をしよう。死にたくないと言き吠えて死ぬかもしれん」

「ホ、ホ、ホ、ホ。それもおよろしいかもしれませぬ」

彼女は笑った。

白い顔の一微笑に、まわりの甲かちゅう冑ゆうは、その血まなこをしゆんと醒さました。高時もまた、彼女の唇くちもとにつりこまれてか、胸そを反らして哄笑した。すべての眼には、二人の姿が、一対いつついの狂人みたいに怪しく見えた。

「尼前あませ」

「はい」

「大儀だった。はや帰れ。ここもあぶない」

「いいえ」と、彼女は顔を振った。「ご最期をお見とどけするまで、ここにおかせていただきます」

「なに」

高時は、耳を疑って。

「わしの最期を見とけるまで、そなた、ここの陣中におかせて欲しいと申すのか」

「はい。尼公さまのおいいつけでもございまする」

春溪尼は明晰に言った。あくまでも冷静である。

「おん母の尼公さまにも、ただ一つのお気がかりとみえ……あわれ吾子の崇鑑（高時の法名）が、今日、どのような最期をとげるやらと、しきりに、黒煙の空を見ては、身も世もなくお念じ遊ばしておられますゆえ」

「それで？」

「それで私が、こうお使いをうけたまわってまいりました。この目で、太守のご最期の様子を親しく拝してまいりましょうと」

「……………」

高時は黙った。しかし母の覚海尼公の心配と願いが、何にあるかは、やっと、それで得心がいった眉だった。

母の秋田氏、覚海夫人は、高時の父貞時が亡くなるとすぐ、仏国禅師の禅門に入り、また疎石和尚を鎌倉へ請じるなどのことにも熱心だったひとで、女性ながら五山の叢林でもおもきをなしている尼だった。

春溪尼は、そのひとの法弟でもあり、いわばまた侍女でもある。尼公の胸はたれよりもよく察している。

尼公の日ごろからの悩みといえ、ただ一つ、俗身のとき産んだ、高時という奇矯な子ひとりにあつた。だからその高時の世上の悪評も、生れながらの病弱も行状ぶりも、すべて母の自分のせいのように、蔭で世に詫びてきたのであつた。

いや世へだけでなく、子の高時へも、覚海夫人は、母として、子に詫びていた。——本来は、邪心もなく、生れついたままの性さがをただ振舞っているだけにすぎない者を——しいて執権の座にあがめて、あらゆる悪政は、みなその暗君のせいかのように、罪を高時ひとりにかぶせている中央や幕府のむごい機構が真に憎かつた。——で、どうかして、そのむごい機構の歯車から、わが子を救い出し、そして禅門にでも入れたいというのが彼女の多年な願望だつたわけである。

しかし、いまはもうどうしようもない。

このうちは、高時が、よくその天命を自覚して、最期をきれいに。北条九代の終りを、かぎらぬまでも、世の物笑いになつてくれぬように。——と、産みの子の瘋癲ふうてんには人いちばい苦勞をしてきた母だけに、その祈りも切だつたにちがいない。

そしておそらくは、春溪尼からの報告を聞いたのち、彼女自身も、母としてのとるべき道を、心しずかに選ぼうとしているのではなからうか。

とにかく、春溪尼が、高時の床几の前にいたのもほんの一瞬とときだった。しよせん、こまかい話などはしていられない。——黒煙はいよいよ濃く、一ノ鳥居の陣地も危うしと聞え、柳營の内も外も、いまはまったく叫喚るっぼの坩堝るっぼだった。

「これはいかぬ。ここは捨てよう。東勝寺へ退け。葛西かさいヶ谷やっの東勝寺へ移ろうぞ」

高時は、急に左右の将へ言つて、ただちにここの移動を命じはじめた。

移動には、何の危険もともなわなかった。葛西ヶ谷は、すぐ近くなのである。

柳營のひがし裏、小町門からあふれ出た人数は、東南の低い山ふところへ、熔岩の流れみだいにどろどろ移りはじめていた。

高時をつつむ、一門眷属けんぞくの甲冑かちゆうから、常葉ときわノ局やお妻さいの局や、また春溪尼の姿もそのなかに交じつて見える。そしてこのときまだ、武士千余人はいたはずであるが、はやくも混雑おまぎれに、

「いまを措おいては」

と、附近の藪へ物ノ具を脱ぎすて、身一つ、どこへともなく落ち去つた武士も少なく

はない。

ところがまた、その半面には、思いがけない者どもが、谷の奥から東勝寺の山門へむらがり出て来て、

「おおう、ご執権さま」

「御所さま」

と、高時の姿のまえへ、口々に何かさげびながら、身を投げだしてぬかずいた。数も何十人かわからない。

「や、や」

高時は、そのたくさんな顔の、濡れている頬を、一つ一つ拾って、なつかしそうに呼びかけた。

「そちは仏師の隆慶よな」

「は……。はい」

「また、鋳物師の良斎か」

「さ、さようで」

「大工の木曾ノ掾、蒔絵の遠江ノ介、塗師の源五郎。いや居るわ居るわ……鼓打ちの桐

作やら仮面打ちの道白までが……。して、なんじらも、家を焼かれて、このあたりの谷の穴へ逃げ隠れておったのか」

「ご執権さま！……」と、扇絵師の翁と、染革師の老職人が、声をひとつに、おなじことばを泣いて放った。

「な、なんとも、なさけないことに相なりました。申しあげようもございませぬ」

「やい、やい、泣くな」

高時は、どなった。

「おまえらの顔を見たら……おまえらが泣くのを見たら……どうしたことぞ、急にわしも泣きたくなつた。泣いていられる場合かわ。戦争なのだ、新田との合戦なのだ」

「わ、わかつておりまする」

「みんな遠くへ行け。とつとつ、退散しろ。ここにいては、あぶないぞ」

「いいえ、御所さま！」

また一人がさげんだ。

「この東勝寺は、北条泰時さま御草創の、御菩提所とうかがっておりまする」

「さよう。この高時には父祖代々の廟。それゆえ、おなじことならここを死に場所にせん

と、俄に、陣所を移してきたのだ。ここもたちまち敵のつつむところとなろう。はやく去れ」

「何の、鎌倉の滅亡は、てまえどもには、世の終りもおなじことでございます。父祖百年らい、稼業をつづけ、ご恩顧をうけ、わけて、ご当代には、なんぼう、お慈しみを受けたりやられませぬ。てまえどもが仕事に腕を磨きあい、仕事に生き効いを持ちえてきたのも、上に御所さまのような、ご庇護と理解のあるお方が、おいでたからでございます」

「むむ、おもしろかつたな鎌倉創りは。だが、氣狂いが火をつけ出した。もうお仕舞いだ」「くやしゅうございます。御所さまも世にいなくなり、この鎌倉も灰かと思えば、私どもも、もう生きるささえはございませぬ」

「何。死にたいと？」

高時は、かえって、きよんとした顔つきで、

「武士でもない仏師やら笛吹きどもが、死んでどうする！ 高時は死なねばならぬゆえ死ぬまでのこと。おまえらにはもう長の暇をくれたのだ。……去れ、邪魔くさい」

また、左右の武士へも、こう命じた。

「やい。そこらでベソベソ泣いておる遊芸人や工匠どもを追っ払え。そして寺門を堅め、

新田が来たら一ト泡ふかせろ」

声にヒビが入って、それがひどく非情に聞える。

でもなお、ここにいる諸職諸芸の雑人たちが、高時を慕う眼には変りもなかった。すがりつかんばかりですらある。その眼のなかを、高時は、雑草でも踏んで行くように、山門のうちへ通ってしまった。

そのあとで、武士はがなりつけていた。

「虫ケラども、ほかへ失せろ」

「ほかの谷の穴へ行け」

「ご執権を暗愚にして、今日の厄を招いたのも、多年、遊宴のお取巻きばかりを能としていた、きさまらのなせるわざだわ。この、うじ虫めら！」

日ごろ、高時が庇護を加え、つねに宴遊の相手としていたべつな人種とも見ていたので、武士たちは、その忿懣も槍の柄にこめ、彼らを蠅みたいに叩き追った。

しかし、こここのそんな狂暴も、虚空のけむりや、煮え沸くような大地をみれば、一トひらの、火炎の業にもおよばなかった。若宮小路にはまだ敵影を見ないから、飛び火にちがいはあるまいが、柳営の一角からさえ、すでに煙の渦を噴き、真ツ赤な舌が、めると、小御

所の棟木むなぎをなめている。

ほかの遠くは、いうまでもない。

北は雪之下、扇ヶ谷、南は、きのうからの前浜一向堂へんから佐々目ヶ谷やつ、塔ノ辻まで、炎を見ない所はなかった。山も焼け、海では兵船も焼けているのである。自然、熱風のつむじが捲き起つて、あらゆる地の物を枯葉のごとく宙へ奪い去つてゆくと、あとには一瞬、乾き切つた巨大な真空帯が生じ、およそ虫一匹の生物もないかのような死界に似たしじまが耳をツーンと通る。そしては海嘯つなみのような武者声^{しんがね}がまた、わああつと沸わく。

それも、乱打の陣しんがねや矢うなりは今朝から聞えず、ただ人間の吠えと叫喚ばかりだった。すでに合戦は、街なかの辻々に圧縮され、いずこも肉鬪の白兵戦となつてきた証拠であろう。そして寄手は、浜辺と山の手から、北条勢のごとくを、市街のなかへ追い込んで、鎌倉じゅうの殿舎でんしゃ、諸屋敷、寺院、町屋のすべてを薪木たきぎとし、四方から蒸し殺しに焼き亡ぼそうとするものらしい。

「ちいつ」

高時は、しばしば、床几をはなれて、東勝寺の広前を、檻おりの中みたい^おに歩いた。

「畜生」

青白い顔だった。その白さも、くらべる物のない白きである。眸はいよいよ鋭く、

「崇そうけん頭。……金沢の爺じい。爺はいないか」

と、急に、何か不安にかられ出したように、呼びたてた。

「太守。……崇頭はこれにおりまする」

「才。金沢の爺。あれを見い、あの炎を」

高時は、扇ヶ谷の方をさして。

「いま燃えさかっている所は、ちょうど二位ノ局（高時の愛妾）の家あたりではないか」

「まことに」

崇頭はその老眼をしばたたいて、あと何もいえなかつた。

「爺っ」

「は」

「ほかの局とちごうて、二位の手もとには、わしとの仲の幼い者がふたりいる」

「お案じなされますな。御家人中でも、日ごろ厚くお目をかけ給うた五ごだい大院いんノ宗むね繁しげが、お救い出しに、まいったはずでございますれば」

「いやその五大院ひとりでは、万まんじゆ寿じゆ、亀かめ寿じゆの幼ふたりい兄弟を、しよせん一時に助け出すこ

とはなるまい。兄の万寿はよそへ落したろうが、弟の亀寿は、たれの手にまかせたことか」
「噂では、ご舎弟泰家やすいえさまの郎党、諏訪三郎すわと申すものが、まだ火のまわらぬうち、亀寿さまを負うて、鶴ヶ岡の峰ふかく逃げ入ったとのございますか」

「たしかか。それは」

念をおされると、金沢の崇顕そうけんは、それにも、あとのことばが出なかつた。

覚海尼公が、子の高時を、どこかで見まもっているように、高時も二兎の父として、さつきからここで胸を焦やかれていたのらしい。

だが高時も、どうにもならない現状は知っている。煩惱ぼんのうにすぎないものとは分っている。ぬかずにいる爺をすてて、彼はもう荒々と歩いてきた。また、くるりと、こつちへ引つ返していた。その足もとを、火のチリを交ぜた熱風が、いくたびとなく掃いて行き、谷やつのふところは、夜のような煙にとじこめられ、一瞬、東勝寺堂塔の瑤瑤ようらくが、遠くの炎に、チカと光った。

「まつ赤だな、今日の太陽は」

高時は、上を見た。

たえず何か言っていないと、おそろしい寂寥に体のうちを吹き抜かれる。そしてたまらな

い淋しさが襲いかかり、自分を虚空へ攫ッて行きそうにでも思われるふうだった。

「見ろ……」

ふと、あたりの沈黙の陣を見て言った。堂の下、山門の蔭、広前いちめん、高時と共に在る一族御家人の影は、このかなしい主君を繞つて、みな岩のように固く黙っていた。

「あの不吉な色の日輪を見る。この業火では蝶も鳥も生きてはいられん。こんな後で、何が生き残るのだ。生き残って何の愉しみがあるというのだ。ろくな世が来るはずはない」

たれへともなく罵ッていたが。

「秋田の延明。城ノ介延明はいるか」

「はっ。おりまする」

「刈田式部は」

「はっ。篤時はここに」

「伊具は。小町ノ中務は」

「いずれも、これにひかえております」

「武蔵ノ左近時名もいるな」

「はいっ」

「総勢どれほど？」

「お心づよくおぼし召されませ。なお千人ほどは、おそば離れずこれにおりますれば」

—— 事實は、もうそんな大勢はいなかった。逃げたい者なら、谷やっから峰やっづたいに、どこへでも逃げ落ちられぬことはない。

一片の義にとらわれ、主従骨肉のきずなしにしばらくられて、高時と共にいた者でも、ふツと、ここで姿を紛まぎらせた武士もずいぶん多かつたことだろう。当然、柳營を出たときの、三分ノ一以下に減っている。

だが、武蔵ノ左近時名が、

「まだ、千ほどは、君のおそばにおりまする」

と答えたのは、高時の心を少しでも、気丈にさせようとする思いやりにほかならなかつた。それを高時も、覚つてはいたろうが、

「むむ！」と、満足そうに。そして、その武蔵ノ時名へ、

「時名。寺中には、蓄たくわえの酒もあるう。ありつたけの酒さかがめ甕めをここへ運び出させろ」
と、いいつけた。

歴代の菩提寺である。客院用の酒壺はもちろん庫裡くりに充ちていよう。高時もかつての春

には、ここの山門で小袖幕を張らせ、船載はくさいの毛氈もうせんをのべて、花見の宴に遊び暮らしたこともある。——そんな日の幻影を、ふといま、思い出したことでもあるのか。

やがて、兵たちが、数十箇の酒がめをそれへ運んできて並べると、

「これは壯観だ。さすがは東勝寺の庫裡くらり」

と、唇をゆがめて笑った。そしてみずから場所をえらんで、地に楯たてを敷かせ、

「みんなここへ寄れ。鎌倉の終りもほぼ見とどけた。このうえは、高時の身の処置いたす。高時がさいごを、皆して、見とどけておくりやれ」

と、言つて胡坐あぐらした。

一族の面々は、かえつて首をたれてしまった。驕慢な瘋癲ふうてんの君が、いまは神妙な、いかにも素直な君に見えたからだつた。

「……さては、お覚悟よ」と、諸将はみな胸をうたれ、仰ぐにたえない容子だつた。とまれ、この期ごまで高時のそばに残っていた人々は、少なくとも高時にたいして、なお臣節を捨てず、理解か同情か、何かは寄せていた者にちがいない。とつぜん、涙を拭く者が多かつた。すると、

「まず、太守たいしゆさまから」

と、杯をささげて、彼の前へ銚子ちようしを持って進んだ者がある。

春溪尼しゆんけいにであった。

常葉ノ局、むつらの御方、お妻さいノ局なども、うしろへ来ていた。

高時は見て。

「おう、みなまだいたのか。いかに悪鬼羅刹らせつの勢せいでも、女子供までは殺すまいに。……そうだ、そなたたちは、高時のさいごを見たら、東勝寺のおくに姿をひそめて、後日、新田へ命乞いして出るがいい」

「いいえ」と彼女らは、口を揃えて。また咽むせぶとも叫ぶともつかない声で——「お供をひとつにいたします。世に生き残る心はさらさらございませぬ」

「では。そなたたちも」

「はい」

「わしに殉じて死にたいと望むのか。……はての。この高時が、そんな倅せ者とは思わなんだ。死出の道、賑やかなことではある。さあ、みなも飲め、あるかぎり酒がめ相手に、討死しよう。生なまじ雑兵の手にかからんよりは、酒を相手に、杯を手に」

日は暮れかけ……。

しかも暮れ迷う夕の黒白あいろがいつまで長い。

終日の黒けむりだ。日輪の所在もよくわからない一日だった。ただ晩涼ばんりょうの風がそろそろ葛西かさいヶ谷やつにも冷たくなり出していたのである。

高時はすでに、斗酒をほしていた。

青白くいよいよ冴えた顔を、きつと、虚空こくうへふりあげて。

「火の雨だな。月雪花、この世の物、さまざま見たが、火の雨とは、思わぬ景色を見るものだ。あわれ、馬鹿者」

彼は次第に、ふんまん、やるかたない語気を、たれへともなく、吐きちらしていた。

すでに塔ノ辻、大町、若宮小路は、炎の大河だった。

なかでも巨大な紅蓮ぐれんは、柳營な一帯を舐め狂ッている風火で、そこを焼き尽くせば、炎は滑なめり川がわもこえて、ここ東勝寺の山門へ移ってくるしか火魔の目標となる物はない。

「いわれなくても、わしは自分を知っていた。高時は伶俐な人間では決してない。ましてや、北条氏中興のお人、泰時公やすときこう、また最明寺時頼公さいみょうじときよりこう。そんなお方にくらべられたら、途方もない、不肖な子孫ではあつたらうよ。……だが聞け。一族の衆」

と、高時は、その大杯を、下へ置くこともなく。

「この火の雨を避けたいばかりに、わしは朝廷へは、できるだけ譲つて来たぞ。諸大名にも、権力をかぎすなく、諸民にも、仲よく暮らせと祈つて来た。人のためにではない、わしのためにだ。何よりも高時の念願は、せつかく、北条九代の裔えいに生れたのだから、世の人々と共に世を愉しみ、与えられた身の生涯を一代おもしろく送りたかつた……。そこが暗君か。はははは、何せいこの高時、凡君にはちがいがなかつた」

「た、太守ツ」

「誰だつ。わめいたやつは」

「摂津せつノ宮内高親くないたかちかでございます。ただいま、てまえのそばで、明石あかしノ入道忍阿にんあが、太守の死出のさきがけ仕ると申しながら、腹搔ツ切つて相果てましてござりまする」

「さても気短な。忍阿はわしの乳母の良人。もう死んで行つたかや……。まだ酒甕さかがめの酒は残つておるに。他の面々は死に急ぐなよ。飲み尽くそうぞ。飲めや、各」

「太守！」

「また誰か、腹切つたか」

「いや、ただいま戦場のまツただ中から、長崎次郎高重が、喘あえぎあえぎ、山門まで馳はせも

どつてまいりました」

「や。約束をたがえず、高重がこれへ帰つて来たか。今朝、敵中へ馳せ入るまえに、どんなことになりましたしようと、もいちど帰つて、おそばで一しよに相果てますると、約束して去つたやつだ。すぐ連れて来い」

「ただ今、手当を加えております」

「そんな深傷か」

「全身の矢傷刀傷です」

「高重は、円喜の孫。……円喜、早よう行つて見てやれ」

ほどなく、その高重は、人々に抱きささえられて来た。しかし、高時の前では、しつかりしていた。「敵将義貞の首を、お目にかけるつもりでいたのに、事成らず、逸いつしました」と、しきりに残念がるのもあった。

醜いもの、美しいもの。

また、裏切りだの、壮烈なる昇華しょうかだの。

亡滅の一瞬には、人さまざまな生命の持ち方とその閃光をチリヂリに見せたが、中でも長崎次郎高重は、鎌倉最後の日をかざった一条の若い虹にじだったといつてよい。

高重は、武蔵野合戦の当初から、一軍の将として、戦場へ出ていたが、さんざんに負けて、

「面目もありませぬ」

と、いちどは高時の前に、ひきあげて来た。

彼は一族の長老円喜の孫で、少年の日から小姓として仕え、高時とは主従の半面、いわば竹馬ちくばの友でもあった。

だから、今朝の出勢にも、

「かならず、もいちど帰ってまいります。そして最後の最後には、きっと御一しよに死にましよう」

と、高時へ約し、高時もまた、

「きつと帰って来いよ。それまでは死なずにいる」

と、ことばをつがえたことだった。

その高重には、今日、深く期すところがあつたので、どこの防禦陣地にも付かず、日ごろ教えをうけていた崇寿寺そうじゆじの南山和尚をたずねて別れをつげ、決死の部下、百五十騎に、みな笠かさ印しるしを取り除けさせ、山寄りの間道から、敵の中軍へまぎれ込んで行つたのだっ

た。そして、

「目ざすは、義貞一人」

と、不敵な意図のもとに、敵の大将旗が見える辺まで近づいたが、

「や、旗も差さず、笠印もない一隊の兵が来る？」

新田の部将、由良新左衛門に怪しまれ、

「来るは、何者ぞ」

と、はばめられてしまった。

高重は、これまでと思い、

「忘恩の賊、新田小太郎が首をとりにつたり。これは高時公の侍臣、円喜入道が孫、長

崎次郎っ」

と、高名たかなのりを合図に、むらがる敵中へ躍りこんだ。

そして、新田の旗本、横山太郎を討ち、庄ノ三郎為久の首をもあげた。もちろん彼自身も、部下あらましを失ったし、身には満身のいたでを負ったが、一時敵の核心部を大混乱に落して、義貞のきもを寒うさせた。

しかし高時との約束もある。からくも血路を切りひらき、葛西かさいヶ谷やつへいま引きあげて来

たものだった。

「次郎、よく帰った」

と、高時はうれしそうだった。いまは臣下でもない。一人の幼友達と見るような眼で、
「その深傷ふかででは、酒はのめまいが、杯だけを持って。新右衛門、兄の手へ持たせてやれ」

と、小姓の長崎新右衛門をふりむいて言った。新右は十五歳、次郎高重の弟なのである。
「おさかずき……、ありがたく」と、高重は杯を胸に抱きしめ。

「……いただきます」と、しいて笑った。笑いつつ刻々にせまる死がその若い目もとを青
ぐろくしかけていた。

「高重、高重。もすこしこら忪えろ。今生の名残りに、高時がさかな着してみせる。新右衛門、わし
のなぎなた薙刀をよこせ」

高時はそれを持って、得意の舞を見せようとするのらしい。すっと起って、足拍子あしびょうしを
踏み出しながら。「みなもうた謡え。高時と一しよに謡え」と、あたりの諸将へ合唱をうなが
した。

年へたる

鶴ヶ岡への

やなぎ原

高時は舞いながら謡い出した。

薙刀なぎなたを手に。

茂るもくるし

青のみだるる……

そこでまた、舞をやめ、彼はあたりへ、さいそくした。

「やい、みな者、なぜ声を合わせて、謡わぬか。高時一人ではおもしろくない。一同唱和せい、一同唱和せいっ」

しかし、無理だった。虚空こくうには火のつばさが飛び、火のチリは雨とここへも降りそいでくる。——すぐ丘の下、滑なめり川のむこうには、たそがれの黒白あいろも分かず、たくさん

兵が、ひしめき合い、呶号うしおの潮を逆巻さかまいているのだった。

すべてみな敵の新田勢ばかりにちがいない。東勝寺の大外おおそとにある総門ついでの築土ついでもどうやらあぶなそうなのだ。それへたいして武者吠えなら振るい出せもしようが、謡などは、歌の詞ことばも心の上に思い出しようのないこの人々なのである。

むしろ彼らは、ひそかに高時を心のうちで憐あわれんだ。また羨ましくもあつた。

自分らにはまだ失せきれない正気がある。だが「高時公には、早や全く、ご狂乱よな」と、嘆き合うらしい態だった。

すると、春溪尼がそれへすすんで言った。

「太守。舞をおすすめ遊ばしませ。尼が相拍子をつかまつりまししょうほかに」

「おう春溪、そなたが相拍子いたすとか。満足満足……」

なぜ騒ぐ

やなぎの糸は……

と、高時はすぐつづけ、

世のかげが酷いゆゑと

鎌倉の鳥は言ふよ

鳥に似たる天狗ども

谷の穴にや巢食ふらむ

夜々七郷の空に出て

華雲殿の棟木をゆすり

わが枕べに笑ひどよめく……

薙刀なぎなたの光芒を描きながら、身をかるがろと躍らして舞う。自身を天狗てんぐに擬なして、舞と薙刀の妙を、妖しいばかり描き尽くす。

これは、ひと頃、鎌倉の辻で、童わらべうた謡うたにまで流行つた「天王寺の妖霊星……」を、誰かが改作したものらしく、高時は思うこと、言いたいことを、即興的に加えて、酒間、酔うとよく、謡い踊っていたものだった。

火の雨、鬨とぎの声、めくら撃ちの矢かぜ。——それなのに、ここの真つ暗な無反応の真空帯。

……敵も、狐疑こぎしてか、急には近づかず、ただ遠巻きの潮うしおを、また山鳴りを、劔こたまにしていた。

……と。突然。

高時の舞に合わせて、鼓を打つ者があつた。また謡を唱和し、鈴を振り、銅拍子どびょうしを鳴らす大勢の者があつた。

いつのまにか、東勝寺の楽がく殿でんの楽器を持ってきて、高時の陣座のうしろに、一卜屯ひたむろを作っていた諸職の雑人ぞうにん——あの笛師、太鼓打ち、仏師、鑄物師いものし、塗師ぬし、仮面打ちめん、染革師たくみなどの工匠や遊芸人たちだった。

「やあ、おのれらは、まだそこにいたのか」

「ご執権さまには、淋しいのがお嫌い。また常にお孤独ひとりがお嫌いでした。みなして、さいごのお相手を勤めさせていただこうぞと、申し合せて、これにひかえておりました」

「うれしいぞ。おまえらまでが。そう思うてくれる高時は日本一の倅せ者。さらば、もひとつ舞おう。その間は、敵も寄るまい」

一瞬……。

新田勢は立ち恟すくみ、

「や？ あれは？」

耳をすまして怪しみ合った。

執権以下が立てこもった北条勢の最後のとりでとそこを見て、その遠巻きをきわめて慎重に押しちぢめていた山門の内から、突如、大勢の謡うたごえ声こゑが、しかも銅拍子どびょうしや鼓の音ま
で交えて聞え出したのである。

「はてなあ？」

「計略か」

「そうだ、敵は何か策をかまえているのかもしれない」

「しばらく、様子を見ろ。放ッておいても、早や東勝寺の内も火だ。敵は、蒸し殺しになるだけのもの」

たしかに、東勝寺五大堂の上にそびえている五重ノ塔の三層目あたりにも、ピラと、真つ赤な火焰がひらめいている。

そのほか、木々にすら火の火花がチラめき、伽藍の藁、谷の奥まで、暗さと煙に蒸されながら、その底にはまだ、たくさんな生命のうめきと、異様な人影の息吹きが窺われるだけのものだった。

「息つぎに、ひとつ、飲もう。……新右衛門、杯を」

高時は、薙刀を肩に立てて、美味そうにそれを飲みほし、また謡った、また舞った。それが彼の最大な憤りを世へむかつてする反抗かのようだった。

天狗、天狗車

人の世の人を嫌つて

天狗が廻す

此世車

修羅を行く輪は業の焰

乗るは大天狗

引くは木ツ葉天狗

押すは何天狗

人の心の谷に棲む諸
《もろもろ》天狗

みにくい外道

美しい夜叉

この鎌倉にも百八の谷あり

然るがゆゑ、谷の上に

鎌倉の一法師高時

誓願の輪奂をきづき

七宝の精舎を建て

此世車には

人を乗せ人に引かしめ

春は春をたのしみ

秋は秋を……

「いや、だめだった。わしは暗君。わしの願望などは、たわけた痴人の夢だったぞ。わはははは」

高時はここで、息も疲れたのか、また薙刀の柄を肩へ立てて杖としながら、

「世の中、謡のようには参らん。さような訓えにはなつたことか。さらば高時もあまんじて地獄に落ち、世の畜生道を、しばし泉下せんかから見物するか。……」

と、笑つたが、そのとき、どこか遠くの方で、天狗の声でもない、人間の吠えでもない、いんいんと、赤い夜空にこもるようなものを聞いて、彼は俄に、ぶるツと、身ぶるいして、こう叫んだ。

「あつ、うかと、忘れていたわ！ 新右衛門」

「え？ 何事を」

「畜生たちをだ。あわれ、ほんとの畜生たちをつい忘れておつた。この有様では、鳥合ヶ原の犬小屋も火の雨をまぬがれえまい。かしこの犬小屋には、高時を慰めてくれた高時の愛犬何百匹が、檻おりをも出られず、餌のくれてもなく、哭なき悲しんでいることだろう。犬小屋の錠じょうを破つて、犬どもをみな放してやれ。新右衛門、すぐ行って、放してやれ」

それを言い終ると、高時は黄金づくりの小刀を解いて、楯たての死の座に、あぐらをくんだ。彼の覚悟の容子に。

……さては早や。

と人々はとむねをつかれた。

意外でもあつた。

万一、狂きょうそう噪そうして、どうしても御自身で処決のない場合には、臣下の刃でお首を打つ

もまたやむをえずと、自分の刀へ、ひそかに、いきかせていた側臣もあつたのだ。

が今、その高時には、何ら狂噪の風もない。自己の運命に素直すぎるほど素直な姿で、

「春溪尼……」

と、呼び、

「わしの前へ」

と、さしまねいていた。よろい下着となつた半身の白さもいとど澄明なものに見えて、

彼らは逆に、自分らの死出の立ち遅れに、そぞろ慌てた。

「太守。おこころ支度ができましたか」

言つたのは、春溪尼。

その、さり気なさは、まるで遊山ゆうざんの誘いかのようで、手くびの数珠ずずが、美しい指に懸け直されただけでしかない。

「尼前あまぜ……。そこにいて、よう見とどけておくりやれ」

すぐ、手の短刀は鞘さやを捨てた。しかし、そのとき高時の眼は発作的に、あらぬ方を見て光った。……わああつという新田勢の潮の声が体を吹き抜け、ふと彼の病質と肉の薄い兎耳をぴんと尖がらせたのだった。

「来たか！ 来たのか？」

「いえ」

と春溪尼は、一ばい静かに。

「ごゆるりと遊ばしませ。敵を山門内に見るには、まだ間がございましょう。……才才死出の道、お淋しそうな。むつらの御方おんかた、お妻のお局、常葉の君も、みな私ならに倣ならって、太守のおそばにいてさしあげたがよい」

花の輪が、高時をかこんだ。彼女らはそれぞれ泣き乱してはいたが、この期ごとなると、一人も泣いていなかった。春溪尼の唇から洩れる名号みょうごうの称とえに和しながらみな掌てを合あわせた。

するとその中のまだ十六、七にすぎぬ百合殿の小女房が「皆さま、おさきに！」と、まっ先に刃でのどを突いて俯つ伏した。その鮮紅に急かれて、高時もがくと頸を落し、そして脇腹の短刀を引き廻しながら、

「尼前……。これでいいか。高時、こういたしましたと、母御前へ、おつたえしてくれよ。よう、おわびしてくれよ」

と、かすかな息で言った。

たちどころに、春溪尼のまわりは、すべて紅になつた。高時に殉じて次々に自害して行った局たちは血の池に咲いた睡蓮みたいに、血のなかに浮いた。

そのほか一門三十四人。譜代の側臣四十六人。すべて北条氏の門葉二百八十三人、みな差し違えたり、腹を切つた。

すでに、葛西ヶ谷いちめんは、冷たいような猛火だつた。極熱の炎が燃え極まると、逆に、しいんと冷寂な「無」の世界が降りて来る――。

東勝寺の八大堂は、二日二た晩、燃えつづけた。あとには、八百七十余体の死骸があつた。死なずともよい工匠たちの死体も中には見られたとか。――総じて、鎌倉中での死者は、六千余人にのぼつたという。

また。それから二日後。

五山の一つ、円覚えんがくの一院では、高時の生母覚海尼公と、法弟の春溪尼とが、五月の朝ほととぎすをよそに、姿を並べて自害していた。

いぬがみつ
犬神憑いぬがみつき

鎌倉幕府はここに亡んだ。

炎々数日らしいの湘南の兵火は、昨日までのあらゆる権力のあとを焼きつくして、時の空に、

夢

ただそれしか思わせない余燼よじんのけむりを描いていた。そして新たな“時の人”新田義貞の名が、焦土鎌倉を産うぶすな土として、はや次代の人心に、すぐ大きく映うつりはじめている——。だが、一夜に百五十年の武家機構とその経営の府が根こそぎ崩れ去ってみると、こことて、ただの関東の一海浜で、しかもあわれな瓦礫がれきの町にすぎない。

時の人。それは誰か。果たして自分か。義貞といえ、まだまだ、驕おごってはいられなかつ

た。

五月二十三日である。それは鎌倉占領のすぐあくる日だった。彼は長井六郎、大和田小四郎の二名を選んで、

「今日、立て」

とばかり、西への使いに急がせた。

伯耆船上山の行在所——すなわち後醍醐のみかどのもとへ——ここの大戦捷を、上奏するための早馬だった。

ところが。偶然といえようか。

もちろんまだ、後醍醐には、鎌倉がほろんだなどのことは、ご存知もなかったが、すでに六波羅陥落の報につづき、千早城もまた大捷と聞えたので、同じ五月二十三日、還幸の沙汰を布令だされ、晴れの都門凱旋の途についておられたのである。——そして、その龍駕を待つ都には、高氏がいた。

足利殿

この名もまた、いまや洛内では、義貞以上に、時運の波に乗ってきた「時の人」のひとりであった。

しかし高氏自身は今、そんな誇りどころな立場ではない。——洛内の治安から、そして西の龍駕へも、東の義貞へも、心くぼりの多さは、多忙というもおろかなほどだ。まさに、ぼうちゆう忙 中の人といってよい。旧六波羅探題のあとに住んで、みずからとま称えてそこを、

六波羅奉行

となし、また、わが名による「御みぎ教書ようしよ」を発して、はやくも独自の政治的手腕のはしを見せていたが、なおかつ、東国の空をのぞんでは、

「さて、どうしているぞ？ どうなることか？」

と、早馬のひづめに、胸の明け暮れ、かきたてられていたことにちがいない。

鎌倉には、妻の登子とっこを残していた。また、新田軍のうちには、嫡ちやくなん男の千寿王を、あえて参陣させてある。

——で彼は、先に、千寿王の鎌倉攻め参加が首尾よくおこなわれたと聞くやいな、家臣細川かすうじ和氏に、旨をふくませて、

「もうここはよい。ここは一トかたづきした。おぬしは急遽、鎌倉へくだって行き、千寿王を補佐ほさしてくれい」

と、命じていた。

乳にゆうしゆう 臭くさのきみの補佐と聞けば、主眼は政治的な意味にあることはあらためて訊くまでもない。細川和氏は、そのてん、高氏が深い意中のものを託すに足る思慮のある人柄だった。和氏は、弟の頼春、師もろし氏と共に、兵三百をひきつれ、即日、海道を下って行った。

美濃。尾張。天龍の渡し……。

海道もひがしへ下くだるほど、途々、旅人の口々にも、

「東国はたいへんだぞよ」

「わけて鎌倉は」

と、行くところで、新田勢と幕軍との耳新しい戦況を聞く。

細川和氏の一勢は、そんな風説のあらしのうちを、急ぎに急いだ。小夜さよの中山越えにかかった日である、一人の旅人は、ついに鎌倉も陥おちたと言った。

その旅人は、和氏の前でこう話した。

「……てまえは、酒匂さかわの宿でその騒ぎを知りました。あくる日、箱根路へかかって、ひがしを眺めますと、なるほど、鎌倉の方は、いちめん墨のようで、江ノ島の影も、相模の海も、見えたものではございませぬ。……箱根権現の僧や神人らも、高い所へ出て、さて北

条殿が亡んだら、次の世はどういうことになるのかと、みな言い合っております」

和氏は、それでほっとした。

加勢に駈けつけるわけではない。——千寿王のきみが、ご無事であればいいのである。

「これでまず、幼君のご無事なことは確かだが、もう一ト方ひの御台所かた みだいどころ（登子とうこ）のご安否は、いかがなものか？」

こうして、駿河の浮島ヶ原（沼津附近）まで来た日だった。——彼方から十騎ほどな旅装の武士が道をいそいで来る。——細川の隊とスレちがいかけた。すると、中の二人が、こなたの兵の笠かさ印しるしを見て、

「足利殿のお身内か」

と、訊いていた。

「されば」

和氏の弟、頼春が列を出て。

「これは仰せをうけて鎌倉へくだる細川一族の者でおぎる。して、あなたがたは」
「や」

と、二人は馬を降りた。

「われらは、新田殿の家臣にて、鎌倉大捷の吉報を、みかどへお聞えに上ぐべく、上奏の御書を帯たいして西へ急ぐ、長井六郎、大和田小四郎と申す者にござりまする」

「それはまた、はからずも……。兄あにじや者、何ぞお訊ねなされませぬか」

そう聞いて、和氏も何かと、鎌倉入りの実状を二人へただした。長井と大和田とは、知るかぎりをも、こまごまと話して、さて、先を急ぎますゆえ——と、別れぎわに。

「ここは浮島ヶ原、このあたりで、足利殿のご庶しよし子、竹若ぎみが、無残にも北条方の武士の手で殺されました。……千寿王どのが鎌倉府内から逃げ出られたあの直後にです。——そのことは、ご存知か」

二使は、供の郎党をつれてすぐ駈け去った。よほど急ぐらしい様子だった。

和氏たちも、やがて列を進め出していた。

主君の一子、竹若ぎみの横死おうしは聞いていなくもない。だが、そのいたましい血汐を泥土にした場所がこの辺とはいま知ったのである。と、俄に、蕭しやう殺さつたる風の傷みに胸を吹かれ、思わず口に念仏がついて出た。——またさらには、義貞の鎌倉入りに、足利家もまた、無傷ではなかったのだと、はつきり思う。

かくて和氏が、鎌倉へ着き、そして義貞と会ったのは、瓦礫がれきの余燼よじんも、やや冷さめていた

戦後六日目のことだった。

「めでたく、鎌倉入りの御本懐をとげられて、大慶至極にぞんじます。——在京中の主人高氏殿からも、右、くれぐれもとおことばで。……ついては、お祝の辞を兼ねか今日こんにちこれへ罷りくだりました私は、細川和氏と申す者。以後なにとぞ、ご昵懇じつこんを賜わりますように」

義貞とは、初めての面識だ。

これが和氏の、彼への最初のあいさつだった。

「ほ。三州足利党の一家にて、音に聞ゆる細川殿とは、御辺ごへんであつたか。お名は前々から聞いておる」

と、義貞は如才じよさいなく。

「——天下はいつか宮方に歸きすべき機運となつていたのだろ、望外な武運に会い、時も措かず、北条一統、余類よるいの輩ともまで、ことごとく義貞が一手にて、討ちほろぼしおわつた。……されば足利殿にも、ずいぶん、よろこんでおくりやるに相違ない」

「わが足利家は都の戦後を。新田殿にはここ鎌倉を。——これからは車の両輪、わだちを

揃えて、天下の処理にあたるのだと、主人も申しおりました。……上に英邁なみかどをいただき、新しい世づくりのためにだ、と」

「いうまでもない。両家は仲よくしよう。何事も申しあわせて」

「そのため、千寿王さまの補佐として、不肖、当地へ任せられてまいりました。諸事、よろしくおさしずを仰ぎまする」

「そうだ。さつそく、若御料をこれへ呼んで進せよう。……そのあいだ、まず一献まいるがよい。これは鶴ヶ岡の神酒、きのう、全軍の将士へ勝ち祝いとして酌み頒けたものよ。まず一杯まいれ」

と、義貞は上々の機嫌で、侍臣をして、さつそくに、杯台をそこにおかせる。

ここは、彼の仮館、いや仮陣所とっていい。

鎌倉じゆう、八割は焼け野原なので、宿所割りもなかなかつかず、一部の将士はまだ焦土に野陣している有様だから、義貞すらも住居に困った。——で、鶴ヶ岡の鶯谷一帯にわたる神官や僧侶の邸宅をたちのかせて、当座の本営としていたのだった。

また。

足利若御料（千寿王）の宿所には、近くの八正寺ヶ谷の別当屋敷をあてていた。——

義貞の家臣は駈けて、まもなく、千寿王をこれへ迎えてきた。

「ああ、おつつがなくて」

と和氏は、その姿を拝してから、義貞へむかつて言った。

「共に、鎌倉入りの御陣をおつとめ遊ばしたお蔭で、かく御無事なるをえましたが、一方、わが足利家においては、竹若君たけわかぎみと申される庶子しよしの御長男を亡くなされました。……ご落命らくめいの厄やくに会った浮島ヶ原は、戦場ではなかつたにせよ、いわばご戦死も同様なこのたびの犠え牲。そのことのみが、家臣としても、ふかく胸いたまれてなりませぬ」

「むむ、まことに」

義貞もそれには、共に眉を悼いたんでみせた。

しかし、和氏の狙いは違う。

さきに義貞が、鎌倉攻略の功を「義貞が一手にて」と、ふと誇ったことばにたいし、思慮ふかい彼は、そのときは「いや」とも逆らわず、ただここで、足利家もまた大きな犠牲をこの戦いに払っていることを、やんわり、言外にほのめかしていたものだった。

戦いは戦いだけで終らない。

敵を消し去ると、すぐまた、味方同士、味方内の仮想敵を見つけ出す。それは政略とい

う互いの腹の中で始まる。

千寿王を前において。

足利——新田

と合併してなされる諸般の打合せが、義貞と和氏とのあいだで、酒間しゅかん、仲よくいろいろと語られていた。が、そのうちに。

「はははは」と、義貞は笑いだけで。「……このような小むずかしい談合、若御料わかごりょう

(千寿王)にはご退屈らしいの。細川どの。あとは後日としよう」

「これはしたり！ 小さい欠伸あくびをしておいでられる。なにぶんにも、おいとけなき君、おゆるしを」

「なんの、なんの。むりはない」

「やがて朝廷のおさしずも待たねばならず、都との時務の往来にも、一致を欠いてはなりません。この後は、和氏もしばしばここへ伺候しこういたしますれば」

「ウむ。そうありたいもの。……さしずめまた若御料のお住居も、こう御家来がふえては、いまの別当房では、どうにもなるまい。それから決めよう。誰ぞた、義助をよんでまいれ」

その脇屋義助が見えると。

「義助か。……どこぞに、焼け残っておるよい館やかたはあるまいかの」
 「さあて？」

と、義助はそこへ焼け跡の凶面をひろげた。そして。

「ごらんのごとく、武家屋敷も軒なみ焼け亡うせ、雪之下、塔ノ辻、大町、佐介さすけ、すべて茫ぼうたる焦土でございます。たまたま残った門や家には、はや諸国の武士が混み入っておりますし」

「大蔵おおくらの、かつての足利殿の屋敷はどうなった？」

「もとより灰燼かいじんです」

「二階堂の、道誉が屋敷跡は」

「焼けました」

「では、寺よりないな」

「その寺院とてあらまは瓦礫がれきとなり果て、火をまぬがれた円覚、建長寺などへは、五山の僧が、ひしと詰まって、兵馬を入れる余地はございませぬ」

「しからば、何としたものか」

「いかがでしょう。——扇ヶ谷おうぎやつの、元、上杉憲房うえすぎのりかさどのがおられた家は」

「扇ヶ谷は、ここより地の小高い場所になるな」

義貞は考える。

自分の館のある所より、足利若御料の邸が、高くにあるのはまずいらしい。

しかしその附近は、高時の愛妾二位ノ局の家も焼け、また上杉の館といつても、半焼け同様なすがたと聞くと、

「ぜひもない。ひとまず、そこを修理して、お凌しのぎしてもらおうか」

と、和氏へ諮はかつた。

宿所の結構などはいま問題でない。和氏は異議なくそこへ移るときめた。そこで千寿王を奉じて、その日のうちに、足利方は扇ヶ谷のほうへ移った。

だがこのさい、義貞はふと、安からぬものを感じだした。

「若御料は、扇ヶ谷へ」

と、つたえ合うやいな、別当房にいた人数はもとより、焼けあとに野屯のだむろしていた諸国の勢の大半が、みな扇ヶ谷へ従ついて行ってしまったのだ。という報を、その晩、弟の義助から聞いたのである。義助はまた、こうも言った。

「……ちと、ご戒意かいいを要しましょう。どうも武士どもの心は、二つに割れているように見

えまする」

どうしてなのか。

足利若御料

なる者の小さいはずな存在が、ここでは時の人新田義貞の名にも均きんこう衡するほどな戦後
人気を、俄に武士間に醸かもし出している。

高氏の意をおびて、その幼主の補佐にくだつて来た細川すらも、

「はて？」

と、小首をかしげたほどだった。

ともあれ、扇ヶ谷へは、招かずして、諸家の家の子郎党が移ってしまった。彼らは即日、
附近の山林を伐ばつさいして、丸木小屋をつくり、長屋をこしらえ、そして元々、こんどの鎌
倉参戦は、新田殿のためにあらず、足利殿のために働いたものであると、口にも出して、
千寿王一辺倒にかたむいて臣事しはじめるふうなのだ。

「これはちと急変すぎる。新田殿の嫉しっし視のほども恐ろしい。そちたちは、どうこれを観み
？」

和氏は、たずねた。

弟の頼春、師もろ氏のふたりを前においてである。

「わかりませんな。諸国の武士どもが、何を考えていることやら」

「もつとも、われらが六波羅を出てくる折、殿（高氏）が申された一言はある」

「どういうことでした」

「義貞について、鎌倉入りした武士どもも、味気ない鎌倉には安心しておちつきえず、その面おもても心も、いずれは皆、西向きに向けるだろう。しかしそのあいだただ、千寿王の名において、大きな過ちを犯させるな、と」

「ははあ、ではこんなことも、遠地におわしながら、お見とおしなのでございましょうか」
「……と、窺うかがわれる。……人とはちがう怖ろしい眼をお持ちの殿だ。その眼はいつも遠くを見ておいでられる。だからわたしたちは、ここにあつても下手な小才や業わざを振舞つてはならんのだ」

「こころえておきます」

「特に、部下の喧嘩に気をつけい。新田殿と張り合ったりせぬように」

「いやもう、喧嘩沙汰は、焼け残りの辻々で、毎日のようだと聞いておりまする」

「それはいかな。軍令を出しておけ。厳罰ふに附すと」

「令ぐらいでは止みますまい。なにせい、戦に勝った驕兵です。酒をさがし出す、財物を掠める、女を攫う。わけて、女漁りはひどいそうで」

「ここの兵もか」

「その欲望一途な餓鬼のざまは、わが足利の兵も新田の部下も、ひとつもので、行儀に變りはございませぬ」

「困つたものだな」

「それが楽しみで命がけの戦争に身を賭けたのだと、放言する輩さえあるほどです。山野へ避難した女も、深窓の諸家の女も、彼らの目には、捕るにまかせた好餌と狙われているらしく、聞くにたえない猥らも、昨今、めずらしくはありませぬ」

ふと。和氏は顔をくもらせた。

「……まだ今日も、お行方が聞えて来ぬな」

「御台所（登子）の御安否でございますか」

「そうだ。新田殿の手でも、合戦直後、八方捜してくれたとは申しているが」

「新田の言など、あてにはなりません。ただ紀ノ五左衛門も鎌倉じゅうの山々から谷の穴まで、毎日、尋ね歩いておりますゆえ、やがては何か手懸りも……」

「ここへ、下向げじょういらい、細川和氏が「——急務第一の任」とばかり、八方手をつくしていたのは、主君高氏の夫人、登子とうこの方かたの捜査さうさだった。

若御料わかごりょう（千寿王）には、おつつがなく御安泰ごあんたい。

と、そのことは、すぐ都の高氏へ飛報してある。

だが主君の胸になってみれば、敵国の中においたままの妻が、生きてか、死んだか、今は一刻も早く安否を知りたいと知っているだろう。

千寿王附きの紀ノ五左衛門も、この数日らい寢食もわすれて、捜しに出ていたが、

「……とんと、聞きうる所は何もござりませなんだ」

と、その夕も、悄然としてもどつて来た。

これまでの間に分っていたことといえば、登子の兄守時が、山ノ内合戦における悲壮な死と、その数日前までは、たしかに登子の姿を、おやしき内で見たという赤橋家の老婢ろうひの言をつかみ得たことだけでしかない。

ところが、また一面には、

「いやいや登子の御方は、それいぜんに、ご自害なされた。——千寿王どのの鎌倉脱走の騒ぎと共に、罪が兄の守時どのかかって来たので、或る朝、お仏間のうちで」

と、まことしやかにいう者もかなりある。

しかし、その説には、紀ノ五左衛門が首を振った。かたく否定しているのである。

「それこそは、ちまたばなし巷話。まこと御自害なら戦後ただちにここへ小市がまいらねばなりませぬ。……なぜなれば、それがしの孫、小市丸と申す童は、わっぱ御台所へ附いて赤橋家におり、さいごまで、お側に仕えていたこと確かでございますゆえ」

要するに、登子の行方は、かいく皆目不明というしかない。——さればとて、生死なにかの確証でもあげぬかぎり、たんに「……わかりません」とは、都の高氏へしんたつ申達のしようもなかつた。

新田方でも同情して、八方詮議中と公におおやけ言つてはいる。だが、義貞には義貞の室もあり、始末もあり、ひとの協力どころではあるまい。——その日の夕も、細川和氏は、ほかの時務で義貞に会い、鶴ヶ岡下から駒で焦土の街のあとを帰つて来た。

「あ、喧嘩か」

「喧嘩とみえます」

「師氏」

「は」

「困ったものだ、もし足利党の武士と新田兵との喧嘩だったら、ぜひをとわず、こつちの者をしよッ曳いて来い。見せしめのため嚴罰に処してくりよう」

彼方の人だかりを見て、末弟の師氏はすぐ飛んで行ったが、どうしたのか、戻って来ない。そして、その男女は、焼け跡のほこりと人の輪をいよいよ濃くして、たえずドツと、笑いどよめいているふうだった。

「はて。喧嘩でもないのか？」

和氏の駒が、そこへ近づきかけたときである。とつぜん、髪ふりみだした一人の女が、つむじのように、浜の方へ走って行った。刎はね飛とばされた者は腰をついて、あツけにとられ、群集はまたまた笑って見送っていた。

「師氏、なんだあれは？」

「ごろんなされましたか。近ごろやたらに多い犬神憑いぬがみつきです。そのあわれな一人でございます」

犬神憑いぬがみつきとは。

いまでいう恐水病、あの狂犬病のことだろうか。

鎌倉の戦後には、それに類した病症の男女が焦土ちまたの巷ちまたにいくとも見られた。

焼け落ちた門、はや、夏草を見せだした瓦礫がれきのかけなどに、よだれを垂らして、よく昏こ々と、うつむいている。

うっかり寄つて、その目に射られたらことである。すぐ咬かみつく。犬のまねして、けんけんと啼き狂う。女は女を忘れ、少年は少年の含がんしゆう羞しゆうもなく荒れ猛たけぶ。

「咬かまれると、咬かまれた者へ、犬神がのりうつるぞ。ぶつ殺すしか癒なほすみちはない」

それを悲しんで、縁につながる家族らが、よく巷で追っかけ廻している図も見るが、当人は骨肉の見さかひもなく、身のかろいこと、狼おおかみか飛鳥のようで、たれの手にもつかまらない。

由比ヶ浜の波は、そうした犬神憑きの死骸を、もう幾十体呑み去っていたことか。犬神憑きはたいがいここへ走つて来ると死ぬのであった。そして浜の砂丘には、身寄りの者が建てたらしい卒都婆そとばが毎日のようにふえていた。

「師もろうじ氏」

「は……」

「供を返せ。駒も一しよに」

「お歸りは」

「すこし浜を徒歩ひろつてみたい。土用のような猛暑だが、この夕風ゆうなぎのひとときで、あとは晩の涼風になろう。なにせい、やりきれん」

「新田殿との駈引きやら、諸国の武士の統合、それに御台所みだいどころのお行方もわからず、さすがお疲れとみえますな」

「いや、疲れとも違う。……ただなんとなく、やりきれぬという気もちだ。武士が口外すべきではあるまいが、師氏、戦とは、外道げどうなものだな。修羅、地獄、かさかさな焼野原」

「兄者あにじや。……ちよつと、お待ちを」

師氏は数歩、あとへもどつた。そして駒を曳いてついて来る後ろの従者たちを、先へ扇ヶ谷へ返してから、ふたたび兄のそばへ来て肩をならべた。

「……ですが兄者、戦はまだこれからでしょう。大殿（高氏）に深いご大望のあるからには」

「むむ、多難だな。……ご前途は」

「新田殿も、お腹では」

「むろん次代の棟梁とうりようは、ご自分ときめておる。そこのごきげんもとりながら、諸国の武士どもの心を、こつそり、足利家の大綱のうちへ曳きこむには……。いや、むずかしい」

「……あ。お気をつけなされませ。咬まれますぞ」

「なんだ、はやほの暗いが」

「さっきの、犬神憑きの女が仆たおれています。海藻うみものように」

「さいぜんの女か」

「べつ人じんかもしれないが」

「犬神憑きは、鳥合とりあいヶ原はらのお犬場の囲いから解かれた犬が、何百匹も狂い出て、それから流行はやり出したものゆえ、亡き高時公の怨おんりよう霊りようにちがいないと、町の男女はみな信じているようだな」

「いや武士たちもです。……乱暴な兵までが、犬神憑きには、乱暴をいたしませぬ」

「妙に、死後この鎌倉では、高時公というと、一様にみな涙を寄せているらしいの」

「逆に、その人を討った新田殿は、冷たい眼で見られがちです。こちらにとっては、まあ倅こせともいえますが」

波音は屈託がない。なぎさに沿そって、二人はだいぶ歩いた。いつか夜の海だった。この日頃こびりついていた焦土ししゅうの屍ししゅう臭におも、やっと心から洗われたここちがする。

「もどろうか」

和氏が言いだしたときである。

「兄者」と、師氏はうしろへ目をやって「——ちよつとお待ちなされませ」

「なんだ？」

「いま私たちを見て、その漁師小屋のうちへ……塩焼き小屋か……ひどく慌てたさまをして逃げこんだ女がいます」

「女？ 女など」

「いやそれが、ここらの磯女ともみえません。眉目の美しい……」

「売女だろう。壇ノ浦のむかしに似て、北条氏の諸家の奥に仕えていた女たちが、あわれ、色をひさいでいるとか」

「でも、そんな者からでも、御台所（登子）のご消息が聞き出されぬともかぎりません」
師氏はもう歩いてそこを覗いていた。屋根には石はのせてあるが強風にあえば吹き飛ばされそうな板囲いとむしろ戸だけの浜小屋だった。

覗いても、よくよく、ひとみをこらさねば内のもようは分らない。小さい灯皿。そして櫓やら網やら雑器などが鼠の巣みたいなワラの中に、骨と皮ばかりなひとりの翁が虚脱したような眼でぼやつと坐っている。

「女は？ ……たしかいま、女がここへ走りこんだはずだが」

翁は唾か。ただ首を振る。

何もいわない。

やや威嚇を用いても、老いた鹿のような湿^{しめ}ッぽい眼をただシヨボシヨボさせるだけだった。

だが、師氏はやがて知った。翁のうしろに、女の裳^もか袂^もかがチラと見え、上から蓑^{みの}をかぶつて打臥している様子なのだ。彼は、はつたと翁をにらみつけて、

「なぜ隠す！ 居るではないか」

と、近づきかけた。

翁は、ぱつと立って、師氏の胸をさえぎった。

「お近づきなされますな。咬みつきたがる病人でございまする」

「なに」

「もう咬まれたら、犬神憑きが、あなた様へもうつりますぞ。狂い出したらどうもなりませぬ。かまわんでおいて下され」

「うそを申せ」

翁は腰をついた。師氏の手がもう蓑をつかんで芻ねのけていたのである。

女は小娘だった。十六、七。眉目みめや身なりからみても北条一族の奥にでも仕えていた小女房か何ぞにちがいない。——しかも、師氏を見上げた眸は、敵意にみちている目であった。

「師氏」

と、和氏が後ろで言った。

「……手荒にするな」

「手荒などはいたしませぬ」

小女房はそれでやや安心したらしくはあるが、何を問われても、翁同様、答えもしない。けれど師氏がよく諭さとすと、だんだん、この二人だけは近ごろ鎌倉じゅうで女漁りや掠奪を事としている乱暴な武士とは違うことが分つて来たらしく、ついにはサメザメと泣き出して、やっとその身の上を語り出した。

戦火で焼けるその日まで、扇ヶ谷の二位どの御所（高時の側室）に仕えていた小女房の棗なつめというものです……と、たえ入りそうな声でいった。

「棗なつめというか」

「はい」

「いくさもすんだのに、なんでこんな浜小屋に隠れているのか」

「……………」

「そうか。まだわしたちを恐^{こわ}がッておるな。むりもない」

師氏は、兄と目をみあわせ、自分らは、足利若御料のお附^{つけびと}人細川兄弟である。だが心配するな、たとえば北条方の縁故であろうと、女子供にまで危害を加えるものではないと、なだめた。

漁夫の翁は、目を白くして、急に小女房の袖を引いて言った。

「おはなしなされませ。棗^{なつめ}さま……いつそお訴えして、お情けにすがらっしゃれ」

敵意の殻にとじていた棗も、それでやっと、何かと口を開きだした。彼女の境遇はこうなのだった。

鎌倉さいごの日――

彼女の仕えていた二位どの御所は、女御所なので、あの炎に会った泣き叫びも、ひと通りでなく、わけて二位どのには、高時との仲^なに生^なした当年九ツと七ツになる二人の和子があつたので、わが身もなく、兄の万寿^{まんじゆ}を、五大院宗繁にあずけて先へ逃^にがし、弟の亀^{かめじ}

寿は、諏訪三郎盛高が、これを負って、遠くへ落ちた。

二位どのは、それを見てから、炎の中で自害した。

棗は、どう生きたのか、わからない。——われに返ったときは、鎌倉はなく、見るのは敵軍の兵だけだった。その敵兵に色を売って生きている旧主の友の女もあれば、良人を敵に討たれた後家が、その敵に身をまかせているのもある。否めば生きていられぬ畏怖は男たちの生き方にも変りがない。それもただの庶民ならばだが、そのご巷に聞えた五大院宗繁の噂だけは、ゆるせなかつた。彼女は憎んだ。

五大院宗繁という侍は、生前の高時には、ずいぶん厚く用いられ、二位殿からもまたなき者と愛されていた。さればこそ万寿君の身をゆだねられて落ちたのだろうに、近ごろ、我慾に目がくらんで、新田義貞のもとへ密訴して出た。

義貞は仮借なく、すぐ船田ノ入道をさしむけて、わずか九ツでしかない万寿を、相模川のへんで首斬らせた。また、これに味をしめて、

「高時の子は、も一人いる」

と、新田方では、さらに弟の亀寿（後の北条時行）の行方を、八方、重賞を懸けていま、詮議中との評判だった。

「……でも。その高札こうさつが、私の力になりました」
 棗は言った。

無残な鎌倉の焦土が、ひとりの乙女のなかに、こんな不敵な眸を作っていたかと、怪しまれるような強さで、

「……生きよう。生きぬいて、兄の盛高のところへ行き、亀寿さまをお育てして、もいちど、鎌倉へ帰ってみせる。そういう気もちになったのです」

と、怯ひるみなくいうのであった。

「盛高とは？」

和氏がたずねた。

「——高時公の二男亀寿どのを負うて落ちた諏訪三郎盛高のことか」

「ええ……」と、棗は、はじめてニコとした。それもやや誇らしげに「そうです。私の兄

盛高は、五大院宗繁みたいな腰抜け武士ではありません」

「国元はどこ」

「信濃です。兄と共に、私も小さいとき、信濃から来て、御所へご奉公にあがったのです」
 師氏が代って訊いた。

「……では、そなたの兄、諏訪盛高が落ちて行つた先は信濃だな」

「たぶん……」

なつめ

棗は、すこし口を濁して。

「そうだろうと思ひますが」

「して。この浜小屋の漁夫は、何者か」

「見たとおりのよいお人です。むかしから独りぼつちでここにいました。あるとき、二位のお局さまが、浜御遊はまごゆうのとき憐れんで、爺じいよ、おまえの漁すなごりしたお魚はなんと御所へ持つておいで……と仰つしやつて下されてから、一匹の鯛たいでも、一卜やく策さくの雑魚ざごでも、採とればきつと御所のお台所へ持つて見えました。それで私たちとも仲よくしていたおじいさんです」

横よこで、翁おきなは涙をふいていた。

嘘うそがない。真情があらわれている。いまの武士間にも巷ちまたにもはや廃すたれきつているかに見える、人と人との信頼や温め合いも、まだ、こんな磯小屋の孤独な翁や乙女の中には残つていたかと眩まぼゆくおもう。——もう訊かずとも、棗なつめが、ここの翁おきなに匿かくまわれているわけもわかつた。

「棗とやら」

こんどは和氏が。

「安心して、ほんとを申せ。そなた、胸では、自分も信濃へ落ちて行きたいものと念じているのである」

「ええ。……でも街道の木戸はどこも通れません」

「ム、軍兵でな」

「それに兵隊の目も恐いのです。何をされるかわかりません。おじいさんは言ってくれませぬ。犬神憑きじやとわしがいう。人が来たら犬神憑きの真似おしやれと。……生きるためには色をひさぐ女子おんなもある、それを思えば何でもない、そのうちわしが何とか小舟を手に入れて、武蔵国の遠くへ漕こぎよせ、きつと無事に逃がしてあげる。そういつて力づけてくれていました。……運命でございましょう。お恨みはいたしません。お二人の目に見つかった上は、もう覚悟をいたしました」

棗は、目をふさいだ。

もういうこともないように。

ほとほと、和氏は、そのけなげさに見とれてしまった。故郷三河の細川村には、ほぼお

なじ年ごろの娘がある。思いくらべて、心をうたれずにいられない。

「師氏」

「はい」

「貧しい翁の漁り舟も軍に取られてしまったとみえる。こよいのうちに、どうかしてやれ」

「舟を。……与えるのですか」

「そうだ。棗とやら、それへ乗つて、どこへなと翁に送つてもらうがよい」

「えつ。で、では」

ぼろぼろ……と二つの顔から涙が散った。感情に富むらしい乙女の泣き顔も、皺くちやとなつた翁の嗚咽おえつも、せつな自分までがつりこまれそうで、和氏には見るにたえないものに見えた。で、師氏がな何か、ふたりへ告げている声もあとに、和氏は先にむしろ小屋を出て、もう砂浜の彼方をうつつない姿で歩み去っていた。

「兄者」

追いついて来て。やがて師氏が、ぼそツといった。

「つい、うかと、御台所のご消息などのことは、訊くのも忘れてしまいました」

「いや、訊いても知るまい。さつそく小舟一つ廻してやれ」

「こころえました。ですが兄者、思わぬ者に会いましたな」

「ムム、あれも一つの犬神憑きか。いわば美しい犬神憑きともいえるだろう」

青空文庫情報

底本：「私本太平記（五）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年4月11日第1刷発行

2009（平成21）年10月1日第25刷発行

※副題は底本では、「新田帖《につたじょう》」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2012年11月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私本太平記

新田帖

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>